
続・knight of monster ナイト・オブ・モンスター

神戒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続・knight of monster ナイト・オブ・モンスター

【Nコード】

N1050X

【作者名】

神戒

【あらすじ】

ジャン・スタイルは幼い頃に、ケンタウロスの女騎士に命を助けられた。

「強くなれ」

その言葉から、彼は人生を決定する。

強くなり騎士になる。そう決意して身体を鍛え、数年が経過する。

やがて肉体、精神共に成熟した少年は、あの女騎士が属しているという国にやってきたのだが――。

出会う女性は異種族ばかり。

ボーイ・ミーツ・人外ガール。ここに登場。

とりあえず色々とやりながら気長に続けます。

気長に生暖かい目で見守ってください。

ブローグ

春先のまだ肌寒い季節。しかし日中は、上着を羽織らずとも外を歩ける程度に、ほどよく温かい。

春の日差し。

されど、その空間だけは異様なまでに熱かった。

大地は焦げ、熱を孕む。その上に立つだけで肉体は予熱で中までじつくり火を通してしまふようだった。

青年は構えを解いて幅広の剣ブロードソードを振り下ろす。が、対応する人の手が――そこから鋭く伸びる長い爪が、その最中で剣の横っ腹を叩いて弾いた。

甲高い、金属音が響く。

同時に対象を斬り裂かんとしていた刃は、ちょうどその対象、目の前の女性の脇に落ちた。刃は情けなく焦げた石畳を勢い良く叩いて打撃し、砕けぬ故に跳ね返る力が腕へ戻る。衝撃が両腕をビリビリと痺れさせ、

「ちよつとは面白かったわよ」

彼女はそう言って、青年の顔面を力強く押しこむように掴んだ。視界は暗転し、そして華奢な腕なものにも関わらず青年にはとても太刀打ちできぬ暴力が、彼の行動を束縛した。直接的な攻撃からではなく、ただ純粹に己の力を誇示するだけで、適わぬと理解させていた。

そして腰に引きつけた腕。貫手を作る手は依然として爪を鋭くさせたまま。

「もっと強くなってから遊びたかったわね」

毛皮のベストを羽織り、頭には中身のない猪の顔を乗せる。ネットのような網目だけの衣服をまとい、エナメルのスボンを履く。妙に露出度が高く、またそのあらわになる肉々しい肢体には目のやり場に困ったが、今ではもうその姿すら見えない。

黒目しかない瞳がギロリと青年を睨む。

もう終わりだ、ここで死ぬ。

そういつた思考を、恐怖の中で、あるいは絶望の中ですら無く、どこか他人事のように感じる自分に思わず呆れた。

——体の中の、魂や心といったモノが熱くなるのを感じた。

ここで死んだら後ろの少女はどうなる？ 新たな獲物としてこの女に殺されるだけではないか。

冷静な思考はそう告げると同時に、されど己の死の予感を認めなかった。

そう、おれは死なない。

漠然とそう思う。

根拠なんて無い。

だが死なない。

「おれは、お前の暴走を止める……っ！」

女が腕を振り抜いた。

同時に、頭の中のもっと奥、芯たる部位が熱く、熱く、熱くなるのを感じて——。

「やっと来たわね、だけど……ッ！」

「降り注げ！ サウザンド・ウェイブ 数多の疾風ッ！」

女が楽しい微笑を崩して表情を歪めたのはその刹那だった。

顔を掴む腕を少し引き、そして突き飛ばすように青年を弾いた。

同時に大地を弾いて彼女は後退。その場に僅かな残像を見せて、彼女は既に石畳に傷一つ無い位置で跪いていた。

その直後に降り注ぐのは、半月状のかまいたちだった。

標的を仕留められずに虚空を切り裂き大地を刻む幾多の真空波。

彼は勢い良く背後に吹き飛ばされながらそれを見て、

「っ？！」

壁もないはずの位置で、何かが背中を打った。滑空を遮る障害物は人の形であり、そして力強く青年を受け止める。やがて慣性の力も失われて着地すると、その”人の身体”のあった部分は妙に高い

位置だった事に気づく。

「下がっている、一般人」

凜とした声が届く。

透き通るような金髪を持つ女性。それを後頭部の高い位置で一纏めにし、身体には甲冑を纏う。装備する武器はその身の丈ほどの槍。馬”の下半身は、薄い生地の下着を履いたうえに鉄の佩楯はいだてを纏って守られる。

彼女は”ケンタウロス”と呼ばれる、異種族だ。人の上半身に、馬の下半身。その異形の姿は、されど力強く凛々しく雄々しい。彼女はケンタウロスなれど、この国を守護する王立騎士団の一人だった。

「き、騎士様……！」

ケンタウロスが睨む先、”獣人族”で猪科の女性は、前屈姿勢で様子を伺っていた。

青年がそれを確認みの中で、気配は声と共に現れた。

「そうそう、お子ちゃまはあたしたちに任せればいいのよ」

青年を挟むようにして現れた女性。

その身の丈は一般人とほぼ同等だが、その両腕は人ならざる鳥の翼だった。さらに羽毛滾る腿を経て、足さえも鳥のソレである。彼女も同様に異種族であり、鳥人ハルピュイアと呼ばれる存在だ。

人を凌駕する聴力、視力を持って尚飛行能力を有する。また種族としてもひどく友好的で、だが戦闘能力はそうそう大きく離れているというわけでもなかった。

「でもまあ、こんなに出てくる必要はないのでは？」

うなるツノを持つ女性は、それ以外にも規格外に豊満な胸と、そして獣を直立させたような毛皮を纏い蹄を持つ足が特徴的なのはミノタウロス。甲冑を装備できないのか身体に張り付くような衣服一枚を着て、腰巻を装備するだけの姿。さらに異種族の特徴として怪力が挙げられ、それを誇示するように身の丈ほどの戦斧を肩に担いで鳥人の隣に立った。

「いいんじゃないの、暇だしな。それにアイツだって常連客だ、門前、っつーか門内だけど、さすがにそろそろもてなすべきじゃないか？」

ケンタウロスの影になる位置に来たのは、一際小柄の少女だった。明らかに自分よりも巨きな大剣^{おお}を背負うが、その剣先は既に地面を削っている。が、彼女ドワーフ族の作る道具の全ては逸品であり、『魔術』を用いて特殊な効果を持たせる道具ばかりが生まれている。例えば筋力を増加させるものもあれば――彼女の大剣のように、硬度、密度、素材がそのままでありながらも質量だけを減らす事も可能である。

「というか女郎蜘蛛^{おひめさま}が待機してるし、ちゃっちゃと終わらせない？ 昨日徹夜で、彼女イライラしてんのよ」

そう提案したのは、全身をゆでダコのように真っ赤に染め上げる女性だった。

頭に対となる二本のツノを誇り高く聳えさせるように生やす彼女は、胸当てとショーツだけを身につける大胆なドワーフの隣にいた。

彼女、鬼族^{オーガ}は尋常ならざる身体能力を持つ。純然たる戦闘能力ならばこの集団の中でも随一であり、それゆえに切込隊長^{トップアタッカー}に任命されることが多い。が、その場合は切込隊長だけの活躍で戦闘が終えると言われるほどに強靱だ。

まさに鬼というくらいに強い。容赦もない。

――ケンタウロス、鳥人、ミノタウロス、ドワーフ、鬼。

総数五名の女騎士。それぞれ人に似て非なる者でありながらも、その姿は圧巻だった。そして異種族と呼ばれる存在でありながらも、王立騎士団の屈指の実力者だった。

やがてそれぞれが揃い、構える。

「ま、そういう事だからキミらは下がってなさい」

槍を構える。同時に、ケンタウロスの雰囲気が一気に変わった。殺気が迸る。鋭い眼光が、まるで獣人族の女性を射ぬくようだっ

た。

「さすがに予想外。私もここで退かせてもらわっ！」

そう言うが早い——魔術か、単なる身体能力か。彼女の言葉を理解する頃には既に、その姿は忽然と失せていて、

「じゃ、ジャン！」

ぷつりと、緊張の糸が切れたようだった。

首を締められたように、意識が不意に遠のく。深淵に蹴落とされたように身体が地面へと沈むその中で、背後で待機していた少女がそう叫ぶのを聞いて——青年、ジャン・ステイルの意識はそこで途絶えた。

試験前夜

ここアレスハイム王国が存在する大陸の地平線上がひび割れ巨大な”溝”が現れたのは、今から約一五〇年前。全世界を混乱の渦に陥れた世紀の大地震を伴ってそれが突如出現したというのは、この世界で生きる人間ならば知らぬ者はいないほど有名な話だ。

溝は階段状になっている。そしてその深淵の最中、階段の突き当りには巨大な門扉^{ゲート}があった。

そこから現れたのは無数の『異種族』。

架空の生き物だと信じてきたケンタウロスや鳥人、ミノタウロス、ドワーフ、鬼……さらに無数の異様な、半分は人であったり、完全な”魔物”^{モンスター}の風体をするそれらが現れた。

彼らは知能を持つ。人間と同等、あるいはソレ以上の超高度な知的生命体だった。

そして彼らが望んだのはこの世界。

ふっかつけたのは戦争。

ではなく、友好的な関係を築く為の慈善活動だ。^{フィランソピー}

荒れ果てた土地を潤し、枯れ果てた河川を潤し、汚れた大地、海を浄化。魔法のような業の数々で、人類の文化は加速度的に進展して、今がある。

持つもの、持たざる者は居るが——個人が持つ、根拠不明寮の奇跡の業である『魔法』が、個人の才能^{センス}が無くとも努力次第で使用可能になる『魔術』が人々の手に渡ったのも、その異種族の出現と同時期だった。

魔法とは、一人が一つだけ持つ特異な能力。だが持たざる者が殆どであり、全人口を見てもその一割に満たぬ存在である。

魔術とは、先ほどの真空波がそうであるように、『精霊』という者の力を借りて起こすもの。例えば『炎』や『雷』、『水』や『氷雪』、あるいは『具現化』を可能とする業であり、それは肉体に紋

様を刻んで”世界と契約”する事でまず扱える段階になる。

が、『サウザンド・ウェイク数多の疾風』のように本格的に使うには、惜しまぬ努力が必要となる。

——世界各国。それでもやはり異種族という存在ものを拒むところは多い。

世間に馴染み、『魔法使い』を主として構成する騎士団は各国に必ず在るものの、そこに異種族を含めるのはやはり異例な事だった。それは、ここアレスハイム王国が、その異種族たちとの外交官的な役割を持つことが理由だった。

たえ異種族と人類が対立したとしても、ここだけは中立を貫く。やくそくそう契約したのは、やはり今から一五〇年前だった。

このジャン・ステイルは、幼い頃にどこぞの帝国軍によって故郷を焼き尽くされた。強奪して食料、水を補給。ついでに金銭を奪い、村人を殺害してから村々を焼き払っていった。追手はその村での補給が不可能になり、さらにその残虐性を見て追跡を諦めたという。

彼はその追手の部隊に、その中に居たケンタウロスの騎士に生き残っていた所を助けられたのだ。

「ジャン、またトレーニング？」

そう声をかける少女も、同じ故郷出身の生き残りだ。

二人はそれから近く、この王国の支援下にある街の児童保護施設で十二歳まで育った。義務教育の制度のお陰で、彼らはまともに文字を読み書きでき、極めて一般的な幼少時代を過ごすことが出来た。「ああ、身体がなまっちまうからな」

それからは自立生活だ。

二人でドワーフが営む炭鉱、鉱山、採石場で働き、ジャンは現場仕事を、『サニー・ベルガモット』は寮で寮母手伝いとして過ごしてきた。

かくして生き抜き、六年後。

十八歳となる少年少女は、騎士になるべくこの王国にやってきた。騎士の求人は毎春行われる。募集要項は極めて簡単で、『十八歳以上』であり、『心身共に健康』で、『文字の読み書き』ができ、『特殊技能』を有すること。

特殊技能は碎いて言えば、魔法の有無である。

サニーは簡単ながらも『治す』力を持つ。

ジャンはと言えば――。

「つと、一先ず腕立て伏せは終わりだ」

規定の回数を終えた所でジャンは起き上がり、肩で息をしながら質素な寝台に腰をかける。

共同住宅で寝食を共にするサニーは、そんな彼の自室で、彼の隣に腰掛けた。

セミロングの茶髪が揺れ、琥珀色の瞳がジャンを捉える。尖る長い耳は、彼女がエルフ族である証拠だった。

容姿端麗、頭脳少し明晰。さらに弓を自在に扱い、治癒の力を持つ。

天はいくつ彼女に与えれば気がすむのだろうかと嘆いたのは、ジャンが物心ついたその時だった。

彼が持つものといえば、ドワーフ族から饞別にと渡されたブロードソードが一振り。特別製だから魔術を扱う為の道具にもなるが、それだけだった。

「もう、明日が試験なんだからね？　少しは休まないとダメだよ」立ち上がり、机の上に乱雑に置かれる赤い本を手取る。表紙には『毎日十分勉強するだけで絶対に受かる！　王立騎士入試対策』傾向と対策』と立派な御託が並べてあるが、僅か一時間で理解できるほどに内容は薄っぺらく、一般常識程度の事しか綴られていなかった。

こういった商法があることを、鉾山で働いていた彼は知らない。購入時の店員の嘲笑の意味を理解したのは、この本の第一章を読み終えた頃だった。

昼食三日分の値段が一時間で潰された。

しかも一切有意義にすらならない内容で。

「わかってるけどさ。落ち着かなくて」

すり切れるほどに読んだと思うそれを、また読み始める。

いくら内容が稚拙だろうと、もしかするとコレが本当にヒントになるかもしれないのだ。とりあえず頭に入れておくだけでも損にはならない筈だ。

——意識を失った後は、この寝台の上で寝ていた。共同住宅まではあのケンタウロスが運んできたらしく、それから半日ほど眠り続けていたらしい。

本当なら礼を言いに城まで行くべきだったが、どのみち騎士の入試試験があるのだ。わざわざ赴かなくとも逢える、はずである。

ちなみに試験で合格してもすぐに戦場へ、というわけではない。

二年制の学校に通い、そこで知識を蓄え肉体を鍛える。そこで卒業して晴れて騎士なのだ。

「わくわく？」

「そわそわ」

「でも楽しみでもあるんでしょ？」

身体にひつつき、体重を掛けるようにしてサニーが言った。

「まあな」

自分のこれまでの力が試せる。

ケンカもなく、ただ鍛えるだけ鍛えてきた今までの全てを出せるのが、明日の試験だ。

心配でもある。

楽しみでもある。

しかしやはり、

「サニーは？ 運動神経悪いってわけじゃないけど、得意でもないだろ？」

彼女が一番心配だった。

騎士を目指した理由が『ジャンが目指すから』であり、仮にジャ

ンが落ちれば『辞退する』という。騎士を舐め腐った考えだが、そんな彼女がこれまで支えになってくれたのは確かだった。

だからサニーと一緒に騎士になりたい。

あの騎士に恩返しをしたいという事もあったが、今ではそれが一番の願いになっていた。

妹のような存在。ゆえに、たった一人しか居ない大切な家族だ。

互いに助けあってきたからこそ、その心は繋がり、今に至る。この触れ合いだって男女の性的な意味ではなく、もはや動物のスキンシップのようなものだった。

「わたし？ そうだね、わたしはねえ、実はジャンに隠れてトレーニングしてたりして」

「へえ、どんな？」

「えへへ、筋トレとか、あとね、素振りとか」

「割りとちゃんとやってんだな。頼んでくれればもつと指導とか出来たのに」

「やだよ、だってジャン、人一倍頑張ってるからあんまり迷惑かけたくなかったもん」

「いや、そんな事……」

「次の日仕事なのに、夜中に抜け出して走りこみしてたり」

「そ、それは……」

思わず口ごもる。

まさか見られていたとは思わなかった。

それこそ、彼女の言葉を借りるが、人一倍頑張ってるサニーに心配を掛けぬために影でひっそりとやっていたのだが、それは無駄な努力になっていたようだ。

お陰で今では、年齢の割には随分とがっしりとした体形だし、体力だって自信がある。だが基準がわからない以上、試験に余裕を持てることはなかった。

「でもほら、ジャンは頑張り屋さんだから絶対受かるよ！」

彼女がいるから、ガチガチに緊張して集中できなくなることがな

い。

「ああ。サニーもな」

「えへへ、ジャンに言われると嬉しいな」

言って、頭を肩に乗せる。この上なく嬉しそうな顔で、彼女はこのひと時を過ごしていた。

その後、適当なトレーニングを二人で行い、夕食を済まして、少しばかり早めの就寝となる。

適度に疲れた身体が休息を求める。そのお陰で高ぶった精神はいくらか落ち着いて、夢の中へと落かけていた。

サニーが、「どうせだから一緒に寝る？」と聞いてきたが、なにが”どうせなんのか”分からないし——彼女だって年頃の娘だ。淫らな獣となる男の本能を殺しきれていないジャンが、そんな事を二つ返事で許可できるわけがなかった。

いくら妹のように思っていたって、女の子のやわらかさにはドキドキするし、髪の毛の石鹸の香りには虜になる。今まで仕事もあったから尋常ならない運動量で誤魔化してこれたが、今度はそうにはならないだろう。

騎士を侮っているわけではないが、それでもあの炭鉱や鉱山での苦行じみた活動は無い。もしそうになったら、

「死ねるな……」

ドワーフの力持ちが大勢いたからこそ、それらが創りだす特別な魔術稼働の道具があつて尚あのキツさだ。同等の苦行など、この街で一ヶ月ほど過ごした適度な気楽さからそっちへなんて、とても堪えられるきがしない。

もっとも、それは杞憂に過ぎるだろうが——。

コンコン。

不意に音が、静寂を司る自室に響いた。

コンコン。

大した間も置かずに、もう一度。

扉ではなく、窓を叩くような軽い音。

壁に寝台が添えられるような配置だ。窓は、その壁に埋め込まれている。だから思わず目を開けてそちらに視線を向ければ、見えてしまうのだ。

月明かりを遮る、妙な人影。

息を呑む。

微妙な尿意ゆえに我慢していたことが悔やまれるほど、心臓が凍りつき、全身の血液が凍てついた。

「っ……!？」

悲鳴が出なかったのが、不幸中の幸いというものだろう。

コンコン。

ノックは繰り返された。

『ちよつと、開けてつてば!』

窓越しにこもる声は、女の子のソレだった。

強気に、命令口調。

どちらにせよ悪い予感しかしなかったが、これ以上ノックを繰り返されてサニーを起こすわけにもいかない。

ジャンは身体を起こして布団を剥ぐと、寝台の上で膝立ちになってカギを開け、窓を開け放つ。と共に、その影は勢い良く部屋の中に飛び込んできた。

寝台を飛び越えて床に着地。両手を天井高く伸ばして直立。まるでその妙技スタントを褒めると言わんばかりの笑顔をジャンに向けていた。

「おーすごいすごい」

やるせない拍手だった。

だというのに、彼女はともうれしそうな笑顔だった。なにやら胸が痛くなるが、ジャンは気にせずに続けた。

「どちらさまで？」

「あ、えーつと……あたしの名前はテポン」

コウモリのような羽根を折り曲げて収納する。ソレ以外の特徴といえば、炎のように真っ赤な瞳や、サニーといい勝負の少し小柄な

女の子らしい肉体程度しかない。またエナメル質の、腿まで伸びる妙に踵の高い靴や肘までの手袋という異文化の服装しか無かったが、この街で出会った異種族の中で一番人間に近い少女だった。

何族なのかと聞いてみたかったが、異種族とそれほど深く関わった経験がない。ドワーフはいい歳の中年男性——といっても寿命の関係で殆どが百歳超え——だったから、会話は普通の人間とあまり変わらなかった。

だから”違う部分”に関して、どこまで聞いて良いのかが未だに分からないのだ。

異種族初心者というところだろう。

興味が人一倍あるのは、いつかのケンタウロスのおかげかも知れない。

「お、おれはジャン・スタイル……。おれに何か用？」

「え、まあね。ほら、この前、獣人のボーアと戦ってたじゃない？」

「ボーア……？ あの炎の魔術使ってたヤツ、だよな」

「うん。知らないと思うけど、あのヒト毎月、不規則だけどね。来るの。街を壊すけど、門の近くだけ。人を殺すけど巻き込まれたヒトだけ。確実にアブないんだけど、すぐに逃げちゃうから捕まえないのよね。なんで来るのか、理由がわかんないし」

彼女は丁寧に説明してくれる。

自分より少しばかり年下に見える彼女はやはり華奢で、だが異種族ならではの身体能力を持つのだろう。

だが、わざわざ聞いても居ないことを補足してくれるあたり、

（こいつ、イイヤツかも）

そう思った。

「あ、それでね。特に用ってわけじゃないけど……あんだ、騎士を目指すんでしょ？ 明日試験だし」

「ああ、その情報をどこで仕入れたか甚だ疑問だが、その通りだ」
寝台の上であぐらをかく。彼女は腕を組んで、ジャンを見下ろした。

「警ら兵のなんとかってヒトが教えてくれた。あの、ヒゲがすごいヒト」

「隊長じゃねえか……」

地獄耳のエミリオの名を関する彼は、街の、そして国が保有する軍の主力として活躍する警ら兵の隊長だ。もっとも全てを統率する隊長という訳ではなく、いくつか分けられた部隊の長である。だがやはりその実力は折り紙つきで、特に周囲に近づいた敵の足音を聞き逃さず、逆にそれを利用して勝利を収める——奇襲対策のプロであることから、その二つ名が冠されていた。

だからもちろん、ジャンの話聞いていてもなんらおかしい話ではなかった。

「えっと、テューポーンつつたっけ？」

「テポンよ！ あんたの脳みそ醗酵はっこうしてんじゃないの？」

「おお、おれの頭は二酸化炭素でパンパンだぜ」

「もう、冗談はそこまでね」

腰に手をやり、呆れたように首を傾げる。

もしここでため息を吐かれたとしても、寝ぼけた頭だから傷つくことは無いだろう。多分。

「あたしはもういいんだけどね。ただウチの連れが騎士志願で、たぶんあんたと一緒に試験を受けることになるのよ。素質はあるように見えるんだけど、どうにもヘタレっていうか、気が弱いつてわけでもないんだけどね……」

ははん、とジャンが鼻を鳴らす。

そういう事かと彼は察した。

「良かったら試験だけでも仲良くやってくれない？ 名前はトロス。黒い髪で、見た目はニンゲンそのもので、まあそわそわしてるから見れば分かるわよ」

「トロそうな名前だな」

「せっかちだね。まあ、飽くまで良かったらだし、気にしないでもいいわ。邪魔したわね」

なんでもないような顔で彼女は寝台を飛び越えて、窓のサンへと跳躍した。身軽なジャンプで、まるで浮遊するように優しくそこにとどまる。窓の枠を掴んで身体を支え、首をジャンへ回した。

「せっかく起こされたんだ。仲良くやっとかよ、テュポーン、だっけ？」

「デポンよ。ふふ、ありがとう。ジャン・ステイルね、覚えとくわ」

窓の外へと身を投げる。その直後にコウモリの羽根を広げて、風を起こす。と、風もないのに空中でとどまり、彼女は頬を赤くして微笑んだ。

「騎士試験、受かりなさいよ。あたしは”まだ”だから、今年受ければやさしくしてあげる」

「よく分からないがありがとよ。風邪、引かないようにな。薄着だからさ」

「あたしは大丈夫よ。年中コレだし。あんたもね」

「あいよ。おやすみ」

「ええ、おやすみなさい」

彼女は控えめに手を振って、また羽根をはためかす。するとその身は瞬く間に上空高く浮かび上がって、闇の中に影すら残さず消えていった。

ジャンはそこで寒さが染み込んだ身体を震わせてから窓を閉め、カギをそのままにして寝転んだ。

ただそれだけの会話で疲れたのか、その余韻もそこそこに、ジャンの意識は可及的速やかに夢の世界へと転げ落ちていった。

入試試験

「ねえジャン見てみて！ お城だよお！」

「ああ、いつみてもすごいよな」

噴水のある広場を抜けて、大通りをしばらく歩いた先に、半円に広がる広大な空間がある。それだけでも十分驚きだというのに、その突き当りには門があった。

そしてその向こう側にあるのが巨大な城だ。

見上げるだけで首が痛くなるような、荘厳で威圧的な雰囲気。でありながらも上品で、自分なんかを踏み入れて良いのか戸惑うほどに格式高いのが見るだけで理解できる。

少し高い丘の上に立っているのか、城は見下ろすように、あるいは見守るように街の奥にある。門の付近には警ら兵が槍を天に突きあげて構えており、その脇には大きな看板が設置してあった。

「えーっと、『試験会場はこちらです』だって」

矢筒と弓を背負いながらジャンの手を引く彼女は、そう教えてくれる。

同様に剣しか持たないジャンも、彼女に連れて行かれるままに、その開け放たれた門の中へと進んでいく。門の警ら兵に会釈をする、「頑張れ」だの「期待している」だのと妙に励ましてくれる言葉に嬉しく思いながら、やがて敷地内へ。

——この街に來た当初は観光客気分でぶらぶらと歩いてみて回ったが、それでも城の中ばかりは入ったことがなかった。

そしてまた、まさか試験が城の敷地内で行われるなんて考えても見なかったが……。

「うわあ、けっこう人いるねえ」

「本当に。百人以上いるんじゃないか？」

「でも大丈夫だよ。ジャンなら、ね」

「あまり自信を持ちすぎるのもどうかと思うけど。一緒に合格する

んだ、サニーだって大丈夫さ」

一応、合格すれば学校に通うことになるのだ。学校からさらに騎士へと昇格する時点で”ふるい”にかけられるとしても、騎士養成学校に入学させるのは一定数という数が決まっているはずだ。

となれば、一クラス三〇人前後だとすれば……推測できるのは三〇人から六〇人が限界。何クラスも育てる時間も無いだろうし、多ければ多いほど国の負担も大きくなる。

そしてまた、ジャンのように自分が”特殊技能”^{まほう}を使えるか否かすら分らない者も多いはずだ。

一応試験内容に『適性検査』があり、その力が扱えて居らずとも、本質的にはその力を持っている。その有無を確認によって騎士になれるかが決定的になる。が、その検査は最終試験で午後に行われる。恐らく精神、肉体ともに健常であれば警ら兵として推薦するためなのだろう。

ともかく、今は考えても無駄な事だ。

筆記試験はあるかどうかも疑わしいし心配だが、なるようにしかない。

今までだってそうだった。

ジャンはそう帰結すると、大きく息を吐いて、愛しい妹（仮）の頭を優しく撫でてやった。

「頑張れよ、サニー。試験中はずっと一緒にいてわけにはいかないし、自分の力を試すしかないんだからな？」

「もう、子供扱いしないでよ！ 私だってね、結構やる時はやるんだよ？」

「はは、頼もしいな。それじゃおれは人探しするから、適当にそこらへんぶらついててくれ」

「人探し？　じゃあ私もついてく！」

「んー、まあ、大丈夫か……な？」

トロそうな名前でせっかちという印象しかない相手だ。

黒髪ということだったが、今朝起きた時には窓に手紙が挟まって

いて『金髪に染めたみたい』との追加情報があつたから、それを念頭に置いて探せば良いのだろうか……。

周囲を見渡せば人だらけ。

それでも門のすぐ内側の、城の敷地内に見ればちょっとした空間に集まっている彼らである。

甲冑を着こむもの。ラフな、布の服だけで剣を持つ男。あるいは外套姿など。

また異種族は集団の二割ほどしか居らず、まるで猪をそのまま人型にしたような男や、トカゲのような皮膚と尾を持つ蜥蜴人^{リザードマン}族の女など。そう種類が多いわけではなく、他にはドワーフ^{ハルビュイア}の少年や鳥人の少女などありふれた種族ばかりだった。

周りを見るだけで、この中から探すのかとうんざりする。

だがその中で、一人だけ妙な男を発見した。

「ねえジャン？」

サニーもそれを視界に入れたのだろう。不安気に、手を握る力が少し強まるのを感じる。

「すまん、たぶん探し人見つかった」

今度はジャンが手を引いて、人ごみをかき分けその男へと近づいた。

短い金髪頭で、前面にボタンがつく黒い外套^{コート}を着る男。彼は落着かない様子で、その場をグルグルと回転していた。

なぜ引き受けてしまったのだろうと後悔しても時既に遅し。

保護者は随分とまともな風だったのに、こっちがコレでは——そう思っても、約束は約束だ。

物理的に無理というわけではないのだから、いい加減決意するしか無いだろう。

だから胸いっぱい息を吸い込んで、口を開けた。

「あ、あの、さ。ちよつといいか？」

男には妙な斥力^{ちから}があるらしい。

彼の周りには人がおらず、半径一メートルほどだが空間ができて

いる。

人ごみがあまり得意ではないジャンにしてみれば羨ましい限りだが——こういったいかにも変だという条件付きで得られる力だったら願ひ下げだった。

だからその、ちよつと変な人に声を掛けた刹那に周囲が無意識に少しだけ緊迫するのが、彼にも良くわかった。本来ならばそこに居た人間なのだから。

果たして男は回転を止めた。

ちよつとジャンと対面するように停止し、恐らく長い間回つていたであろう筈なのにしっかりと、鋭い視線を彼に向ける。

瞳は燃えるように紅く、肌の色はジャンと同じ。背中にコウモリの羽根がある以外に、ソレ以外の特筆するべき特徴は一切ない。まさに人間そのものだ。羽根さえなければそう間違えていたことだろう。

「なんですか？」

男は冷淡に、直球に聞く。

せつかちで、どこか人見知りであるような事を聞いたが気のせいだったか。

そう思つたのも束の間、そんな男の膝は驚くほどに小刻みに震えていた。

気がつけばガチガチと顎を震わせて歯を噛みあわせているのすら見える。

純粹に、彼はジャンに怯えていた。

「あー、いや。そんな身構えないで欲しいんだけど……ほら、キミ一人だったし、もし良かったら試験始まるまでだけでも話したいなつて思つてさ。おれも緊張しちゃつてて」

ははは、と発した乾いた笑いは、果たして良い方向に事態を招いた。

「あ、あー！ だよね、僕もちよつと緊張して、落ち着かなくてさ。知り合いも居ないし、姉さんが大丈夫つて言つてたけど、でも全然。

ガチガチで」

「はは、良かった。おれはジャン・スティール。んでこつちが」

「サニー・ベルガモットです。よろしく」

代表してジャンが手を差し出すと、彼は快くソレに応じた。

「僕はトロス。人間たちとはちよつと違^きうけど、仲良くしてくれたら嬉しいな」

街の通りのような幅広の道。その両脇は芝生が敷き詰められており、城に近づく位置になると噴水があるちよつとした広場がある。

それからややあつてからやってきた甲冑姿の男が約百人余りの集団をそこにまで移動するように指示し、また待機の命があつた。

「最初は何するんだろ。スティール、分かる？」

「ああ、一応募集用紙みたいな貰^{もら}ったからな」

トロスにきかれて、ポケットから持参した紙を取り出す。

そこには集合時刻と場所、そして行われる三つの試験がおおまかに記されており、恐らく自主的にここに集まつた者はそれを持っているだろう。

姉に為す術もなく連れてこられた彼は持っていないし、それも仕方が無いことだ。

「えーっと、第一次試験が身体検査。次が体力で、最後に適性検査だつてよ」

「身体検査か……。ねえジャン、私の検査員が男の人だったらどうしよう」

「自分の並ぶ列を間違えることで回避できるから安心しろ」

「でもそれだといふ時間^{ひま}ができるよね？」

「まあダベってりゃいいだろ。次が始まれば招集かけるだろうし」

そう提案した最中の事だった。

「注視せよ！」

甲冑姿の男がそう叫んだ。

噴水の縁に仁王立ちして、まるで英雄ごっこをして遊ぶ子供のよ

うに腰にてをやつて。

兜を外して足元に置き、鼻の下にちよつとしたヒゲを伸ばした中年男性は、瞬く間に静まり返る集団を見て頷いた。

「ここに居る者はみな少なからずとも騎士を志したのだらう。その給金が目当ての者、騎士という存在に憧れを持つ者、ただ流されるままにここに居る者……それこそ、ここに立っている貴様ら一人ひとりに別の理由があると言っても過言ではないはずだ」

騎士らしき男は語り始める。

ただそれだけで、にわかには和らぎ始めていた空気は瞬く間に引き締まる。

彼は一拍置いてから続けた。

「騎士とは誇り高き戦士の肩書きだ。ただ乗馬し剣を、槍を振るい戦う職業だ。貴様らはこれからそれになる。だがソレ以上に、騎士という存在は最上に気丈で気高い。騎士とは職業だが、職業ではないとも言える。魂が、心が気高く誇り高く成長する！ 貴様らにはそれを感じて欲しいと思う……簡単だが挨拶を終わりとする。噴水の後ろに簡易小屋をこしらえた。貴様らは男女に別れ、それぞれ列を成せ。第一次試験はそこで開始する。以上！」

——騎士になるまでの試験。

そのまず始めがこれから開始される。

男の言葉の後に、各々はその表情をキツと鋭く引き締めて円形の噴水の左右へと流れていく。

「それじゃ、またね！」

十数人ほどしか居ない女性の列に、サニーは紛れていく。ジャンは手を挙げる彼女に返事をしながら、トロスと共にぞろぞろと動き出す列の最後尾についていった。

トロスが小屋に入ってから数分が経過する。

列が出来上がってから既に一時間以上が経過していて、寒空の下、いくら晴れ間で日差しが暖かいと言えどもいい加減身体が冷えてき

た。

後ろではまた噴水付近に戻っていった志願者たちがたむろし、緊張がいくらか解れたからか、誰もが親しげに会話を楽しんでいた。それはサニーも例外ではなく、さっそく友達が出来たのか、リザードマン蜥蜴人の少女と対面してなにやら話し合っていた。

ジャンは最後尾であり、後ろには誰もいない。強引にでも割り込めばよかったのかもしれないが、わざわざこんな所で心証を悪くする必要も無い。

彼は腕を組んで縮こまる。歯がガチガチと噛み合って音を鳴らし始める頃に、トロスは安堵したような表情で扉を開け、外に出てきた。

「ステイル、君が最後か」

「最初じゃないだけマシだよ」

「扉の前で声を待つんだ。入れて言われたら、入ればいい」

「ああ」

頷き、トロスと立ち位置を入れ替える。

やがて眼前に扉が迫り、彼はそこで足を止めた。

ひとつ大きな深呼吸でもして心を落ち着かせておこう。そう思っ
て息を吸い込むと、声がかかった。

『次の者、入れ』

「っ、はい！」

肩を大きく弾ませてから、息を吐く。

彼は扉を二度叩いてから、開け、中へと入っていった。

「失礼します」

扉を閉め、頭を下げる。

——自室より少し広い程度的小屋には、簡素な椅子と、その前方に机があった。書類が何十枚と重なるそこには小柄な少女が居た。左右の瞳の色が違う、ただそれだけの違いがあるだけの少女だ。なぜこんな所に幼い子がいるのだろつかと思うのも束の間、記憶が、その正体を見破った。

左右で長い髪を括る少女。それはドワーフ族の騎士だ。一度だけ見たことあるその姿は、以前獣人の襲来時に駆けつけた内の一人であるからだ。

「ん……、お前、どこかで見たことあるな」

書類に羽ペンの先を押し付けながら彼女が言った。

「と、まあいいか。お前が最後か？」

「はい！」

「そうか。まあ座れ」

「はい、失礼します」

一礼を置いて、椅子の左側へ。そこでその手前に移動し、ぎこちなく、操り人形のように腰を落とした。

ドワーフの少女は奇妙なものでも見るような目で彼を蔑みながら、その口角を少しだけ釣り上げてから咳払いを一つ。一呼吸を置き、口を開いた。

質問されるだろう事はおおよそ予測してきたし、その返答は全て暗記してきている。

これで問題はないが、一つだけ非常に困ったことが現在起きてしまっていた。

その返答を全て忘れてしまったことである。

その原因は、この少女の正体を思い出す過程により、集中が別方向に向いてしまったことだと考えられた。

（ええい、ままよ）

そう決意する。

見透かしたように、彼女の言葉はその直後にやってきた。

「えーと、ジャン・ステイルで間違いない？」

「あ、はい」

「住所はアレスハイムでいいんだな？」

「あはい」

「これは元々か？ この街で生まれ育ったっていう？」

「いえ、元々はその、コロンの街で過ごしてまして、十八になった

ので騎士になるべくここに越してきました」

ほう、と唸る。

ふう、と胸を撫でた。

「いい心がけだな。なら寄宿舎でなくとも良いわけだな？」

「あ、いや……共同住宅は結構金銭面で負担になるので、貯蓄が結構キツイ事になりました、ですね……」

「血族の家に転がり込んだわけではなく、共同住宅の一室を賃貸したっていう？」

「あーまあ。肉親居ないんで」

「それは、すまない。悪いことを聞いた」

「いえ、大丈夫ですよ。慣れっこですし」

彼女はそれから少しだけペンを動かして何かを記入した。カツカツと書きこむ音だけが空間内に響き、妙な緊張に包まれる。

彼女は少女だが、それでも大人っぽい言葉遣いだ。そして事務的でもある。

あの時もそうだったが、今回は特に固い口調だった。

だからそのせいで緊張が助長されているのかもしれない。

「まあいい。本題に入ろう」

彼女は言い、そしていよいよと彼は決意する。

「お前はなぜ、騎士に志願した？」

ごくりと喉を鳴らしツバを飲み込んだ。

妙に心臓が高鳴って、耳元で脈動が聞こえるような気がした。

乱れる呼吸を察されぬように息を飲み、彼はようやく口を開く。

「おれは昔、故郷を滅ぼされました。その時に、生き残りだったおれを助けてくれたのが……強くなるという事を、生きる希望を教えくれたのが、騎士さまだったんです。ケンタウロスの、金髪で、碧眼の……。そして強さの象徴が騎士になったのも、その時でした。だからおれはそれから身体を鍛えて、ようやく今になったんです」
「騎士になって何かをするということが目的ではなく、騎士になることが目的という事でいいか？」

「いえ。おれは騎士になって人の助けになりたいんです」

「具体的には？」

具体的に――横暴すぎる戦火を出来る限り抑えたい。だがそれを成すには個人では到底不可能だ。

ならば街で、困っている人の手助けになりたい。しかし、であればわざわざ騎士にならずとも出来る事。

とどのつまり、困窮。答えは無く、正解は存在しない。

おもわず宙を泳いだ視線を、彼女は狡猾に見逃さなかった。

「つまり、漠然と”誰かの助けになりたい”と？」

その通りだ。

人の助けでもない、確かに村を焼き払うような事を止めたいことは確かだったが――。

彼が助けたいのは、その、強くなった力で手伝いたいののはあのケントウロスの女騎士だった。今ではサニーと共に騎士になる事で頭がいっぱいだったが、根底にはソレがある。決意し、揺らがぬたった一つの思いだった。

だがそれを言ってしまうとどうなる？

寒いはずなのに、額から一筋の汗が流れ落ちた。

いや、だがここで落ちるわけにはいかない。妙な予感だが、次は無い気がするのだ。こと、自分に限ったことだが。

言えば少なくとも何らかの評価につながる。だが言わなければ何も残らない。

そう思い立った瞬間には既に、ジャン・ステイルの言葉は紡がれていた。

「ただの騎士に、新米に何ができるかわからない。だけどおれは、手助けになりたいんです」

この平和な世界で。

特に戦争もない、異人種が現れてから特に平穏になったこの国で。「綺麗事を言っているわけじゃないんです。ただ力があるなら助きたい。誰を、じゃなくて、誰でも……困っている人を。助けを求め

ている人を！」

「……それがお前の正義か？」

「正義……？」

「騎士はいついかなる時でも、どんな場所でも悪に対抗し正義を守る。お前はその魂を守り通せるか？」

「はい！」

気がつけば、ドワーフの少女は微笑んでいた。

また筆を走らせ、簡単に一言二言を記入する。が、やはりその位置からでは何を書いたのかは分からなかった。

「では次の質問。義務教育は受けていたか？」

「はい。コロンの街で受けていました」

「なら読み書きは大丈夫だな。最後に何か質問は？」

「あー、その。お名前を伺っても？」

「構わないが、なぜわざわざそんな事を……」

「おれが騎士になった時に、お世話になるかもしれないんで」

彼女はふんと鼻を鳴らして、また記入する。

そこでペンを床に叩きつけるようにして彼女は立ち上がった。机を軽々と飛び越えて、瞬く間に座るジャンの目の前へ。

「立て」

言われるがままに起立。すると、彼女はボディーチェックでもするように肩、腕、脇、など身体中に手を添わして検査する。

「座れ」

次いで、少しだけ自分より小さくなったジャンの瞳を覗き込むようにした。

蒼と、琥珀色の瞳。そして端正に整った、幼さが残るというか幼さ前回の顔。そして石鹸の香り。それが近づき、赤面し始める頃に彼女は離れた。

「異常はないな。視力も、普通よりはいいくらいだ」

「あ、ありがとうございます」

「体つきも割合にがっしりしてるし。どこかで鍛えてたのか？」

「え、ええまあ。炭鉱とか、鉱山とかで六年間働いてました」

「ろ、六年！？　というと、十二からか？　すさまじいな……」

ほうほうと唸りながら、彼女は何度も彼の身体と顔とを見比べた。ジャンは何やら恥ずかしくなって、頬が熱くなるのを感じながら、されどどうしようもないこの状況を甘んじた。

「それじゃあドワーフはもう慣れっこか」

「まあ、すごいお世話になりましたし」

「そうかそうか、いやー、立派だな。十八で、ねえ。……あー、そ

うか！　お前、あの時の少年か！　ボーアの時の！」

「はは、あの時はお世話になりました」

そうかそうかと、今度は力一杯両肩を叩き続ける。うれしそうに、もう身体検査や面接なんて忘れてしまったように彼女の顔は、興奮やらなにやらで上気していた。

この上なく嬉しそうに笑顔を作って、まだ若者も捨てたもんじやないと褒めちぎる。それから頭を驚掴みしてぐわんぐわんと振り回すと、今度はつかれたのか、机に腰をかけた。

小柄な身体は床から足を離し、ぶらぶらと振り子時計よろしく揺れる。

「あの時のみんなは結構褒めてたぞ？　警ら兵だつてビビってたのに良く立ち向かったつて。ただユーリア……あのケンタウロスだけは『無謀だ』って怒ってたけどな」

「いや、でも本当に褒められたもんじゃないですよ。ただ、その場の勢いで行っちゃっただけです」

「だがそうするにも勇気が要る。お前には、まずそれがあるつて事だけでも誇るべきだと思う」

ぴょん、と机から飛び降りて、彼女は腰に手を当てる。騎士のポーズはこれが一般的なのかおと思うほどに、騎士はこうやっていた。「ジャン・ステイルと言ったな」

「はい」

「私はミキだ。検査は以上。最後のお前に配慮がないのは申し訳な

いが、このまま第二次試験に移行する。準備はいいか？」

名を名乗ってくれた。

それは一概には言い切れないが――騎士である彼女がこの青年を認めた。そうとも取れるものであり、そして彼女自身はそういった意味合いで名前を教えていた。

この青年には期待できる。

そして、こういった若者こそ騎士にしてやらねばならないとも思っていた。

それはとても平等じゃないし、私情を挟むというか完全に私情だが、恐らくこの調子ならば、普通にやっていたら合格するだろう。彼女はそうとも思っていた。

「はい！」

気持ちのいい返事を最後に、第一次試験は終了を告げた。

体力検査

圧倒的だった。

「くっ、駄目だみんな退けッ！」

木剣を構える男が悲鳴のように仲間に命ずる。そして呼応するうちに、彼らは出会って僅か一、二時間やそこいらであるのにもかかわらず、それだけで前に出ていた二人は地面を弾いて飛び退いた。コンビネーションはこれまで前に出た組グループよりも拔群だ。旧来の友と組んでいるような戦いぶりである。

しかしそれはあくまでも”素人”にしては、だ。

鬼を前にして、それが通るはずがない。

「良い判断。六十点」

切迫する真つ赤な拳。燃えているわけではなく、血に濡れているわけでもない。肌の色素が濃密な緋色なのであり、そしてそれは腕のみならず全身がそうであった。

そして強打。

志願者、その三人組のリーダーのみが装備する胸の青銅器は音を立てて粉々に砕け散った。

——失格。

これはそういう試験だった。

集まった総数一〇〇。余名が二から四名のグループを作り、その中で一人のリーダーを決める。

決定した代表者は木剣を人数分、そして青銅器と、それを括りつける紐を担当試験官まで取りに行き、それぞれが装備する。

そしてそのグループは、いつぞやの鬼族オーガの女騎士との戦闘が強い
られた。

一太刀を入れる、あるいは五分間逃げ切れれば志願者の勝利。試験
続行。

だが五分内でその青銅器を破壊された時点で無条件に受験資格が喪失する。つまりは落第だ。

あの身体検査、面接はこの戦闘を行う際に著しく障害があるものを省く為のモノだったのだろう。今回は奇跡的、というか当たり前にそれが居なかったただけだ。

この体力検査で”ふるい”にかける。

見ているだけでもよくわかるが、圧倒的過ぎる敵を前にして、逃げ出さずに五分間を守りぬく事は酷く困難だ。だから敢えて攻めに転ずる手段を選ばざるを得ないが、攻撃の隙を狙われて撃沈。

既に落第した十数組はみながそうだった。

そして体力が切れて戦闘を強制終了させられた者も多数。

まだ十数組残って居るが、指名は殆どランダムであるためにいつ呼ばれるか分からない。緊張が血流に乗って、痛む下腹部が少しだけ気になった。

「サニーちゃんが心配？」

無意識に零れるため息を聞いて、トロスが尋ねた。

サニーは今、珍しくジャンの隣に居ない。それは、仲良くなったらしい^{リザードマン}蜥蜴人の娘が一人ぼっちだったからだ。最初は四人組はどうか、という提案を彼女がしたのだが、

「人数が多すぎると逆に不利になる可能性が大きい」

「素人ならなおさらだ」

ジャンとリザードマンから出たその意見が見事に合致したために、今ではその右腕、右足に鱗と鉤爪を持つその娘「クロコ」とサニーが、そしてトロスとジャンがそれぞれ二人一組で組んでいた。

少し寂しい気もしたが、こうやって成長してそれぞれ自立するのが当たり前なのだと彼は思う。

そしてまた、もし合格したらこれでサニーにも友だちができる。

これは嬉しい限りではないか。

「心配だが、あのクロコって娘。中々やるぞ、アレは」

「爬虫人はそもそも身体能力が高いらしいけど、それとは別に個人

の強さでつて事？」

「ああ。まず立ち振る舞いが経験者だ。据えた腰、歩き方。無駄のない修練されたそれだ」

さらに右半身が鱗で覆われている。鉤爪もあるところを見るに、攻撃の主体となる部分だ。そして青銅器の着用は原則的に右胸であり、代表者は彼女。ならば、いくら鬼だとしても手加減をしながら掻い潜るのはある程度の難易度を誇るだろう。

死ぬ気で逃げれば、あるいは攻めれば五分はもつ。ジャンはそう評した。

もつとも、彼自身も素人だからあまり信ぴょう性のある評価とは言えないのだが。

「なら僕たちも負けてられないな」

「その通りだ。今はおれたちだからな」

——気がつけば呼ばれていたとある一組。

トロスとの話に夢中になっていたが、そろそろ順番が来るだろうと思つて戦場と化すちよつとした空間に目を向ければ、そこにはまだ二人組が立っていた。

そして試験官の鬼も動きを止めていて……。

「五分経過。合格」

ハルヒユイア

人間と鳥人の組み合わせ。その二人は暫くの間、言葉の意味を理解できていないような顔でそれぞれ見合わせていたが——実感が湧いた。そんな風に笑顔を作つて、両手に作る拳を空高く突き上げていた。

「や、やったアツ！」

「あははは！ 良かった……！」

腰が抜けそうになる鳥人の肩を抱いて、彼らは鬼が示す方向——城内へと進んでいく。

まるで勢いがついたのか、あるいはコツを掴んだのか。単に彼女自身が見込みがある者には手心を加えているだけなのかもしれない。

そこからの合格者は徐々に数を増して行つた。

だがそれまで十数組が続き、合格するのは約半数。城内へと向かつたのは三十人に満たない数である。

そして残るのははいよいよ、サニー組とジャン組。この二名で、

「その女子二名。来い」

どうやら随分と運に見放されているようだと確信したのは、その時がきつかけだった。

「はい！」

サニーが木剣を手に掲げて前に出る。クロコは手ぶらで、そして――青銅器を付けずに出てきた。

何かがおかしい。その異変に気づいたときには既に、サニーの胸にはクロコが付けていると信じていたソレが装備されていた。

ジャンがそれに何かを思うよりも早く、鬼は指を鳴らし、その靱やかな腕を腰に構えて敵を待った。

「試験開始だ」

――言うと同時にクロコが弾けた。

地面を蹴り飛ばし背後へと送る。まるで地面が高速で動いているかのように、滑るように鬼へと肉薄した。

腕をふるう。鉤爪が、空気を切り裂いて鬼へと迫った。

顔面に襲いかかる爪を寸でで避ける。頭を下げれば、刃は虚空を切り裂いた。同時に彼女は体勢自体を低くする。初めての先制攻撃に怯む間もなく、手馴れた様子でクロコの懐に潜り込んだ。

その直後に迫る膝先。鱗が逆巻く蹴りが鬼の腹部目掛けて撃ち上げられる。またもや顔面に吸い寄せられる攻撃は、さしもの鬼も予想出来なかったようだ。

握った拳を解いて、前屈姿勢を無理やり崩す。大地に寝転がるようにしてやや仰向けになると、水面に浮かぶような体勢で大地を蹴った。

だが、その行動は”読まれて”いた。

クロコの陰で全力疾走し、命からがら背後に回り込んでいたサニ

「が木剣を構えて待ち構える。それに気づいたのは、既に無防備な腹に木剣が振り下ろされた瞬間だった。」

ぺち、と木剣が触れる。

ただでさえ静かだった空間が、より静寂になる。

そして鬼は何事もなかったように立ち上がり、身につけている革の胸当てと腰巻についた汚れを軽く払う。彼女は簡単にそうして、やがて二人に対峙した。

「やっ
たー！」

嬉しそうにぴょんぴょんと跳ねるサニを微笑ましく見守るク
コは、それから促されるよりも早く彼女を城内へと誘った。その最
中に大きく手を振ってくるサニにジャンは返してから——この上
無く大きく息を吐いた。

いや、通してみれば相手の油断を誘っただけなのだ。だが、少なくとも鬼を止められるという、実力がなくても相手にそう思わせる態度を示したことが偉大だ。間違いないくらい強い。彼は認めた。

得なかつた。

こちらは持ち前の体力で五分間逃げ続ける覚悟をしていたのに……
……決意が揺らぐ。

気持ちはいつでも前向きだ。

と再認識しながらも。

だがここでとち狂うわけにはいかない。負けても勝っても評価につながるのならまだしも、負けた時点で落第だ。個人ならまだしも、トロスを巻き込んで。

許されない。

よし、逃げよう。

彼はそうやって自分を正当化してみせた。こればかりは得意なので、人知れず得意げな顔でトロスの肩を叩いて合図した。

「なりふり構わない。作戦通りだ。いいな、トロス」

「わかつてる。君ならそうしてくれると思った」

「落ちても恨みつこナシってのはおれの言い訳だけど、それもいいか？」

「構わないさ。もうこの時点で運命共同体なんだから。姉さんにどやされるだろうけど、もう心は決まってる」

「いいやつだなお前——」

「——私語は謹んで！ 最後、来い！」

ジャン・ステイルの体力検査は、また三〇分ほどの間隔を開けてようやく開始した。

最後に回してくれたのは、おそらくミキナリの配慮のような気がしてならなかった。

ともあれ、全てを見学できたのは良くも悪くも良い判断材料になったのは確かだったのだが。

前に走りだせば良い。

そう判断して動き出そうとしても、どうしてもあの鬼の機動力故に叩き潰される未来が見えていた。

なら後退するか。

そう考えても、トロスを打ち破って投げて、彼もろとも吹き飛ばされる事態は簡単に予想できた。

自分にできる全てのことが、彼女には防がれてしまう。

彼女と同じ立場にたつて、彼はそれをようやく理解できた。

頭の中での作戦が瓦解していく。その音を耳にしたのはその瞬間の事だった。

体力に自信があつたはずだが、僅か一分足らずの時間で息が上がつていた。顎が上向く。空を仰ぐ。

そうなる理由は、慣れぬ環境で緊張したせいで動きに無駄が多くなるのが主である。

「ステイル！」

トロスの合図。ジャンは勢い良く横転して、頭上から降り注ぐ強烈な殴打を避けてみせる。受身をとって流れるように立ち上がり、すぐさま走りだす。その後を追おうとする鬼の前に立ちふさがるのは勇敢なトロスだ。

「ふらふらと避けて、あんた、それでも騎士志願！？」

騎士になりたいから逃げてるんだよ！

叫びたくてもその余裕が無い。口は今や、呼吸をするためだけの器官と化している。

そしてまた、彼女がそう声を荒げたのは初めてのことだった

理由としては、ミキから随分と色好い評価を聞いたからだと思う。あるいは、あの上っ面の勇敢さを覚えていたからだろうか。

それは非常に嬉しいことだが、こと今回に限っては忘れていて欲しいところである。

「ステイル！」

「あい、よ！」

トロスの脇を抜けてジャンへと切迫。息も切れ切れで動きが鈍る。ジャンは振り返し、いよいよかと覚悟した。

木剣を構えて待つ。鬼は拳を振り上げ、流れるような軌道で滑るように彼の眼前、懐に潜るように深く踏み込んだ。

「逃げるなんてするから——」

振り下ろされる拳。そして触れる木剣の腹。それぞれが触れ合い、軋んだ音を立てて、

「くっ！」

木剣は呆気無く、悲鳴を上げて二つにへし折れた。が、拳は未だ勢いを持って彼の胸元へと迫る。ジャンはその振り下ろされる拳に手を伸ばして、触れる。

掴む。

背を向ける。

彼女の足の間に踏み込み、伸ばされた腕を肩に乗せた。

体重が背中にかかる。女性特有の柔らかさは、残念なことに胸当てやらに遮られ、何よりも疲労と緊張と、半ば脊髄反射的な行動ゆえに感じる暇もなかった。

少なくともジャンよりは筋力があるはずだと思っていた。身長は大体同じくらいだが、失礼な話少しだけ彼女のほうが重いと思っていた。が、それは幻想だ。

彼女の身体は簡単に持ち上がる。前屈すると肩に乗せられる腕を視点にして、くるりと一回転した。

身体は重力に則って地面に吸い込まれるように叩きつけられる。

背中を打ち、驚いたように目を見開きながら、肺の中の空気を全て吐き出したようにむせ込んだ。

一太刀……ではなく一本。入れたには入れたが、カウントされるかは不明だ。

あまりに無防備すぎる体勢は衝撃故に身体を痛める。だから最後まで握っていた腕を自分に引きつけるようにしてふわりとした着地を促し、それはある程度成功した。

ジャンは腕を離して少し離れる。

彼女は驚いた顔のまま。トロスは意外そうな顔で後ろから、横に並んだ。

彼がしたのは柔術だ。倭国と呼ばれる極東の島国に伝わる徒手、あるいは短い武器を用いて攻防するさいの技法を中心とした武術だ。やがて鬼は立ち上がり、ぼそりと漏らすように呟いた。

「四分二。秒……経過した時間は」

「はは、窮鼠猫を囓んだか」

トロスが冗談っぽく言った。

「火事場の馬鹿力でもあるな」

ジャンも冗談っぽく言った。

鬼は、どこか見直したような。けどどこか怪訝そうな、疑うような目で彼へと手を差し伸ばした。

「合格だ。ジャン・ステイル。そしてトロス、だったな」

手を握り返す。視線を交わし、じっと目を見据える。真っ赤な肌に、その琥珀を埋め込んだかのような瞳は妙に綺麗だった。

「わたしはシイナ。今回の試験、合格することを祈る」

「ありがとうございます」

深く頭を下げると、なにやら小さな笑い声が漏れるのを聞いた。顔を上げれば、微笑ましく微笑みを作るシイナの顔があった。

「このまま城に向かえば女中が案内してくれる。日程としてはこれから昼食休憩後、それぞれ個人ごとに適性検査ね」

鈴が鳴るような声。穏やかに彼女は説明して、それからジャンらに背を向けた。

「わたしは落第生の相手をしてから、行ってなさい」

そうして、第二次試験は終了を告げ、束の間の休息が開始した。

適性検査

昼食には広間のような場所があてがわれた。

巨人が入り出来るほど大きな扉から中に入り、メイドに案内されるままに近場の部屋の中へと入る。その客間は数十人が入ってもまだ余裕があるくらいの広さを誇り、その中心には長机が鎮座する。その机には無数の料理が並んでいた。パンやスープから始まり、蒸し焼きにした肉をスライスしたものや、魚の丸焼き。サラダからデザートプリン、ゼリー、ケーキ類など、まるでこれまでのご褒美のように滅多にはお目にかかれないそれらがある。

既に中で待機していた者たちは食事を開始しており、ジャンらも入室時にほんの少しだけアルコール分の入ったぶどう酒がメイド達から渡され、それを口に含んでから少しだけ肩を落とした。

気が抜けた、というのが正確かもしれない。

他の志願者がわいわいと試験を忘れたように談笑し、料理に舌鼓を打つのを見ながらほっと息を吐いた。

トロスは既に料理を取りに行っている。対照的に、ジャンは壁に背中を預けるようにしばしの休憩をとっていた。

緊張ゆえの疲労だろうか。大して動いていないのに、妙に疲れてしまった。

サニーもクロコと楽しそうだし、トロスは料理に夢中だ。これで昼食休憩時間分はゆっくり休めるだろう。

「食事はお気に召しませんでしたか？」

リラックスできるようにぶどう酒を渡したのだろう。彼はそれで喉を潤していると、不意に声がかかる。扉付近で待機していたメイドの一人だった。

普通の人間だ。動きにくそうなエプロンドレスを着て、頭には白いレースがついたカチューシャを身につけている。長い黒髪が特徴的な、東洋系の女性だった。

「ああ、いやそんな事はないですよ。ただ緊張と疲れで、喉に通らなくて」

「それでは他に食べやすいものをご用意いたします」

彼女はそう言って丁寧に頭を下げる。背を向けようとするメイドを、ジャンは慌てて引き止めた。

「ちょ、ちよっと！ 結構ですよ、結構いいです。わざわざそんな……」
メイドは振り返る。努めて無表情で、それでも、と食い下がるように言葉を返した。

「第二次試験合格者である皆様方には一時間後に控える最終試験に備えてリラックスしてもらわなければなりません。私たちはそうするため仕事を命ぜられていますので……その、困ります」

言葉が続かないのか、思いつかないのか。彼より歳上であるだろう彼女は気まずそうにやや俯いてそう告げる。メイドなりの世話焼き根性かと思っていたが、どうやら皆が何かを口にしないと怒られるらしい。気難しい職業だとジャンは思う。

究極的にはリラックスしていれば良いのだろうが、そこらへんはさじ加減だ。

ともあれ、何かを食べなければ彼女らの迷惑になってしまうらしい。そこまでして拒否をする理由があるはずもないジャンは、苦笑して頷いた。

「わかりました。手を煩わせたようですみません」

「いえ、こちらこそ……もしよろしければ料理をお持ちします。何がお好みでしょうか？」

両手を前に組み控えめな態度な彼女は、妙に親切にそう言ってくれた。

それは嬉しい提案だったが、ジャンは資金を持ちあわせては居ない。チップを要求されても無い袖は振れないものだ。

「あ、いや。そのくらいは自分でするんで。ありがとうございます」
やんわりと拒否してみると、メイドはそこはかとなく残念そうな顔をした。一体なんなのだろうかと思いいながら会釈をして、背を向

ける。目指すは長机だ。

まず空の皿とフォークを取る。ひとまずパンを一つ拾い、それから適当に、彩色を気にしながら、バランスを考慮しながら、サラダ、肉、魚を一通り摘む。青年の昼食にしてはいささか量は少なめだったが、ただでさえ食欲が無いのだから十分だろう。

周囲は依然と歓談を続けている。トロスは遠征して遠いところの料理を漁っていて、やはりサニーはクロコとのおしゃべりに夢中だ。寂しい気もする。だがどこか解放的な、清々しい気分になる。

一人は新鮮だ。

たまには良いだろう。

サニーは既に魔法を自覚しているから合格は確実だし、クロコ、トロスは分からないが……なるようにしかならない。それは自分だって同じだ。

定位置にしつつある壁際に戻って、彼はまずサラダを口に運んだ。グラスは指に挟んで床に対して水平になっているが空だから問題はない。

「んー、まんま野菜だな」

自然の味だ。草というわけではないが、ドレッシングをかけなければ特別旨いというわけではない。ドレッシングをかけ忘れたが、わざわざ机まで戻るのは面倒だ。彼はサラダを食べきり、魚を口にする。

好きな食べ物は最後に残す主義である。が、その魚は思いの外美味かった。程よい塩加減。脂が乗り、疲れた身体に染み込むような味だ。癒される。活力が与えられるようだ。

こちらを残せばよかったと思う。最後に口にした肉は、味の濃いものの後だったせい、妙に薄味に感じた。ハムよりは歯ごたえがあるが、それだけだ。

「ご馳走だったな……」

一通り食べてみた総評は、まあ美味かった、である。

炭鉱や鉱山での食事はパンや、ウサギや蛇の肉が主だったから牛

は新鮮だったし、中々食べられるものじゃなかった。野菜だって同じだ。魚も。

この街にきて、騎士になるまで資金が幾ら必要なのかわからないから散財は出来無いという理由で、食費は真っ先に削られた。それでもサニーが不服を言わない程度には材料を揃え、調味料だって適度に購入した。が、毎日肉を食べられるわけじゃないし、買いた物を頻繁にするわけにもいかなから生鮮食品はそもそもあまりなかった。

もつとも、それでも無いなりに食材は買いたしたから、ただこの城での食事は中々お目にかかれない手の込んだものばかりだ、という評価につながる。

だからどうというわけでもないのだが。
ただぶどう酒だけは気に入ったから、できれば愛飲したいものだった。

それから暫くの時間が経過した。
まったりとする雰囲気。

些細なアルコールが回ったせいか、周囲の朗らかさに溶けこむようにジャンは微笑を作る。気分が良かった。

「お気に召しましたか？」

先ほどのメイドが近づいた。

嬉しそうな笑顔でそう訊いた。

「はい。中々食べられないものばかりで、とても美味しかったですよ」

他の機会であればもつと堪能できたことだろう。スープに、シチューやらなにやら。まだ食べてみたいものはたくさんあるが、どうにも食指が伸びない。食べる気力がないのだ。

下手に食べ過ぎて、適性検査で不備が出るという可能性を無自覚に心配しているのかもしれない。ともあれ、こういった立食パーティーのような経験は雰囲気だけでも味わえて良かったというものだ。
「それは良かったです」

彼女はやはり笑顔で頷いた。可愛い、まだあどけなさが残る少女らしい顔だ。歳上かと思っていたが、もしかすると同年代かもしれない。もしそうなら、その歳でメイドなんて立派なものだと言は思う。

「ジャン・スタイル様、でよろしかったでしょうか？」

胸の前で指を絡めるように手を握る。百面相と言うべきか、表情豊かなメイドは、今度は少し不安気に眉尻を下げていた。

「ああ、はい。そうですけど……」

「最終試験、開始致します」

軽く頭を下げて彼女は背を向ける。その最中に無表情に戻る彼女は、その後一言も口にせずには歩き出した。その背中で、ついてこいと言わんとしていることは、さしものジャンにもすぐに分かった。

最後尾が二度あった。しかし最後の最後で、一番最初とはどういう了見なのだろうか。

おそらく適性検査は最初の面接のような形で行われる。そして面接に限るものではないが、試験の順番で最初の人間というのは、判断基準にされる事が多いのだ。

最も大切だろうと思われる最終試験での順番が、最も避けたかった最初であるのは、今回彼にとって良いのか悪いのか、正直良くわからなかった。

——広い廊下を歩き、やがて玄關のフロアにやってくる。巨大な扉から真っ直ぐ続く紅い絨毯は、王座の間に続く道だ。

そしてメイドは、その上を歩き始めた。

左右の壁には扉はなく、向かう先は王座の間。

ジャンの緊張が瞬く間に高まったのは、言うまでもないだろう。そして思い出す。この試験は、ただの騎士団養成学校入試試験ではないことを。

”王立”騎士団だ。王が、この国が支援し創りだした組織である。ならば責任者は王であることは明白。

その面接官に王がわざわざ出向き、それぞれ品定めをするのは当然の権利である。それを予想はおろか、考えもしなかったのが不思議なことだった。

やがて、自分より一回りも二回りも大きな両開きの、立派な装飾がなされる扉が行く手を遮った。

「こちらの準備は整っております。扉はご自分でお開け下さい」

手を前で組んで、扉の脇に彼女は立つ。おそらく、一番初めに彼が試験を受けることを知っていたからわざわざ親切にしてくれたのだろう。ありがたい心遣いだ。

「ありがとうございます」

「ご健闘をお祈りします」

「……はい」

緊張を隠せず、表情を強張らせた。あの昼休憩で緊張しっぱなしだったら、確実に頬の筋肉がこむら返りしていたことだろう。

コンコン。

ノックを試してみる。

『どうぞ』

男の声が返事をした。

ドアノブを捻り、扉を押し開ける。

彼は重いソレが作りだす隙間に身体を滑り込ませるようにして、中へ侵入した。

「失礼します！」

荒げるように挨拶をする。深く頭を下げ、顔を上げる。

紅い絨毯は長く続く。中に入ったというのに、王座は数メートル先の段差の、さらに先にあった。

先ほどの客間よりも遙かに広い空間、その王座の奥の壁には龍の装飾がしてあった。金でそれを形作る、見栄の権化であるようだ。が、城なのだから当たり前だ。一国の王が住まう城をわざわざみすばらしく飾るわけがない。

この豪華絢爛が唯一許されるのが、この城というものだ。

そしてその空間は、一言で言えば荘厳だった。

二言で言えば、すごく荘厳だ。

ジャンは歩き出し、段を上がって王の前へ。

二つある王座の内、その一つだけが埋まっている。白髪頭に冠を乗せた、白い顎鬚を蓄える老人。『レヒト・アレス国王』その人だ。王座のやや手前には、長槍ではなく剣を装備する甲冑姿の男が両脇に二人づつ並んで待機している。

ジャンは、王座の数歩手前で立ち止まり、片膝について頭を下げた。

「今日は下賤な民の為、騎士を志す我らの為に時間を割いていただき、大変光栄に存じます」

あまりに打算的すぎただろうか。

だが一番最初ということもあるし、代表として挨拶をして置くのは常識だろう。

それとも言葉が何か間違っていたのだろうか……返答の無い挨拶に、ジャンは不安になってくる。

恐る恐る下げた頭を上げてみる。

王は肘置きに肘を立てて、頬杖をついていた。目が閉じていた。

王は寝ていた。

「……！」

そうか、試しているのか。

ジャンは直感的にそう考える。

コレをどう凌ぐか、王はその見事な回答を望んでいる。

そう思った思考に落ち着いた刹那に、王の頭は頬を穿つ拳から落ちた。

肩がビクリと跳ねて、何が起こったのか理解できていないような眼で周囲を伺う。ソレに倣って、近衛兵は視線をジャンに向けてやる。

「よ、よく来た、少年よ」

そして、寝起きのようないやがれた声が彼にようやく返される。
ジャンは心のなかで深く嘆息した。

——この国はこれで大丈夫だろうか。

「ふむ、ジャン・ステイルだな。話は聞いている。先日、我が騎士団が駆け付けるまで襲撃犯を抑えてくれたとかなんとか」

「ああ、いえ。滅相もないです。ただ調子に乗ってやったことなので……」

「勇敢な行いには変わりがない。基本的な心理検査、動機は既に聞かれているだろうし、貴公も疲れているだろう。手短に終わらせる」
「……はい」

思ったよりも適当なのか。あるいは思いやりあふれる行動なのだろうか。

少なくとも今のところ、王の威厳というものはない。いや、確かにあることはあるのだが、いかにも王で、逆らえばもう命はないというくらいに厳格な人を想像していた彼にとって、その存在はあまりにも親しみ易すぎた。

もっとも、外交の面を考えればその方が都合がいいのだろう。国内での信頼度もそうだ。

「十八歳以上で、読み書きができ、心身共に健康。募集要項にはその他に何が記してあったか覚えているか？」

「特殊技能の有無……つまり魔法を扱えるか、否か。ということですよ」

「うむ、そのとおりだな。基本的に、魔法が使えるか使えないかは先天的なものだ。そしてまた、使える者でも力の存在に気づいていない者も多い……ただ魔法があっても単純な肉体面やその他が未熟であった場合は我が騎士団を諦めてもらいたい所存だ」

「はい」

「貴公がここに居るということは、全ての試験をクリアしたという事だ。騎士を目指すに値する、その最低限の位置には立てているという事だ」

だが一番の問題は、ここからなのだ。

「そして貴公が魔法を扱えれば……その素質があればめでたく、騎士養成学校への入学が許可される。余談だが、学校生活の二年間で魔法が扱えなければ残念ながら騎士にはなれない。最大で二年の留年が許可され、それを超えた時点で退学処分だ。入学するには、また春の試験を受けなければならない」

「……はい」

王が近衛兵に目配せをする。

先ほどの、寝起きのどこか間の抜けた姿はどこへやら、王たる尊厳は果たして保たれている。

合図された近衛兵は跪くジャンの隣に移動し、屈むようにしてジャンに声を掛けた。

「君、これを」

手渡されるのは、白っぽい石だ。石英のようだが、それにしても妙に白すぎる、氷のような石。

手触りは滑るようであり、感触は加工された水晶そのもの。だが自然な、どこか無骨な丸さを見るに加工はされていないはずだ。

そしてジャンは、その石を知っている。

昔みたからというものではなく、仕事で扱っていたからだ。

とある一つの鉱山。特殊な道具を作る場合にのみ用いられる、特殊な鉱物。

——魔石と呼ばれるのは、ちょうど彼が手の中で確認しているその石だった。

色彩は無数にある。環境によって色が異なり、魔石がもつ特徴も色ごとに変わる。

魔石というのは、魔力という不思議な力をもつ石の事だ。古くからある、希少なながらも様々な装飾や道具、あるいは武器に加工して使われている汎用性の高い鉱物。それが使用された道具は全て特殊な効果、効能を持つようになる。

本来肉体に紋様を刻まねば使用できない魔術を、道具に刻むこと

で”一部”を利用できたり、またそういった魔術の効果を持つように魔石を加工し、ただ身につけるだけで身体能力が強化されるなど、単なるお守りとして使われることも多い鉱物だ。

そしてこの白い魔石の特徴は、魔力伝達に過敏であること。

——魔術は妖精の力を利用して行われると言われている。

一人が一つだけ持つ魔法は、その魔力というものを利用して行われると言われている。

そうなれば、魔法が使える者は魔力を持つのだ。

となれば、その魔力に、魔石が反応する。無意識でも潜在的にそれを持つのなら、石は必ず反応する……それを渡された時点で、ジャンはそれを理解した。

「石が反応した場合、その色によって魔法の傾向を掴むことが出来る。例えば赤なら炎、熱、青なら水、氷雪……白なら光、あるいは大気を……なのだ、が……」

アレスは明らかに困惑していた。

また、周囲の近衛兵も毎年の光景をいつものように見守っていたのだろうが、ジャンは思わず漏れたのだろう当惑の唸り声を聞き逃さなかった。

そして彼自身も、少しばかり困っていた。

——石は輝いている。

この時点で合格は決定した。

それは嬉しいし、今にも両手を突き上げて喜びたいくらいなのだ。色なんて、魔法の傾向なんて正直なところ、どうでもよかったのだが……。

「透明の輝きとは……前例に無いな……」
アレスが唸る。

そう、石は透明に輝いている。意味が分からないだろうが、そのままの意味だ。ジャンだって意味が分からない。

ただ、透明だと判断できた理由は——この白い石が白く輝けば眩く直視できないだろうが、今はただ”明るくなっている”としか説

明できない所にある。濁ったような白い魔石が、存在感を示したようになる、たったそれだけの反応。

輝いていることには間違い無いのだろうか……。

「ふむ、面白いな。完全なる未知、何者にも、これまでの全てに染まらぬ新しい力というワケだ。だが例外的である分、使いこなすことはもちろん、己がどのような魔法を持っているのか自覚することすら難しいだろう」

アレスは、嬉しそうに口角を釣り上げて、眼を細めて、頬を上げて、顎鬚を撫でた。

それから、周りには近衛兵しか居ないというのに、声を少しだけ小さくして、

「貴公の学校生活、その成績や評価によって考慮しよう。貴公には、何か特別な力がある。そんな気がするのだ」

異人種がこの世界に現れてから生まれた、魔法という力。その時はそんな考えられもしない、ありえない特殊な力に多くの人間が目を白黒させ、あこがれ、称えた。

そして一五〇年が経過した今、その力は希少なながらもごく常識的に存在している。

ジャン・ステイルはその中で唯一生まれた、魔法の中でも異例的なものである——より異人種に理解があり知識がある王がそう評した。

お墨付きだ。

誇るべきか、戸惑うべきか。少しだけ困った後、ジャンはまた深く頭を下げた。

「ありがとうございます……ですが、大丈夫です。おれはこの魔法を使いこなし、必ずやこの国の為に尽力致します」

つまりは魔法を使いこなせなければ国のために働けないということだ。

従来通り、魔法を覚えるまで卒業できないという宣言である。

少し遠まわしだったような気がしながらも顔を上げると、それに

応ずるようにアレスは頷いた。

「相分かった。貴公の言うとおりにしよう」
立て。

アレスはそう言うと同時に、自分自身も椅子から立ち上がる。

ジャンは促されるままに前に進み、やがて彼の目の前へ。国王の、
畏れ多くもすぐ眼前へ。

「今日から七日後、試験と同じ時刻に城へ来るが良い。入学式を開催する。制服や教科書は三日以内に合格者の住所に配達しておく。服装は制服だ。荷物は特にない」

王が手を差し出す。ジャンは石を持ち替えて、それに応じた。

がっしりとした老人の、シワだらけの手が彼を包み込む。力強い握手を交わし、それから彼はまた椅子に腰を掛けた。

「活躍を期待しておくぞ、ジャン・ステイル」

「あ……ありがとうございますっ!!」

この言葉は、あの握手は、一国民としては異例なほどに光栄で、名誉なことのように思う。国というもの、王という存在をあまり知らない彼でさえそう思うのだから、それはそれは凄まじい状況なのだろう。

彼はそう深く頭を下げてから、振り返る。近衛兵に魔石を返して会釈をしてから、扉へ。

また王へと向いて、

「失礼致しました」

そう挨拶をして、彼は王座の間を辞した。

「おめでとうございます、ステイル様」

帰りを待っていたメイドは恭しく（うやうや）そう言った。

のぞき見でもしていたのか、あるいはその雰囲気察して賭けに出たのか。

なにわともあれ自分のことのように微笑むその表情を営業スマイルだとは思えないのは、自分が純粋なお陰なのだろうかと思は思う。

——呆気なかった。

思い返せばそうだった。

石は簡単に光るし、体力試験だってなんとか凌いだ。身体検査は論外だ。

それにそもそも、合格したという実感が、全く持っていないのである。眠る頃になれば実感も否応無しで湧くのだろうが、それまではなんだか勘違いしているような気分で、複雑だ。

「ありがとうございます。あのぶどう酒でリラックスできたお陰ですよ」

「あ、いえ……そんな事はございません。スティール様の持たれる実力が全てです」

そんな言葉は不意打ちだったのだろうか。彼女は少し言葉につまり、少しだけジャンから視線を逸らしてそう返す。

「そういえば、メイドさんって騎士団の世話もするんですか？」

少し余裕が生まれた。

だから調子に乗って訊いてみた。

彼女は少し驚いたような顔でジャンを見てから、やがて紅い絨毯を引き返すように歩き出す。彼はその後が続こうとすると、それを見た彼女は歩調を緩めて隣に並んだ。

「そうですね。基本的に騎士団の皆様も敷地内の寮で過ごされているので。私は城内の清掃係なので、あまりお会いする機会はないのですが……」

メイドにも役割というものがある。例えば清掃係でも、どこからどこまでの範囲を。配膳係や、買い出し係、王、后、姫の世話係など。庭の手入れには庭師がいるし、厨房には料理人が居る。それでもメイドの負担は割合に大きいというらしい。

「はは、じゃあ騎士になった時はよろしくお願いしますね」

この城に勤めているのならば、少なくとも今よりは会う機会は多くなるだろう。

「冗談っぽく、だがその本心をさらけ出して言ってみると、今度は

吹き出すのを抑えるように口元を抑えた。

「自信家なんですね」

「まあ、そうですね。でもおれはどのみち、騎士以外には興味ありませんから」

騎士になる。今まではそれしか見て来なかった。

だが今でもそれしか見ていない。

これで学校を無事卒業出来なかったとしても、また入試を受けて入学して……繰り返すだけだ。

「メリイです」

「……はい？」

「私の名前。騎士になったらよろしくお願いします、ですよね？」

「ああ」

手を、ぼんと打つ。

唐突だったが、どうやら仲良くしてくれるらしい。

これまで友達の居なかった彼にとっては嬉しい限りである。

「ジャンです。ジャン・ステイル」

「知ってます」

うふふ、と笑う。可愛らしい少女だとつくづく思う。

サニーにあるようにでない穏やかな雰囲気を纏う女の子だ。エプロンドレスが良く似合うメイドさんだ。

女騎士たちが持つクールビューティなものとは大きく違う、それとは別の魅力。

新鮮だった。

この街に来てから、多くのものにそう感じていた。

「それでは、ステイル様はここでお別れです」

玄関の扉の前で止まると、彼女は平然と言う。惜しくも、寂しうでもない。いつでも会えるから大丈夫だと言うような風体で、扉へと促した。

「お友達なら、庭園でお待ちください」

メリイはそう言って軽く手を振った。

ジャンも振り返り、扉に向かう。

彼女はまたこういった往復を繰り返すのだろつ。やはりメイドという仕事は忙しそうだ。

そう思いながら、扉を開ける。軋んだ音を立てて、中へと漏れる、彼を照らす光の隙間が徐々に開いてくる。

外に出た。

眩い陽光が、突き刺さるようにジャンへと襲いかかって――。

彼は、天高く両手を突き上げる。

「よっしゃ！」

小さな勝利感。

全てはここから始まるはずなのだ。

だが、この合格を、じわりじわりと心の奥から染み出し始める実感を、彼は感じずに居られなかった。

——最終試験を合格に納めて、ジャン・スティールの入試試験は終了した。

順応の日々

新しい環境での一週間とは、ドギマギと緊張に駆られらしく無くもぎくしゃくしながら過ごしていれば、気がつけば過ぎていう、長いようで短く感じるあつというまの期間である。

そしてまた、新しい人間関係が概ね構成し始める一週間でもあった。

「おっはー」「おはよ」「どうよ、昨日の」「あ、あれメチャいいわ」

なんて、相手の出方を探り合いつつも親睦を深め合う、どこにでもあるような若者の会話が交錯する。

登校する道。往来には、妙に堅苦しい白い制服を着る男女が歩いていた。

学校は城の南東、約一キロほどの距離にあり、学生寮は城と学校の通過点にある。だから、そんな楽しげに笑いあう彼らの様子は嫌でも目に入り耳に届いた。

憂鬱ではない。

むしろ微笑ましかった。

彼も皆と同様に制服をまとい、肩にかけるショルダーバッグには今日行われる授業日程に合わせた教科書、そしてサニー特製の弁当が入っている。どれもコレも、今所持しているもの全ては学校から購入したものだ。

サニーとあわせて、まさか資産の三分の二が吹っ飛ぶとは思わなかった。

「ねージャン？ 今日のおべんとは頑張ったからおいしいよ？」

不景気な表情を見たのだろうサニーは、心配そうに顔を覗き込んでそう言った。

ジャンは笑顔で頷く。

「ああ、ありがとう。サニーの弁当はいつも美味しくて助かるよ」

買いだめした米がだいぶ残っているのが不幸中の幸いだった。

寮は家賃も無く、水も使い放題。台所もトイレ、浴場は全て共同だし、男子女子で分かれているが、少しでも出費を抑えたい彼らにとつてはそれだけでも上等だ。

そして寮生は、一年生三十人のうち、大体半数ほどがそうだった。ちなみに学年は二クラスに分かれていて、十五人ずつ。奇跡的にサニー、トロス、そしてクロコともクラスは一緒になっていた。

そしてクラスでも、挨拶するだけの者から日常会話を交わす者が多くでき、立ち位置も整ってきた。

全てが順調に來ている。

少しかだけ問題なのは、クラスの半数以上が――異人種という事である。

そしてそういった関係で微妙なギクシャクがあるのは、多くが城下町ではなく、その支配下、支援下にある多くの街や村出身の者が多いからだろう。簡単にいえば、慣れていないのだ。

加えて純粹に異人種に好意を持っている人間も少ない。憧れすら抱いているジャンは、その中では珍しい方だった。

「よつ、スタイル！」

「サニー、スタイルくん、おはよ！」

クマのように毛深く、ライオンのタテガミのような髪型の男が背中を叩き、その後ろからやってきた昆虫の羽根や、蜂のような触覚と腹を持つ女子生徒らが追い抜いていく。

「ああ、おはようみんな」

そうしてわざとらしい早歩きを、されど勘付かれぬようにクロコはサニーの隣にやってきた。

「あ、クロちゃんおはよつ！」

サニーは親しく挨拶する。クロコもそれに笑顔で応対した。

物々しい右半身を持ち、また見た目相応にクールな彼女はあまり感情を表に出さない。さらに口数も少ないから少し心配だったが、サニーには心をひらいているようだ。

やはり同じクラスに居るのだから、誰かが苦痛に感じる環境を作りたくないと思っていたから、これはいい傾向に思えた。

彼がそう、人知れず満足気に頷くと、

「うん、おはよう。二日の休みがあっただけ、スタイルに変なところとされなかった？」

思わず吹き出した。

「な、ど、どういう意味だよ！」

「そのままの意味だ、色魔が」

「クロちゃん、ジャンはそんな事しないよ？ 優しいけど、家事は全然できないから私無しじゃ生きてけない身体なだけで」

「お前が元凶か！」

なぜ大して接していないクロコにこんな妙に傷つく誤解を受けなければならぬのかと思っていたが、その誤解をもたらす元凶は身近に居た。

思わずその尖る耳を引っ張ると、

「いたたたたっ！」

涙目になって必死に抵抗する。振り回す腕はかくしてジャンの下腕に鋭いチョップをかまして、手を離すと同時にクロコがサニーの頭を優しく撫でた。

「サニー大丈夫？」

心配気に彼女を見守る一方で、キツとジャンを睨み返す。

ジャンはさらに何か返そうと思ったが——外壁に囲まれた校舎、その柵のような門が見えてきた。もう無理だと肩を落とし、彼はさすがにまで校舎へ、そして教室へと向かった。

校舎は三階建てで、一階部分は食堂や保健室、職員室などがある。二階部分は二年教室が、そして三階部分には一年教室が並ぶ。規模的にはそう大きくも広くもないこの校舎で一日の大半を過ごすことになる。

まず校舎の昇降口から外に出れば、広大な空間がある。授業時間

中は閉ざされる門が見えるそこは屋外訓練場であり、肉体訓練や模擬戦闘などの授業は主にここで行われていた。

さらに校舎から伸びる渡り廊下から向かえるのは、校舎顔負けの大きな図書館と、その近くには人工的な水たまりがある。正方形に大地を繰り抜いたようなそこは『プール』であり、夏場はここで訓練もするという。

そういった具合に、施設は充実していた。

総数百人にも満たぬ養成学校、訓練学校とも呼ばれるここで、およそ十人前後の騎士が毎年生まれているらしい。大半の者は卒業出来なかったり、あるいは過酷さに堪え切れずに自ら騎士への道を辞退するからだという。

「そうか……じゃあ今週から本格的に感じてもらうな」

食堂で集まって食事を終えた後、それぞれ自然的に解散となる。

サニーとクロコは教室に戻って周囲を巻き込んで和気あいあいとお喋りをしている。ジャンは絨毯が敷き詰められている廊下で、校庭が見える窓に身を乗り出すようにしながら、トロスと談笑していた。「多分ね。ステイルなら大丈夫だと思うけどね。姉さんもそう言うってたし」

——授業内容は、教育というものから六年も離れていた彼にとつては退屈以外の何者でもなかった。

ただ座って、話を聞く。数式を解く、数学という授業もただ延々と公式を覚えるまで似たような問題を解かされるのだ。さらに状況訓練という授業では、あらゆる作戦下で、どのような不測の事態が起こるか、誘発されるか、そこでどのように行動するのがもっとも適切なのか。そういった事を学ぶ。

武具の扱いもまずは机上で習うし、騎馬だってそうだ。

まずは理屈からという考えだ。

だが、そのやり方はジャンに良く合っていた。実際にやってみるにあたって、モノがどういった原理でどう動くのか。武器はどういった事を目的に、どう使われるべきなのか。そういった事を理解し

た上で行うのが一番効率がいい。何よりも身体の負担にならない。

そんな事を考えていると、不意に後ろから気配が迫った。

「ステイルくん、トロスくん。何してるの？」

振り向くと、チヨロリと細く長い舌を覗かせた女子生徒が立っていた。深い青色の髪を持ち、それを薄めたような水色の宝石が如く綺麗な水色の瞳の女性だ。上着をしっかりと身に付けて居るものの、その引き締まる腹部が、へそがあらわになる。

そして彼女はスカートも、ショーツも着ていなかった。

「ああ、委員長」

言葉に、彼女のすぐ後ろでとぐろを巻く尾がちよろちよると反応した。

そう、彼女の下半身は蛇である。

彼女は蛇族^{ラミア}の少女だった。名前は『レイミイ』。これからの学校生活でクラスの代表となる立場にわざわざ立候補した、立派な女の子だ。

「おれは今何もしてないをしているんだよ」

「へえ、よくわかんないけど」

「まあ普通にトロスと話してるだけだしね。レイミイは？」

「あたし？ そうねえ、貴方に話しかけたってところかな」
てへ、とわざとらしく舌を出す。

打算的な行動だと彼は思う。

「レイミイは学校に慣れた？ 結構、周りの女の子たちと話してるみたいだけど」

「うん、まあね。ただちょっとね、ヒトの男の子が怖いかな」
ヒトが怖い。

それは、これまでの経験や聞いた話でよくあるパターンだ。

異人種は人間の多い場所に好んで住み着く。といっても勝手に居住を構える訳ではなく、移民として普通に転居するように街に済むのだ。そして閉鎖的な場所であればあるほどに外からの人間は珍しく、それが異人種となれば珍しいどころの話ではなくなるだろう。

そして幼い子供ならばなおさら、異人種に対する態度は顕著になる。子供というものは、自分とは違う場所を指摘し弄りたがる生き物だ。

そのあとの出来事は想像に難くない。

一言で言ってしまうえば、いじめに遭うのだ。そしてそういった環境にあった異人種はそう少なくはない、というのがこれまで聞いてきた話である。

全てが全て、この国内、城下町内のようにうまくいく話ではない。残念な話だが、一五〇年が経過した今でも、異人種が存在が常識的になっても尚、それが受け入れられる環境は決して多いとは言えないものだった。

「やっぱり慣れかな。でもおれもそのヒトなんだけど？」

「あー、なんかステイルくんて、あんまりそういうの関係無いって感じるの。良くわかんないけど、ステイルくんって異人種わたしたちでも普通の人間みたいに接してくれるでしょ？ ちよつとの動揺も気後れもなしに。ただちよつと、ばーとこつち見てくることはあるけど」

「それは見とれてるだけだよ。だってすごいよ、魅力的っていうかね。おれたちに無いものを持つてるから羨ましいっていうか。もつと仲良くなりたいかな」

「ステイルって女好きだよな」

「あ、トロスくんもそう思う？ しかもなんか手馴れてる感じしない？」

「分かる、日常的になってるんじゃないかな」

「気がつけばそういう話に移行する。」

まだ一週間しか経過していないのにそんな不名誉な称号はいただけないものだ。

ジャンはそれらの声を飲み込む程大きな声を荒げるように、話を転換した。

「あー！ ああ、そういえばさ——この校舎の地下って知ってる？」

そしてまた、不意を突くようなその質問に、それぞれが疑問符を浮かべるように彼を注視した。

「地下？ なにそれ」

「僕も知らない」

うまい具合に興味を逸らせたようだ、ジャンは胸をなでおろす。安堵の息を吐きながら新鮮な空気を吸い込み、勿体ぶらせるように説明を開始した。

「なんでも地下には、『呪い』が封印されてるらしいんだよ」

「呪い？」

「なにそれ」

「まあ、超ヤバめの魔術みたいなもんかな。それが具現化して、ヒトの形で暴走したんだって。それを地下の一室に封印したとかなんとかって話」

この話の出自はシイナ。あの鬼族の女騎士である。

聞いたのは、入学式であり、そこで挨拶をした際だった。なんでまためでたい日に幸先の悪い話を聞かせるんだと思っていたが、まさかこんな所で役立つとは思わなかった。

今では感謝感激雨あられた。

「へえ、異人種じゃないんだ？」

「みたいよ。権化そのものって感じかな」

細かいところはよく知らない。聞いた話だからだ。

だからそこらあたりは全てジャンのさじ加減、イメージで語る。

どのみち縁のない話だから、どこまで飛躍してしまっても関係無いだろう。

「でも地下って入り口ないわよね？」

「絨毯で隠してあるんじゃない？」

「あー、それじゃあ搜索は無理ね」

と、レイミイは残念そうに肩を落とした。とぐろを巻く尾もそこはかとなく元気がなさそうだ。

「いや、一応委員長なんだから、むしろ止めようよ？」

「委員長なんだから、危険かもしれない場所を確かめておいて、そこから対策を立てるべきだと思わない？」

もっともらしく言ってきた。

たしか委員長に立候補した時も、他に誰も対抗馬が居なかったのにもかかわらず妙に説得力のある言葉でまくしたてていたな、とジャンは思い出す。

頼もしいと感じられるが、突っ込みどころはいくつか隙間を開けるようにある。警戒すべきか否か、迷ってしまう点だ。

「さすがレイミィ、頼もしい」

ひとまずスルーしておくに越したことはない。

彼女もその返答を流すようにうなずいてから、また改めてジャンを見据えた。

「そろそろ授業始まるわ。遅刻しないように教室に戻りなさいね」

「ああ、ありがと」

と言って、彼女はうねうねと尾をうねらせながら滑らかに前進。

割合に速い速度で教室の中へと戻っていった。

——順調だ。

ジャンは改めてそう思う。

人間関係も良好。憧れの異人種も身近に多いし、授業にも追いつける。

だが同時に、ここまで都合よく進むことに不安を覚えた。

また何かあるのではないだろうか。直感的にそう思う。

ジャンはまた窓の外へと身体を向けて、空を仰ぐ。晴れ渡る青空は、いつ見ても心が澄むようで、少し気が紛れた。

「気のせいなら、いいんだがな……」

それからややあつて、授業開始の鐘の音が鳴り響いた。

春季の疾風

その日の放課後。

春の陽気に誘われて眠りこけていれば、授業が終わった頃に目が覚めた。

「おー、じゃーなステイル」

「まったね、ステイルくん」

可笑しそうに笑いながら、獣人、虫族、植物族は挨拶をして去っていく。やがてただでさえ少ないクラスの中には、その半数程度しか生徒が残っていなかった。

ジャンも、特に慌てるようではないが、カバンに教科書を詰め込み帰宅の準備を開始する。

「ねえジャン、私たちこれからちよつと遊びに行くんだけど、ジャンも行く？」

と声を掛けたのはサニーだが、振り返ればクロコを含む女子二人が群れをなして彼女の背後にたむろっていた。おそらく仲良くなつたお友達なのだろう。一人は頭に大きなハイビスカスを咲かせ、スカートのように花弁を広げる植物族の女性である。

仲良き事は美しきかな――さすがのジャンも空気が読める男だ。

ここで「行く行く！」と笑顔で大手を振る愚か者ではない。

「あー、悪い。今日はいいや。また今度な。じゃあみんな、サニーの事よろしく頼みます」

言いながら彼女の頭に手を置いて、冗談っぽく頭を下げる。

彼女らはくすくすと笑いながら、「いえいえ」だの「こちらこそ」だのと親切に返してくれた。

「サニーちゃんのお兄さんって面白い人だね」

「えへへ、まあね。自慢のお兄ちゃんです」

妹のような存在だとは思っていた。だがそれでも血は繋がっていないし、そもそもジャンは人間で、サニーは妖精^{エルフ}族だ。まず物理的

にありえないことだが、彼女らも”兄のような存在”と聞いてそう口走るのだろう。

彼は思わず少しだけ驚いてから、納得し、軽く手をあげた。

「それじゃ、また明日」

「うん、じゃーね！」

もう寒さに怯えることも身を震わせる事もない春。

そして労働の必要もない、一日を過ごして僅かな疲弊すらない夕方というのは懐かしすぎて、ある意味新鮮だった。

ジャンは大きく伸びをして道を歩く。やがて近づく寮の前はスル
ー。

トロスは姉と待ち合わせをして帰ってしまったから残念なことに一人ぼっちだが、ここを敢えて利用して街をぶらぶらと観光するという手が残っている。特に城周辺には店も少なく民家もあまりないが、だからこそ興味深い。

また適当に店を見てまわるのも良いだろう。いかにも暇人で商売の邪魔になるだろうが、なんにしろ今程に落ち着いていて、なおかつ労働が無い日は無いのだから、ただ帰って寝て潰すのはもったいないように思えた。

「ほー。んつとに、いつ見てもすごいな」

やがて城の前にまでやってきて、思わず足を止めた。

清々しい程に巨大で荘厳。縁のない場所のようで、騎士になればここに仕えることになるのだ。これからは飽きるほど見ることになるのだろうが、それでもジャンは、それから少しの間目を離せず
いた。

そんな事をしていれば、やがて風景の中で動く物体に注意が向くそれが——不意に空へと高く飛び上がって、こちらに向かってくるものならば尚更だ。

「なっ……えっ、ちょ——」

ただの鳥だと思っていたが、その姿異様に大きすぎた。そして近

づくにつれて、それが翼を大きく広げ楽しそうに空を滑空する女性の姿だというのが見えた。その姿が、ちょうど自分の元に突っ込んでくる事もばつちりと。

空気を切り裂いて、まるで重力によって地面に吸い寄せられているかのような滑空。楽しげに頬を上げて笑みを作っているものの、瞳はまっすぐとジャンを睨み、瞬く間に切迫。

息を吐く暇もなく突風と共に迫り、その四本の趾^{あしゆび}が彼の顔面を掴まんと広げられて――。

「う、わ――」

頭を抱えるようにして屈み込む。

直後に鳥人は、暴風をまき散らしながら数メートルほど後方の地面に着地した。翼をバサバサと羽ばたかせて体制を整え、ごく優雅な着陸である。

心臓が破裂する勢いでバクバクと激しい鼓動を繰り返す。

思わずへたりこんでその姿を眺めていると、彼女はくるりと楽しげに振り向いた。

肩に届くくらいのライトグリーンの髪を振って、それからジャンにこれでもかと言うほどの笑顔を向けた。

「ごめーん、驚かせちゃった？ でもじつとこっち見てるジャンくんの方が悪いんだからねー？」

と、まるで自然に名前を呼ぶ彼女にうろたえる。

彼女はそれに気づいたように、そういえば、と続けた。

「あたしはアエロ。ほら、獣人^{ホーア}の時に居たの、覚えてない？ ミキもシイナも会ってるって聞いて、どうもズルイなって思ってたさー」

楽しげにカラカラと笑う彼女は、大きく胸を反らしていた。そしてそこにもフワフワとした羽毛が顔をのぞかせていて、また豊満な胸が笑うたびに揺れていた。

胸の谷間が見えるような穴の空いた、首を包むように襟がある長袖のシャツを着る彼女は、それ故にその鍛えられ引き締まった抜群のスタイルが浮き出ていた。

だからいささか冷静になったジャンにとっては、存在そのものがあらゆる意味で刺激的であり、眼を逸らさざるを得なかったわけである。そうすると、自然的に無言になり、

「ん、どうしたの？ まだ驚いてる？」

なんて、未だへたり込んでいるジャンへと屈み込んで、覗くように顔を近づかせた。

「あ、いや……は、ははは。驚きましたよ、突然飛んでくるんですから」

自分が情けなく赤面しているのを感じながら、精一杯の虚勢を張る。決して動揺せず、平静を装って対処してみるが――無駄だった。アエロはそれから自分の谷間に興奮している事に気づいて、ははんと鼻を鳴らした。

彼女は趾であしゆびジャンの腹を掴むと、そのまま被さるように乗りつけた。

「へえへえ、聞いたとおり、異人種は全然、平気なんだ？」

「へ、平気だったって、この街じゃみんな平気でしょう？」

「そりゃ年季が入ってる人はね。ジャンくんの歳だと、慣れてても親しくお友達つてのは珍しいよ」

「あー、そうですね……」

クラスの中を思い出せば、彼女の言葉通りなのが分かる。

確かにある程度の会話を交わしたりはする。だが一緒になって遊んだり、遊びに誘ったりなんて事は今までなかった。

「今日は一人なの？ いつもあのエルフの女の子と一緒に居るけど」

「ああ、サニーは友達と遊びに出かけて、今日は一人ですよ。暇なもんで、街でもぶらつくこうかと」

「へー、それじゃあ」

と、彼女は翼をジャンにつきつけ、羽毛で鼻先をくすぐってみせる。

それが妙に淫靡な行動に思えてしまうのは、彼の意識がそちらに偏っているためだろうか。

「お姉さんと二人きりで遊ん——」

アエロがイタズラっぽい笑顔を向けて、そう口にする刹那、それをものの見事に雰囲気ごとぶち壊しにして声を掛ける輩が現れた。

「お、ステイール、奇遇じゃん」

そんな無作法な声に思わず肩を弾ませる。

驚いたように、肩越しに後ろを振り返り見ると、そこには二人の男が居た。人間の、彼と同じ制服を着る生徒だ。

加えて説明すればクラスメイトである。

獅子のタテガミのように逆立たせた髪が特徴的な者や、長髪を後ろで括る者。共通しているのはジャケットを脇に抱えて、ワイシャツのボタンを胸元まで開ける妙に露出度の高い格好をしていることだろう。

そして一週間過ごしてわかったことだが、異様なまでに異種族に差別的である。

「どしたん、そんなところで寝そべってて。人外に食われてんの？」

男が言うのは極めて差別的の台詞だ。だが心の底から異種族を恨んでそう口にする皮肉なソレではない。単なるその場でのノリであり、悪ふざけだ。

百歩譲って、人間同士ならまだ伝わる。あまり良い印象を抱いてなければ笑えるし、友達同士なら縁を切る覚悟で制するか、愛想笑いで済ますだろう。

だが異種族には通じない。

誰も、見ず知らずの人間に、外見が違う、故郷が違うという事だけで馬鹿にされれば頭に来るだろう。

ジャンはだから、その刹那に振りまかれた殺意を機微に察知して——足にタップし、アエロに降りてもらって立ち上がった。

やがて目の高さが対等になる。

——頭に来るのは、異種族が大好きなジャンも同じだった。

「なあステイール、たまには人間と遊ぼうぜ？ お前学校に来てか

らずつと人外に付きまとわれてキツいだろ」

「そうそう、今からアクセ買いに行くんだけど、一緒に行かね？」

馴れ馴れしく肩を掴み、組む。

不快な体温が服越しに伝わり、ジャンは思わず嫌悪した。

作法も礼儀も何もない、恐らく義務教育を経て高等教育を受け、以降の六年間をろくに学ばず無為に捨てたのだろう。なぜ合格したのかが不思議な連中だった。

「キツいのはお前らの方だよ」

ああ、言ってしまった。

大した葛藤もなかったが、いざ口にしてしまうと何かが崩れてしまったように思う。

ケンカなんてしたこと無い。だが胸を焼く怒りは久しぶりだ。

これでクラスでは迫害されるだろうが――構わない。学校にはお友達を作りに来ているわけではないのだ。

何が起こったか分からないように、ぽかんと口を開ける男の腕を振り払って彼らを引き剥がす。

「あ？ お前何言ってるの？ 舐めてんの？」

「どんな場所にもお前らみたいなのが居るってわかった、嫌気がさすよ。おれはお前らみたいなのが大っキライなんだ。お前らみたいなのを、なんて言うか知ってるか？」

「は、テメエ調子こいてんじゃ――」

「口が臭いんだよ、ド低能が」

食い気味で吐き捨てる、およそ口にしたことのない悪意。

喉が、顎が、四肢が痙攣するように小刻みに震える。自分が何か、とんでもない事をしているような気がしたが、なんだかどうでも良くなってきた。

男がツバをまき散らしながらジャンの胸ぐらを掴み上げる。もう一方で、手持ち無沙汰の青年は振り上げた拳を、何の迷いもなく彼の頬に振り落とした。

衝撃が顔面を歪め、骨を伝達して脳みそを激震させる。

ひどい痛みだ。とても、簡単に決意して相手に与えられるものではない。となれば、彼らはそれに慣れていて、人の痛みを無視して攻撃ができる立派な兵隊なのだろう。

思わずよろけて跪く、が。

「炭鉱マンの体力舐めんなよ！」

立ち上がりざまの殴打。顎を殴り上げれば、タテガミの男は大きくのけぞって、よたよたと後退。のちに尻餅をつく。顎から素直に衝撃を伝達されたがゆえに、彼の眼にうつる世界はぐるぐると回っていることだろう。

さらに長髪の男へと拳を構えるが――。

「やめなさい！」

翼から離れた羽毛が振り上げた腕に絡みつき、まるで縄のようになって動きを止める。

それと同時に、アエロが傍らに現れた。

「一発は一発。それ以上はダメ。それに……」

キツと、先ほどの殺意を込めて彼女は二人組を睨みつけた。

だが、その殺意の源になる感情は、先程とは大きく異なっているのだが。

「あんた達も分かっているでしょう？」

ジャンに言い聞かせるものとは大きく変わる、冷淡な言葉。

そして彼らもソレを感じ取ったのだろう。立ち上がり、衣服の汚れを払う暇もなくバツが悪そうに背を向け、退いていった。

「バカじゃないの？ 確かに異人種あたしたちに優しくしてくれるのは嬉しい

けど、人間は人間と仲良くしなきゃ、ダメなのよ？」

広場のベンチで、ジャンとアエロは隣り合って座っていた。

頬の殴打は大した威力ではなく、口の中を切る事はおるか頬が腫れ上がることにすら無い。

「バカって……まあ、感情に流されたのには確かに後悔してますが」
それぞれアイスを口に運びながらまどろむ夕方。

アエロに奢ってもらったのは少し恥ずかしいような気もするが、助かったことには違いない。

「でもお姉さん、ちょっと嬉しかったな。ああいう、男気のあるのは嫌いじゃないよ」

「はは、喜んでもらえれば良かったですよ」

コーンまでを食べけると、アエロは「よいしょ」と立ち上がる。それから腰を曲げてジャンに顔を近づかせると、そのまま舌を伸ばして頬についたアイスを舐めてみせた。

「……っ?!」

「あはっ、こういうのは初めてだった?」

頬に伝わる熱い、柔らかい感触。鼻をかすめる甘い匂いに、その全てに頭の芯が煮えたぎってしまいそうになる。頬が、顔全体が真っ赤になって、彼女は楽しそうに笑った。

「でもね、お姉さん大奮発してもっとお礼したいんだ。貴方みたいな人は初めてだから。あの獣人ボニアの時のお礼も兼ねて……ね?」

彼女はそう言って、優しい微笑みを見せた。

「くっ……、あ、アエロさん……もうっ!」

イキそうだ。

凄まじい重力が身体に直接振りかかり、さらに全身を凍えさせるような突風の中で、ジャンの意識は幾度ともなく逝きかけた。

彼は今、地上から遙か高く離れた上空に居た。

腹を鷲掴みにする鳥足が肉に食い込み、そしてそれを成している足の上には楽しげに空を舞うアエロの姿が。

なんでも彼女は今日仕事が休みで、暇を持て余していたらしい。騎士にも休みがあることに少し安心したが、彼女が暇つぶしのために誰かを誘おうとしていた所にジャンを発見したという経緯だった。そして思いもよらぬ男気あふれる行動に彼女は気を良くして、空中散歩へと相成った。

聞く話によると鳥人族はある程度の信頼や親密度を築かなければ、

こういった共に空を制するような行動は取らないと聞いたから良いことなのだろうが――。

目が回る。

下を見るしか無いジャンは暫く前から目をつむっていたが、いよいよ自暴自棄^{やけ}気味になってきて目を見開いた。が、景色がまともな景色として彼の脳に刻み込まれることはない。

「どーしたの？ もう限界？ まだ三〇分も経ってないよ？」

「い、一時間経ってます……」

「あはは、そうだっけ？ やっぱ楽しいと時間が経つの早いね。ジャンくんはいい男だし、独占したくなっちゃう」

「は、はは、そりやどうも」

呼吸が出来る事が幸いかもしれないが、全身に突き刺さるような突風や、速度やらでいい加減グロッキーになってくる。

そもそも掴まれ方からして、捕獲された魚かなにかのようだ。

いくら仲睦まじくなっても、これでは恋人同士なんかではなく、獲物^{ハンター}と獵師にすぎない。

「でも、いい景色でしょう？ 風も、気持ちいい……」

速度をやや緩めれば、空中と飛び交う鳥と同じ速度になる。

肌に触る風は途端に柔らかなものになって、上空からの光景も、いくらか落ち着いて見学できる。

となると、その新鮮な光景はあまりにも広大で、思わずため息が漏れた。その余裕が出てきた。

「うわ、上空^{そら}から見ても街でかいですね」

――円形のようになる外壁の中に存在する巨大な街。空の上からでもその大きさは随分と目立つものだ。

そこから黄土色の道が草原の中を突っ切り、道の通過点には森が生い茂る。

またその道とは逆方向、城がある近くから外へと伸びる道の先には海があり、近辺には小さな漁村らしき集落があった。

大雑把に見れば森の先にも小さな町があり、上空でさえ小さく、

豆のような大きさに見えてしまう街がさらのその奥にある。それがジャン・ステイルが保護されていたコロンという街だ。

あらゆるものが小さく見えるその位置で、ジャンは世界の広大さを改めて認識した。

この広い大地の中で、こんなちっぽけな人間が四苦八苦して生きている。そう考えれば、異種族だとか人間だとか、そういったものが小さく思えてくる。

「はは、アエロさんはいつもこの世界を見てるんですか？ 羨ましいなあ」

「でしょ？ いいわよ、空は。小さい事がつまんなく思えちゃうもの……あ、そうだ！」

「どうしたん——」
ポイツ、と。

ジャンの腹を鷲掴みにする痛みが、不意に喪失^{きえ}した。

にわかに彼を取り巻く重さが失せたと思うと、身体は大地に吸い込まれるように自由落下する。

風がまた暴風となって全身を颪^はり、臓腑が全て浮き上がるような不快感を催した。

「でええええええええつ——！」

だからそんな間抜けな悲鳴も気にならず、

「ほら、抱きついて！」

目の前に、垂直に降りてくるアエロにさえも、何の感情も抱けなかった。

ただ藁をも縋る思いだ。だから彼女の言葉は既に耳に届かず、ただ手を伸ばし、その細い体軀^{からだ}を抱きしめた。

それから少しの間は速度がやや緩むだけで、バサバサと幾度か翼をはためかせれば、ようやく緩慢に落下し始める。

豊満なバストに顔を埋めていたジャンはそこでようやく、己の破廉恥な行動に気がついたが——どうしようもなく、その密着体勢のままアエロを見上げた。

「あははっ、ごめんね？ 足が疲れちゃって」

「な、なら降りればよかったじゃないですか……」

どれだけ平静を装っても、激しく高鳴る心臓は彼女に伝わってしまふ。そして、それが落ち着いた今でもなぜだか元に戻らない理由さえも。

彼は再び頬を赤く染めて、横を向いた。

「いい景色なんでしょ？ だったらもっと、少しでも長く一緒に居たいじゃない」

まるで空中で直立するような形のまま、彼女はゆっくり回るように振り返る。景色は、海の方角へと転換した。

「これを見せたかったし、ね」

海に大陸が飲まれていくような砂浜。その先には、空の色を写す蒼い海が広がり、その先はにわかに赤くなる。

水平線に身を沈めつつある太陽は、それまで世界を明るく照らしていたソレだった。

今まで見たことのない光景。

水面はキラキラと揺れて光を反射させ、どこか偉大ささえ覚える凄まじい風景だ。

ジャンは思わず嘆息した。

「……すごい」

としか言えない、語彙のない自分がなんだか情けない。アエロに申し訳なくなってくる。

「でしよう？ ヤなことがあったらいつも見に来てるの。でも、今度からはジャンくんを見ればそれがすんじゃうわね」

「な、なぜですか」

「だってこの思い出を共有した相手だもの。貴方を見れば、今日のことを思い出せるし」

と言いながら、彼女はその翼で、ジャンの頭を包むように抱いた。「何があっても前だけを見るのよ。後ろに夢なんかないんだから」

そうして、ゆっくりと空を惜しむようにして彼らは下降する。

——奇妙なまでに心に残るその言葉を胸に、ジャンは地に降り立ち、アエロと別れて、急ぐわけでもなく、家路についた。

戦闘訓練、開始

「あー、今日は校庭三週したらここに集合だ」

そう告げる戦闘教官の言葉に、校庭に集まっていた各々の表情は徐々に弛緩してくる。

これまで二週間ほどずっと校庭を走ったり、筋力トレーニングをしたりなど体づくりが基本だった授業には無かった発言である。そこからそれぞれが察するのは、『実技』という言葉だ。

実際に木剣を握り、あるいは弓、槍を手にして戦うための訓練。それが、脳裏によぎったがゆえに彼らは喜んでいた。

体力づくりは確かに大切だが、退屈で、さらにしんどい。これが午前中の授業に組み込まれていれば、次の授業に確実に支障が出るレベルの疲弊だ。というのは、ジャン以外の感想である。

そしてまた実技というものが未知である事も、彼らの興奮を助長させているのだろう。単純に「かっこいいから」という理由も、もちろんあるのだろう。

「ようステイル、良かったなア？」

そう言って背中を力一杯叩くのは、この間の二人組だった。

タテガミの男は嬉しそうに肘鉄をジャンの脇腹に突き刺して走り去り、長髪の男もその後が続く。

前回、アレがあつてから割合に陰湿な嫌がらせもなく済んできたと思つたが——ずっとコレを待っていたのかと思うと、ご苦労様とでもねぎらいたくなる。その意欲を他のことに持っていけば、もっと生産的な生活が出来ると思うのだが、彼らにとっては余計なお世話であり、言つても無駄なことなのだろう。

因縁を買っただけだ。

ジャンも自分のペースで走りだすと、すぐ横にトロスがついてきた。

「さっきの連中と何かあつたの？」

「いや、特に何もないけど」

「……相談してくれよ、友達だろ？」

最近のトロスはなんだか落ち着きを持ち始めている。

早くもなんらかの成長を遂げたようで、風によって後ろに流されてオールバックになる彼は非常にナイスガイだった。

童顔かと思っていたが、顔だけを見るとなかなか渋い。ジャンはそういつた意味でも見直し、肩をすくめるように頷いた。

「あいつら一回ぶん殴ってから目え付けられるみたいなんだぜ！」

思い出しながら言えばなんだか心の奥底からふつふつと負なる感情が沸き起こってくる。だから極力元気に振る舞い親指を突き立てると、「誰だお前」と突っ込まれた。

「何か嫌がらせとかされてる？」

「いや。ただ同じ寮だから、部屋の扉思い切り蹴っ飛ばされたり、トイレトペーパーが常に切れてたり、風呂入ってる時に服破られてブレーカー落とされたくらいしかないねえ」

寮は共同住宅とは違い、一軒家の中に自室をそれぞれ作り、台所やトイレ、風呂などを共同に使うようになる。そして彼らも同じ寮住まいであるためにそういった事が起こり得た。

もつとも、上級生も居るためにそうそう目立った行動ではなく、それこそ隠れてこそこそという訳だ。

「うわ、典型的なイジメじゃん。やり返さないの？」

タツタツタ、と教官に目を付けられない程度の速度で五〇〇メートルある外周を走り続ける。

トロスもこの二週間である程度鍛えられたのか、慣れたのか、呼吸を乱さずに会話を続けられていた。

「やり返したって、火に油注ぐだけだろ？」

「そんな事言っただって……」

「だから大丈夫だって。飽きるまでやらせときゃ良いんだよ」

「そ、それじゃあ……多分、異人種グループの空気が悪くなるよ。キミはただでさえ評判良いんだから」

「まあ外交官的な意味だけだな」

クラス内でも異人種から人間へ、直接何かを伝えられることはあまりない。多くはジャン・ステイルを介した伝達となり、あったとしても事務的な会話以外は行われない。

そもそも、これが普通の姿だった。

世界から見れば、この国の在り方が少しばかり異常なのだ。

確かに世界的には受け入れられた存在だが、という具合である。クラス内は見事な縮小図になっている、と言っても過言ではない。

「なんでこんなことになったのやら……」

「ぶん殴ったからだろ？ まあ、キミの事だからどうせ逆恨み的なものだろうけど」

「いや、そっちじゃない」

「ああ、そっちね。まあ、なんでだろう。普通に接してくれるからじゃない？」

とはいえ、人間側だってなぜ普通に接しないのかがジャンにはわからなかった。

確かに見た目のインパクトはあるが、それこそが異種族の特徴だし、そこに魅力さえある。個人ごとに感想は異なるだろうが、一、二週間ほどが経過してその改善が見られないというのは根本的な何かがあるのだろう。

親に「付き合っではいけません」とでも釘を刺されているのだろうか。

だが彼らとて最低でも十八歳だ。自己判断でどうにかする筈だし、わざわざこの国に来ているのにもかかわらず”異人種は苦手です”なんてもう意味が分からない。

だから、ようするにきっかけが必要なだけなのかもしれない。

となれば——圧倒的なまでに反異人種を掲げる輩は障害になってしまう。

「時間が解決するもんならいいんだけどさ——」

「まあそんな感じで、二人一組になって打ち合ってくれ」

素振りを数回こなし、構え、振るい方を教えた後、教官は適当にそう告げる。

そんな適当な指示に、思わずジャンは食いついた。

「ちよつと、教官！^{せんせい} そんなんで良いんですかッ？！」

「最初だからな」

「さ、最初なら自由時間みたいなもんでいいんですか？」

「まず道具に慣れなくちゃな。身体だつて出来上がってるわけじゃないし。まあ経験者は居るが、少ないしな。殆どが高等教育からの入学だから、まずはこういった時間が無くちゃならない。お前だつて最初は雑用から始まったんだろ？ それと一緒にだ」

「そ、そういう事ですか……」

なんとなく分かる。

彼の言う通りだ。誰もが入学に備えて身体を鍛えているわけではないし、しっかりと出来上がっているわけでもない。彼らはここで肉体を作り、武器に慣れる。そのつもりで入学したのだから。

二年もあるのだからそう急ぐことはないし、ジャンだつて最初に覚えた違和感を、今ではあたりまえのように感じている。それと同じで、このヌルい訓練が徐々に厳しくなっていく過程も、慣れてしまっただろう。

そうこうしていると、魔の手が彼の背中を勢い良く平手で打ちぬいた。

スパーンと小気味良い音が破裂音が響き、背中に鈍い痛みが走る。そういった行動をした男は、悪びれるでもなく肩を組み、ジャンを誘った。

「なあステイル、一緒にやろうぜー」

やってきたのはタテガミの男だ。

あたりを見渡すと、長髪の男は割と真面目にトロスと打ち合っている。しっかりと反撃させ、ゆつくりでありながらも組手となっているのを見るに、長髪の事は少し許そうかと思った。

「あー、そうだな。ちょうど余ってるし」

言いながら、二の腕を力一杯つねる男にイラついた。

なんて幼稚なんだろうか。

こうやってはしゃいだり、異人種を差別するのも、あるいは――。それぞれが二人一組になって木剣を振るい、受け、返す中で、やがてジャンとタテガミも対峙した。

「てめえム力つくんだよ！」

喧噪の中で、辛うじて教官には届かない程度の声音で叫ぶ。そして剣を振りかぶり、力任せにジャンが構える木剣へと叩きつけた。
「スカしやがって、人外が居なけりやなにもできねえクセしてよ！」
相手にあわせて剣を対面させ、受ける。容赦無い一撃一撃が、剣伝いに衝撃を伝播させるように腕を痺れさせる。攻めに転じる暇のない全力の攻撃に、彼は受けるので精一杯だった。

「クソ野郎が、この、このツ！」

「じゃあなんでお前は、そんなクソ野郎に一々関わるんだよ」

「ム力つくからだよ！」

「ひっそりと暮らしてるだろ。可愛いものじゃないか」

「うつせ、黙れ！」

上段からの振り下ろし。ジャンは本能的に大地を弾こうとするのを防いで、剣を横に、頭上に構える。

やがて衝撃。

体重を掛ける一閃が木剣の腹を力一杯叩き、そして流される。頭上から脇へと剣が移動するのを感じながら振ってやると、タテガミの男は重心を崩したようにそのまま前のめりに倒れていった。

あれをまともに受けていれば、さすがに怪我にはならないだろうが、かなり痛い。そんな事でいちいち激昂されてはジャンとてかなわないから起こした行動だったが、やぶ蛇だっただろうか。

「おれが嫌なら無視してくれ。それがお互いのためだろう？ わざわざ潰して、何が残るんだよ。気持ちの悪い爽快感だけだろ？」

「スカしやがって！ なに余裕ぶってんだよ！」

「スカしてねーって」

「だまれおまえええッ！」

男の中で何かが切れた……何か、決定的な何かが。

肩肘を張って振り回す剣撃を、ジャンは仕方なくいなしながら受け続ける。

一撃、それはそれは重い一撃だが、腕だけの力で振るうそれらだ。さらに構えもぎこちなく、棒を振り回すのと同じ感覚だ。路上でのケンカと同意義。剣を剣としてではなく、一つの道具として扱う意識。

故に攻撃を防がれた事によって跳ね返る衝撃は、彼の身体に蓄積されていく。これまでの訓練を適当に過ごしてきた青年なら無意識の内に限界は近づいているだろう。

そしてその時は、大した時間も置かずによってきた。

ジャンが剣を受ける。衝撃が彼に、そして男に伝わり——柄が男の手の中からすっぽ抜けた。

木剣は空中でくると回転して、孤を描いて彼のやや背後の地面に突き刺さる。誰にも当たらなかったのは、彼の自棄気味の乱舞に周囲が気づいて、空間を作ってくれていたお陰である。

「て、てめえ……！」

思わず崩れ落ち、上目遣いで睨んでくる男に、ジャンは大きく嘆息した。

「本当ならお前なんか徹底的に無視するんだけど……腕、痛いだろう？ 冷やすかマッサージするかしないと明日から響くぞ。医務室行けべらっ！」

格好良く手を差し伸べる。男は呼吸を乱しながら勢い良く、その手に伸ばした拳を振り上げ、ジャンの顔面に叩き込んだ。

ジャンは不意打ちを素直に受け、視界がぼやけるのを見た。

世界が一転し、今まで地面を見ていた筈なのに、気がつけば空を仰いでいた。

どさりと音がして、背中から全身へと衝撃が走る。痛い。受身も

取らずに倒れてしまった。

「は、はっ？ ばっかじゃねーのてめえ？ 俺を舐めすぎ、なんだよ。医務室ぐらい一人で行けるっつーの！」

——しかしまあ。

こんな真っ直ぐなヤツばっかなら、やりやすいんだけどなあ。

足音が遠ざかっていくのを聞きながら、ジャンは大きく息を吐いて微睡まどろんでいく。

意識は間もなく、ブラックアウトした。

「ジャンくんって結構バカなのね。カールなんて無視してれば良かったのに」

レイミイはとぐろを巻く尻尾をジャンの上に乗せてそう言った。

結局授業が終わった後に意識が回復し、タテガミの男『カール』も授業を抜けた後そのまま帰ってしまったらしい。ひとまず関わりたくは無いから、向こうから何かをしでかすまで放置で構わないだろう。

そして医務室の寝台に寝かされているジャンを待つのは、サニーとレイミイ、そしてトロスと……。

「あー、どちら様？」

「わ、忘れたの！？ あたしよ、テポンよ！ トロスのお姉ちゃん！！」

なんて激昂するのは、いつぞやの深夜にジャンの部屋に忍び込んだ弟想いの姉テポンだった。

「は、はは。冗談っすよ。ただ長い間見なかったんで、ちょっと誰かなーって思ってただけで」

「すっかり忘れてるじゃないのよ。脳みそ発酵してんじゃないの？」

「それ、いいすぎ」

「まあ何にしても話は聞いたわ。いじめられてるなら相談すればいいのに」

「いじめったって……ただのケンカでしょう？ 第三者が入るよう

な事じゃないっすよ」

イジメだと言われて思い返してみれば、イジメというのは言いすぎのような気がする。

ただの個人の憂さ晴らしであり、嫌がらせだ。イジメの定義は分からないが、そういったものではないような気がする。

もつとも、ここまでやられて彼を擁護するつもりなどは無いし、その義理もないが——かといって友人らに本人の居ない所でボロクソ言ってもらうのも気が引ける。非常に卑怯で卑劣な感じがするのだ。

そもそも鬱陶しいと思っただけで、ソレ以上の感情は無いのだから。

無関心といえぱったりだろう。

更生させるつもりは毛頭ないし、仲良くするつもりも同様。生活が脅かされなければそれでいい。

——グレルキツカケは、こういったものなのかもしれない。

漠然と考えながら、カールに少しだけ同情した。

「まあ話はもう終わりですよ。もうカールが手を出してこなければいいし、来たら来たで話し合います。迷惑だとか、そういうんじゃない、こう、おれたちの問題、みたいなの？」

しかし、と思っただけをしてみる。

すると、扉の近く、部屋の隅で腕を組むクロコの姿を発見した。

そして気づいたのだが、見舞いに来ているのは全て異人種だった。人間は誰一人としていない。

身体から妙なフェロモンでも出しているのかと疑いながら、彼はそれで自分の立場を再認識した。

「あ、そうだ」

と手を叩くのは、テポンだった。

「うちに来ない？」

と誘うのも、テポンだった。

「イヤですよ」

即答してみる。

腹の上でとぐろを巻く蛇の尾が、なにやら意図的に腹部を圧迫するような窮屈感を覚えた。

「ス、スミマセン……今日はなんだか食欲が無いので……」

「ジャンくん本気で言ってるの？」

レイミイが小馬鹿にするように言ってくる。眉尻を下げ、可哀想なものでも見るような顔だ。

同情されているようで悲しくなってきた。

カールもこんな気持だったのだろうか。

人はこうして、分かり合っていくのだろうか――。

「家で生活しない？ って、先輩はそう言ってるのよ」

「リアリイ？」

「だって居づらいでしょ。他の人の迷惑になるかもしれないし」

「あー、そういう見方もありますねえ」

尻尾をタップして重量を軽減してもらう。

すると、レイミイはなぜだか腕を組んでそっぽを向いてしまった。おれが何をしたらってんだ。

「ねえジャン、そうしてもらった方がいいよ。せつかくこっちに来てゆっくり出来ると思ってたのに、家でも疲れちゃうよ？ 本当だったら私の部屋でいいんだけど、寮長さんが厳しいから……」

「あ！ じゃあサニーちゃんも一緒に家に来ればいいのよ！ 家広いし、部屋は無駄にあるしね。トロスはいいでしょ？ それで」

「姉さんの好きにしていいいよ。まあ、ジャンの判断が一番だけどね」

「ほらジャンくん、先輩の好意をどうするの？」

尾先がチロチロと揺れる。それを腹の上で見ながら、ジャンは静かに頷いた。

もうどうにでもなれ、というのが正直な所だ。

「じゃ、じゃあ週末にでも、お邪魔します……」

そついう事になってしまった。

お引越し

寮の退去にはそう時間はかからず、事務係から書面を渡され、理由と署名を記してから約三日ほどで許可が降ろされた。

紙製品からなる板状の包装資材を箱に組み立て、荷物を整理しつつ中にぶち込む。蔵書や着替え、教科書など。他に何かあるかな、と部屋の中を漁るが、そもそもこの街に来る前ですら大した荷物がなかったことを思い出す。

やがて約束の週末が訪れた。

二連休の初日。

テポンは荷車を引いてやってきた。

「……これが、先輩の自宅ですか」

「なにを今更、先輩とかガラじゃないわね。いつも通りでいいわよ」
——そこは噴水広場から東に進んだ所にある。

少しばかり進めば、鉄門に蔦が巻き付いたり、その奥には噴水のある庭などが多く見られる館が殆どの、この城下町でも一等地と呼ばれる区画に入る。彼女の家は、その通りの中心部付近に建っていた。他と同じように鉄門が侵入者を拒み、外から見える庭には芝生が敷き詰められている、小奇麗な光景が目に入る。そしてその奥にあるのが大きな屋敷だ。

二階建てだが、廠かで、だからといって目立つわけでもない、良くも悪くも他と同様の館と言った風の建造物である。

「さ、入って」

施錠のされていない鉄門は、少しだけ重い手応えをみせてから、滑るように開いていく。錆びているわけではなく単純に重量のせいだろう。彼女はその全てを収納部分に押し込むと、大きく息を吐いた。

「ようこそ、我が家へ」

「お邪魔します、と、これからよろしくお願いします」

「わ、私も来て、本当に良かったんですか……？」

サニー・ベルガモットは不安気に口にする。そしてそれを表すように両手で胸を抑える所作を見せる。テポンはそれに苦笑するよう

に、
「だって兄妹できょうだいしょう？ 一人ぼっちは寂しいもんね」

それから優しい笑みを見せて、サニーの頭を優しく撫でた。まるで姉の風体だ。ジャンはそう思いながら、荷車を引いて門から中へとお邪魔した。

——芝生が敷き詰められている庭には、されど噴水は存在しない。その代わりとばかりに、ローズアーチを始めとした多種類の花が庭の一面を占めていて、ちょっとした庭園になっていた。

そこにはジヨウ口を片手に、そういつた花壇などを手入れするつなぎ姿がそこにある。気配や物音に気づいたのか、ソレはゆっくりと振り返り、やがて彼らを視認した。

「ああ、お嬢さん……と、その薄汚い小僧と可愛い娘さんは？」

頭に被る麦わら帽子を取り、彼はジヨウ口を置いて歩み寄ってくる。ジャンを一瞥すれば眉間にシワを寄せ、サニーを見ればにこやかな笑顔を見せる、ある意味紳士的な男だ。

「パスカル、話したでしょう？ 今日から家に住むことになったジャン・ステイルとサニー・ベルガモットよ」

男は腕をまくり、首にさげるタオルで額の汗を拭いながら、やがて彼らの前に止まる。

短髪の頭を掻き毟るようにして、パスカルと呼ばれた男は大きく息を吐いた。

「冗談か何かで？」

「……言わなかったかしら」

「聞いてないっすよ！ 大体、住むってんなら昨日今日の話じゃないでしょうッ!？」

「でも、他の二人とトロスは歓迎会の買い出しに行ってるけど……」
「うわあッ、また除け者かよ！」

大げさなまでに頭を抱えて跪くパスカルをよそに、テポンは彼を指さし、ジャンらに紹介した。

「お手伝いさんのパスカル。こんな感じの男よ」

「ど、どうもよろしく……お願いします」

「これからよろしくおねがいしますっ！」

一先ず一礼。これから世話になる相手に、心から深く頭を下げると――既に立ち直り腰に手をやるパスカルは、ふふんと鼻を鳴らしてジャンを見下ろしていた。

「お嬢さんを始めとする女性に手を出したら俺が直々に殺す。いいな？ それから――」

途端にニヤニヤと表情を綻ばせて手を差し出すのは、サニーに対してだ。

下心丸出しのパスカルはそれから声色を変え、咳払いを一つ。

「お嬢ちゃん、何かわからないことがあったり、不便なことがあったらいつでもなんでも言ってくれ。俺はいつでも君の味方だよ」

「……ジャンに悪いことしたら許しませんよ？」

上目遣いで睨みつけて、サニーは彼と握手を交わす。

ぎよつと顔を強張らせてからパスカルはジャンを一瞥し、舌を鳴らした。

「善処します」

「さ、パスカル。業務に戻っていいわよ」

「ぎよ、業務つたって……みんな朝っぱらからどっか行っちゃうから、暇で仕方なくやってたんすよ。俺で良ければ、荷物運びの手伝いでもしますよ。ジャンくんのもな！」

厭味つたらしく強調し、彼はテポンの了解も得ずに玄関へと歩き出す。

彼女はそんな彼に肩をすくめてから、二人を案内するように先を歩いた。

玄関から入って右手側に伸びる通路には窓から差し込む日差しが、心地よく室内を照らしていた。壁には五つの扉が並び、説明によればそこがお手伝いさんの私室らしい。

さらに正面右手側には二階へと続く通路があり、その脇には奥まで続く通路。突き当りの扉はバスルームであり、左手側の壁、そこからほど近いドアはトイレらしい。それより遙か手前の、両開きの扉は大広間に繋がるものであり、主な団欒や食事はここで行われるということだった。

家主の自室は階段の上にあり、正面の壁には私室が。その反対側の壁には、客室が並ぶ。

ジャンらはその中から、扉に打ち付けてある、真鍮プレートに刻まれた自分の名前を探して、そこに荷物を運び入れ——終えて、それぞれの部屋で休憩していた。

「しっかしまあ、おれがこんな所に来ることになるとはなあ……」

夢のようだ、とジャンは思う。

キングサイズのベッドは、部屋の中央壁沿いに鎮座する。扉の近くには大きなクローゼットがその存在を隠すこと無く堂々と置かれて、さらに本棚さえもある。それでも尚、部屋が狭く感じることはない。

レースのカーテンがかかる窓は両開きのガラス戸であり、開ければ半円形のベランダが備え付けられている。その近くの壁には、これまた大きな机があつて——。

ジャンは思わずため息を付く。

これでもう二桁に上るソレだ。

夢のようだ、心の底から思う。

きっかけはどうであれ、まさか、冗談か何かではないのかと疑いなくなる。

それほどまでに彼は浮かれていて、思わずその良く身体が沈み反発する寝台に寝転んだ。

「にやつ?!」

刹那、悲鳴が聞こえる。

慌てて身体を転がすと、そのすぐ後ろ、腰の辺りにはもっこりとした妙な感触があった事に、そこでようやく気がついた。その盛り上がりはのそのそと移動して、足元から落ちる。軽い音を鳴らして姿を現したのは、まごう事無き猫だった。

大きさからしてまだ子猫なのだろう。

小さな体軀は一度ジャンに背を見せてから、くるりと振り返って彼の姿を見る。しつぽをゆらゆらと揺らすその姿は愛らしいの一言に尽きる。

「ネコかー。ネコかわいいなー」

座ったまま前屈体勢になって手を出し、指を揺らす。が、興味なさそうに顔を逸らすと、そのまま悠々とした足取りで扉へと向かう。ジャンはその後についてドアの隙間を少し開けると、ネコはそのまま隙間を抜けて出ていった。

ジャンはそれから、箱を開けて荷物を出す。壁に立てかけたブロードソードはそのままにしておいたとしても、制服やは早い所ハングーに掛けてしまわないと皺になってしまう。

それに、荷物整理を後に回しても良いことなど無いのだ。

彼が決意して行動を起こすその瞬間に、ドアは勢い良く開かれた。「アンタがジャン・ステイルね」

扉を全開にして、壁に叩きつける。

黄金色の長い髪を翻すのは女性であり、四肢は毛皮に、手足は肉球に覆われている。頭に、尻にはネコの耳や尾が生えていて――考えるまでもなく、彼女は先程のネコなのだろう。

完全にネコに擬態できるのはかなり高度な技術を要すると聞きかじったが……どうあれ人並の知能を持っているのだ。それを理解した瞬間、ヒエラルキーの下級層に落とされていくのを、彼は感じていた。

「ええ、はい。これからよろしく願います」

「つまんなそうな男ねえ。まあいいわ、そんな感じでよろしく。種族はなんなの？」

「種族、ですか。えー……人間、ですかね」

「人間？ ヒト？」

その大きな琥珀のような眼を見開き、縦に長い瞳孔をより細くして彼女はジャンを見る。腕を組んだまま、腰を折り曲げるようにして視線を近づかせる。

「……ビビんないの？」

それから、恐る恐るといった風に、珍しいものに触れるように声をかける。先ほどの、威圧的な勢いは既に失せているようだった。

「いや、おれネコ好きですし」

「異人種よ？」

「そう言われてもなあ……」

困ったように頭を掻いてみせる。

なぜこんな愛らしい姿に畏怖しなければならないのだろうか。

剣を振り回したり、傍若無人な人だったりしたら怯える、恐れるといった感情を抱くのは当然かも知れないが、ただ外見が少し異なるだけでそういったモノを抱くことはない。

これまでがそうだったし、そういった人間に対する理解はあっても、ジャン自身納得はしていない。

そうしてまた、それだけで異人種に自分が評価される事も、しつくり来ないのだ。

ただの感性の違いなのに良い評価をもらう。好意さえ持ってくれる。そんな彼らに、どこか後ろめたさを感じるような気がした。

「へえ、見る目あるじゃないの。あんた」

「はは、ありがとう。えーっと……」

「タマよ。ここでは一応ネコとしてやってるからね」

「タマさんは——」

「呼び捨てでいいわ。ネコに敬称って、気持ち悪いったらありやし

ない」

身を抱くようにして、冗談っぽくフルフルと彼女は震えてみせる。美女人としてゐるのに、表現はどこか子どもっぽい。ジャンは思わず微笑むと、タマはキツと睨んできた。

「あに笑ってんのよ」

舌つ足らずのように不平する。

「いや。まあ、その……よろしく」

抑えられない興奮に、思わず頬がゆるむ。手を差し出して握手を試みると――肉球が、鋭くジャンの顔面を殴打した。

表面の、ちよつとした硬さの中にはマシユマロのようなやわさがある。お日様の匂いがして、ジャンは満面の笑みで寝台に倒れていた。

「……なに、こーゆーのが好きなんだ？」

軽々と床を蹴ると、タマは獣人らしい身体能力を発揮して軽々と寝台に飛び乗った。大きく弾み、ついで彼女のたわわに実るバストが揺れるのを見ながら、ジャンはさらに頬をペチペチと肉球で叩かれ続けていた。

「ほらほら……そんなだらしのない顔して、そんなに気持ちいいの？」

「あ、ああ……に、肉球！ 肉球もつと！」

「うふふ、気持ち悪い……そんなに欲しいのなら、ほら！」

「ああっ、ああああっ！！」

両手の肉球を力一杯顔に押し付けられる。

幸せだ。

もう、人生全ての運を投げ売っているのかもしれない。

理性が潰える、彼はソレが失われるのを感じていて――。

「何やってんの？ ふたりとも……」

テポンの底冷えするような声は、瞬間的にジャンに理性を取り戻させて、また反射的にタマは寝台を弾くようにして床に着地した。

「肉球分を補給しました」

「補給させてました」

「……まあいいけど。わからないことがあったら、いつでも訊いてね?」

「あ、ありがとうございます」

ひどく恥ずかしいところを見られてしまった。

つい理性を投げ捨ててしまう程の事態に陥ったことは仕方のないことだが、自制しなければならぬだろう。

しかし、こんな魅力的な存在が身近にいて、果たして理性が保つだろうか?

タマをちらりと見ると、彼女はニツと笑って、八重歯を見せた。

「ははっ、可愛いやつめ」

——新生活は、こうして開始した。

休日謳歌　くその猫に肉球はあるか？く

なんでも、この屋敷にはトロス、テポンの他には三人のお手伝いさんに加えてタマ一匹だけの構成で、両親は不在らしい。亡くなっているという事ではなく、単純に”溝の門扉”^{ゲート}の向こう側、つまり異人種の故郷で暮らしているだけであり、完全な放任主義ということだ。

「うう……もう、朝……？」

ガラス戸から差し込む陽が床を照らし、その反射がまぶたを照らす。ジャンはそこから意識が少しずつ浮上して、やがて覚醒した。

だが眠気に半身がどっぴりと浸っている状況である。夕べは荷物の整理や、緊張やらで深夜まで眠れなかったこともあるが、なによりも布団が異様なまでに温かいことが一番の理由だった。

羽毛布団は熱を逃さず、さらにジャンの熱を蓄えて身体を温める。さらにまるで人の肌のような抱枕が熱を持ち、心地よい毛皮が身体に抱きつく感覚が酷く心地よくて――。

「ん……？」

抱枕など、この部屋にはなかったはずだ。

ジャンは、己が掴む手を少し動かす。と、彼がこれまでの人生で触れた何よりも柔らかく、最上の弾力を持つ何かがある中に入っていた。

薄く目を開ける。

共に、穏やかな吐息が顔に掛かるのがわかった。

――眼前に、タマの寝顔があった。

絹の衣服は既に布団の中で大きく肌蹴っていて、タマはそのままジャンを抱枕にするように抱きついている。抵抗するように体の前に突き出された両手は、それ故に彼女のバストを存分に鷲掴む形となっていた。

「なんという事でしょう」

思わず漏らすと、その声に反応したのか、タマのまぶたがぴくりと弾んだ。

それからややあって、

「ん、ん……っ」

艶やかな吐息と共に声を漏らし、力一杯抱擁するように伸びをする。

タマは、それから眠そうに目を開けた。

「どしたの、ジャー？」

ジャーというのは、タマが勝手に名付けたジャンの愛称だ。実にあざとい呼び名だとは思うが、タマ補正のお陰で特に疑問に思うことはない。ただ、それが伝播してしまったようにサニーまでそう呼んでくるのは、少しばかり恥ずかしかった。

「なんでお前は抱きついて寝てんだよ？」

理性が手を離せと囁いている。

だが、どれだけ理性がフルに稼働して腕力を駆使して彼女から引き剥がそうとしても、本能が許さない。故にたゆんたゆんと、肉球顔負けの弾力を味わうように手の中で揺れるだけであり——幾多の刺激を経て、手のひらに硬度を持った突起が生まれた。

「……ジャーのすけべ」

言って、タマは頬を桜色に染めて、ぎゅっとジャンを抱きしめた。

「という夢を見ました」

「なにそれキモい」

タマは心底軽蔑したような視線でジャンを見下ろした。

「ジャー？ なにそれ、炊飯器？」

「いや、その……」

「大体なんで常に燃費の悪い人型になつてなくちゃなの？ ジャンを楽しませるためのマスコットじゃないんだけど」

「おっしゃる通りです」

ネコの姿でカンカンに怒るタマは、寝台の上で正座する彼に対し

て、何度も布団を叩いて、尻尾をパタパタと振って感情を表現していた。

そもそもこうなった理由は、タマが起こしに来た際に布団をひっ剥いで——生理現象を見られてしまったからだ。そこからごく自然的に、「何の夢を見てたの？」という流れになり、現在に至る。

まだその時は怒られてはいなかった。

だが、先日のタマに対する印象があまりに強かったせいで見た夢である。

もつとも、さすがにそんな事は口にできないので、秘密なのだが。「まあなんでも良いけど。朝ごはん食べるなら、用意してあるけど」「すぐ行きます」

「もう二度とキモイこと言わないでよね。嫌いになるから」

「はい……あ、最後に一つ、いいですか？」

何か心残りがある。胸の中を感じたそのしこりの正体がわかった所で、ジャンはそう声を上げる。

後ろ姿を見せたタマは、いかにも不機嫌そうな顔でジャンを見る。

「あによ」

ぶつきらばうに訊いてきた。

——言うか、言わざるか。

されど、後悔するならば確実に告げたほうがいい。何もしない後悔は、何よりも苦しいからだ。

「ごっ、語尾に”にやあ”だとか”にゃん”は付けないんですか？」

「……あの」

口ごもるように、彼女は続ける。

「もしかして会話成り立ってなかった？ 言葉通じてなかった？」

「いえ、大丈夫です。タマの言葉は全て理解できてます。今日も可愛いし」

「フオローすれば良いってもんじゃないけど……真性ね。そんなにネコ好きなの？」

「大好きです。もうタマンねえです」

タマの姿が、不意に消える。

否、ジャンの肉眼で尾を引くように肉薄する陰だけは捉えられていた。

音もなく気配が近づく。僅か一秒にも満たぬ時間の中で、その白に茶色にこげ茶の混じる三毛猫は、地面を弾いて眼前に迫った。

目の前にネコが現れた。そう認識するよりも早く、振り薙がれた一閃があった。

それから間もなく、タマは軽々とジャンのすぐ近くに着地する。

すつと、鼻筋から血が線状に三本浮き上がったかと思うと、鋭い痛みが並のように押し寄せてきた。

鮮血が吹き出るわけでもなく、また傷があると教える程度の出血だけがそこにはあったが、痛みは見た目に反して非常に強い。

まず目が開けられない。痛みのせいで、思考がままならない。

タマの声は、横になって悶えるジャンの耳元で聞こえた。

「安心して。消毒してあるから……にゃあ」

ぽん、と頭を肉球で叩く感触を残して、気配は走り去るようになく遠くなっていった。

「お食事はどうでした？」

暑いからという理由だけでキャミソールを来て、腿までがあらわになる短いズボンを履く女性は、それでも体裁を整えるようにヘツドドレスだけは身につけていた。

そんな彼女は顔や肌、足が驚くほどに透き通るように白く——その腕、足、指に細かく吸盤を付け、また太い四本の房を好き放題に背中に流す頭には、されど髪はなく、髪のような触手があるだけである。

彼女はタコ族の異人種であり、この屋敷のお手伝いさんの一人だ。

「ええ、美味しかったです。なんだか、もっと味わってずっと食べていたかったです」

「あらら、嬉しいことを……ふふ」

嬉しそうに彼女は笑う。しかしそんな褒め言葉に頬を紅潮させたり、恥ずかしがったりするようなウブな姿は一切無く、経験豊富な大人の女性の雰囲気醸し出していた。

「でも、わざわざスミマセン。最後まで寝てたおれを待っててくれたみたいで……」

長く伸びる机には、まだ日が登ってからそう時間が経って居ないのであろう頃合いなのにもかかわらず、ジャン以外の顔は無い。彼女の話の聞くに、既にテポンはサニーを連れて買い物に出かけてしまったらしい。トロスは入学してから日課にしているトレーニングに出かけたばかりで昼頃まで帰ってこないらしく、この屋敷に残されたのはジャンと、お手伝いさん、それにタマだけになる。

「いいのよ、別にやることなんてあまりないし。それに、あまり褒めてもらったことがないから嬉しかったしね」

「いや、ホントの事を言っただけですし」

「あまり褒めると、サニーちゃんが拗ねるわよ？」

「ああ、そう。サニーで思い出したんですけど、もしサニーが料理を手伝いたいって言うてきたら、断らないでやってほしいんですよ。あいつ、なんだか料理が趣味だか生きがみたいで、ずっと料理ばっかしてましたし」

「ふうん……そうね、なら今夜あたり手伝ってもらおうかしら」

そういう彼女は、どこかイタズラっぽい笑みを浮かべていた。怪しく、何か企んでいそうなソレだが、ジャンには彼女が何を考えているのか皆目見当もつかない。

「それじゃ、オクトさん。ごちそうさまです」

「お粗末さま。あ、ジャンくん。これから何か用事でもあるの？」

「そーですね……特には無いです」

「ちよつとおつかい頼んでもいいかしら？ 他のに頼むと、いちいちうるさくってね。もちろんお礼はするわよ？」

「いや、大丈夫です。お世話になっている身ですし。それで、おつかいってというのは——」

その男はジャン・ステイルから注文の内容を聞き終えると、椅子から立ち上がり、その埃っぽい空気をかき乱すように乱暴な様子でカウンターを乗り越えてきた。二メートルほど離れたジャンを睨みつけるようにしてから、わざとらしいと言っよりも、どこか演技がかった動作で、近場の本棚へと向かう。

本棚が無数に並ぶ店内。そして本棚と本棚で作られる通路の、その終着点にカウンターがあった。

胡散臭い口ひげを生やす男は、髪を脂でオールバックにして、片眼鏡を掛けた紳士然とした外観だった。どこか気難しく神経質そうな顔立ちに反して、その“本屋”は客があまり来ないのか、掃除があまりなされていないのか、空気中に埃が漂っている。

くしゅん、と顔を揺らしてタマはくしゃみをして、ジャンはそれに続くようにくしゃみをした。

「いつ来ても最悪」

「まあそう言ってくれるなタマゴウチ少佐。奴らから姿を隠すための隠蔽工作の一種だと、何度言ったら分かってくれるのだ？」

ジャンの肩に乗るタマは不快そうに、店主から視線を外した。

「その名前、わけわかんないし」

「やはりまだ記憶は戻らないのか。やはりガウル帝国の内戦の代償は大きいか……」

店主はそう口にしながら本棚を漁る。

オクトの説明によれば、彼はガウル帝国という、この王国が存在する大陸の向こう側、海を越えた先にある大陸からやってきたという。そこであつた内戦から逃げてきたという説明だが、タマを、その恐らく飼っていたであろう愛猫と信じ込んでいる。しかしその愛称を完全に拒否していたおかげで、今は間をとってそんな珍妙な名前になつていた。

そしてオクトは、この店を鼻屑にしている。理由は単に、品揃えが良いからだ。

どんな理由で本屋を営んでいても毎月新書を仕入れるし、客も居ないというわけではないから経営を維持できている。そしてどれほどマニアックな本でも、古書でも妙に揃っていた。

ジャンとて興味が無いわけではないが、今日はおつかいだ。また後日、個人的に來たいと思っていた。

「ったく、なんであたしまで連れてきたわけ？」

「いや、だってオクトさんが、こっちのほうの話が早いって言うたし」

「もう……ま、”中佐殿”の様子は相変わらずで良かったけど、もう二度と來たくないわ……くしゅっ」

また小さくくしゃみをする。首を振り、前足で顔を撫でるように拭いた。

「中佐殿！ちゃんと掃除してよ！」

「何を言うタマゴウチ少佐、この古臭さ、カビ臭さが良いのではないか。なあ少年、あながちわからんでもないだろう？」

「え、いや……まあ。こういうところが図書館とは違う、本屋の良いところでもありますよね」

「おお！さすがタマゴウチ少佐に見初められた男！分かっていないではないか！」

「ですが、せめて簡単な掃除くらいはしたほうが良いのでは？」

「むう、先程からさすがにそこまで言われればしないわけには……っと、見つけたぞ少年！望みの品はコレで良いのだな？ははは

！うっかり新刊をしまいこんだから少々手間だったが、見つかったて安心だ！」

中佐殿は比較的新しい、革張りの本をジャンに手渡すと、腰に手を当てて豪快に笑う。豪気というのはこの男のためにあるような言葉な気がした。

本のタイトルは『あなたが死ぬまでにやっておきたい……。のこと』というもの。一見自己啓発本のように見えるが、内容は深い恋愛小説らしい。オクトは最近この作者に熱中しているらしく、すべ

ての単行本はこの店で購入し、新刊を心待ちにしていたとの事だ。

「ええ、これで大丈夫です」

本を念のために確認して、中佐に手渡す。彼はそれからカウンターの奥へと飛び上がるように引っ込むと、手早く紙袋に本を入れて、カウンターに置いた。

「お代は既に受け取っているから、このままで大丈夫だ。心ゆくまで堪能するがいい！　っと、少年は何か気になる本はあったのか？」

ジャンはそれを受け取りながら、タマの首の下をくすぐるように撫でる。そうして不意気味の質問に少し驚いてから、首を振った。

「たくさん本があつて、まだよくわかんないです。また後日来たいので、その時はよろしくおねがいします」

「ふむそうか……残念だが、待つとしよう。用がなくとも、私はいつでもここに居る。来てくれると嬉しい！」

「は、はい。失礼します」

軽く会釈をするジャンに、中佐は結局本名を覚えてくれること無く、敬礼してその姿を見送った。

あらゆる意味で後ろ髪引かれる思いに駆られながら、ジャンはそそくさとその店を後にする。

「でもジャンが居て助かったわ。いつもなら一人だもん」

気を良くしたのか、彼女は人型になってジャンの横を歩いていた。なぜだか衣服は着たままの格好で、四肢はやはり毛皮に、掌は肉球へと変化し、頭にはネコミミ、尻からは尾を生やす。

そして腕を組む、胸を押し付けるといふことはなく、シャツにデニム生地のスボン姿で傍らにつく。肉球、正確には掌球は、その往来でも構わずジャンの手の中に入った。驚掴むような形で、他者から見れば手をつなぐように見えているであろうものだ。

「おれもタマと一緒によかったよ」

「どうせあたしの肉球が目的なんでしょ？」

「そ、そういうわけじゃないよ！　タマと一緒にいると楽しいし」

「楽しい……？　可愛いとかじゃなくて？」

彼女はマジマジとジャンを見つめて、首を傾げる。

うん、と彼はうなずいて、わかりやすく説明した。

「まあかわいいよ。ネコでも、人型でも。でもさ、タマと一緒にいると……こう、一緒に居るだけでも心が踊るんだよね。楽しいってそういうことだと思うけど」

「そ、そうなんだ……あ、や、やっぱりジャンって結構変わってるよね。女の子に、みんなにそう言ってるんでしょ？」

いつでも余裕を持っているような彼女は、頬を桜色に赤らめてそっぽを向く。だというのに、指球はぎゅっと締まって指を包んだ。

「別にそういう訳じゃないけど……この街だと、タマが初めてだし」

「は、初めてなんだ。あたしが、初めて？」

「まあ、そうだな」

「へ、へえ。……ねえ、ジャン？」

呼ぶ声に、顔を向ける。タマはそれに応じるように手を離して、その肉球を顔面に押し付けた。

すこし固い角質層の中には、ぷにぷにと柔らかい独特の感触がある。変わらないお日様の香りがして、ジャンの吐息に、抑えるようなタマの声が聞こえた。

「ジャン、またキモイこと言ったから、お仕置きだからね……っ！」

「た、タマ……こんな、み、みんなが見てる、ところで……！」

「うふふ、肉球って、結構ビンカンなんだからね！」

すっかり上気してしまった顔を隠すようにそっぽを向きながら、また肉球を強引にジャンの顔に押し付けて、足早に往来を歩く。

肉球のお陰で他の事に頭が回らなくなってしまふ彼の特性に少しだけ感謝しながら、タマはそそくさとジャンを連れて屋敷へと戻っていった。

ジャンはまた、不意打ちの幸福を堪能して――。

そうこうしている内に、楽しい休日は終わりを告げた。

日常風景

「なんだか、家で上手くやれてるようで僕は安心したよ」

いよいよ春が終わろうとしている季節。街路樹は青々とした葉が生い茂り、青空は澄み渡る。清々しい朝に、共に家を出たトロスは笑顔でジャンの肩を叩いた。

「いや、みんな何だかんだで親切だし、良い人ばっかだしな。環境も持て余すくらいだし、本当に感謝してるよ」

「何言ってるんだよ、僕だって、キミが試験の時に声をかけてくれたから学校でも、試験でも上手くやれたんだ。それに、家だとお手伝いさんの手伝いまでやってるんだろ？」

トロスはそう言うが、手伝うのは食器の片付けや簡単な掃除、庭の手入れくらいしかやれていないし、それだって本当に手伝い程度だ。それが彼らの手助けになっているかは、未だに疑わしい。

——そんな彼らが歩く通りはいつものように警ら兵が街を巡回していて、住民が日常的に歩いている。これから仕事に行くものや、ペットの散歩、井戸端会議をしている主婦層などその様相は様々だが、平和なものには変わりがない。

妙なまでに満たされている感覚がジャンの中にはあって、思わず頬は綻んでいた。

「でもジャン、最近なんだか私にかまってくれない……」

彼らの前でテポンと仲睦まじく、それこそ姉妹のように話していたサニーは、そんな会話が耳に入ったのか振り向いてから、むっつりと膨れた。テポンは宥めるように彼女の頭を撫でる。身長差は頭一つ分で、テポンがやや大人っぽいお陰でサニーの外見年齢は如実に下がっているようだった。

「登下校と家、学校で一緒じゃないか」

「ちがうの、だって前ならもっとお話したり、色々してたもん」

「んな事言ったって……これ以上一緒に居たら、一日中ずっと傍に

居ることになるぞ？ お前だって友達とか居るだろ。ほら、クロコとか、なんつったつけ……ハイビスカスの人とか」

「く、クロちゃんとアオイちゃんは学校でいつも遊んでるし、学校帰りで一緒に遊ぶ事もあるし……」

「いつでも会えるおれより、そういう仲良くしてくれる友達を――」
遮るように、トロスが再び肩を叩く。

大人気ないぞ、といわんばかりの表情に、些か無粋すぎたかとの己の台詞を思い返した。

だがそれとは全く異なる、思いも寄らない一言は果たして放たれたのだ。

「キミはまだ気付かないのか？」

「……何をだよ？」

「これまでサニーちゃんとずっと一緒に居たんだろう？」

「まあな。それが当たり前みたいなもんだったし」

やれやれ、と肩をすくめるトロスに、ジャンは彼が何を言わんとしているのかをなんとなく悟る。

だから彼は首を振って、

「強調するわけじゃあ無いが、物心ついてからずっとサニーと一緒にだったんだ。今更、何かが変わるわけじゃない」

「……ジャンは私の事きらい？」

うつむきがちでサニーが言った。上目遣いでサニーが責めた。

ジャンはいよいよ、なんだか彼女に悪いことをしているような気がして、

「好きだよ。……わかった、一緒に居ればいいんだろ？」

「うん！」

嬉しそうな、子供っぽい笑顔を見て、彼もまんざらではなさそうに微笑んだ。

学校と外との敷地を区別する鉄門を過ぎると、土がむき出しになる訓練場には人ばかりができていた。野次馬とも形容すべきその群

れは円くなつて、その中央にある程度の空間を残す。

互いに剣を、あるいは槍を構えた二者には素人が見て分かるほどに揺らぎがない。子供のケンカという様相は一切無く、今まさに血しぶきが宙を舞い鋼鉄の乱舞が周囲を切り刻まんとする威圧的な雰囲気、周囲を包んでいた。

「……あの、何が始まるんです？」

最後尾にて、その巨軀を活かして中を覗き込むクマのような鋭い爪を持つ男に声をかける。また毛皮を肌に癒着させる姿は、まさにクマといった風体だ。

彼は前を見つめながら静かに告げる。

「いや、それが良くわからねえのよ。俺がここに来た時はもうこうだったし、沈着してるし……ほら、周りを見てみる。みんな飽きて校舎に入り始めてる」

促されるように周囲に眼を向ければ、円を作る要素となっていた詰襟の白い学生服の連中、あるいは大きな襟や胸元のリボンが特徴的な制服の女子生徒らは、徐々に数を少なくしている。

リボンが紅い、あるいはボタンが銀であるのが一年、水色で金なのが二年であるが——そのほとんどは二年だった。残っているのは一年のみであり、よく見れば、声を掛けた生徒は上級生だった。胸元のボタンを外して露出する格好は、野性味溢れる男らしい姿である。

「まあ、いつもの事だろうけど……前からは随分期間が空いてたしなあ」

「いつもの……とは？」

ん、と反応して男は振り返る。それからジャンらの姿を一見すると、なるほど、と手を打った。

「あいつらは犬猿の仲つーのかな、良く喧嘩してて、ヒートアップするといつでも得物を出して戦うんだよ。最近はそのを止める奴が居たんだが……どうやら今日は居ないらしいな。だからこうなった。ま、決着がつくか飽きるかすれば教室に戻るだろうよ。お前ら

も、遅刻すんなよ」

男はカッカツカと笑うと、それからジャンの頭を幾度か叩いて、校舎へと戻っていった。

気がつけば野次馬も随分と数を減らし、隙間から中の様子を伺うことが出来る程となっている。

「ねえジャン、教室行こ？」

「ああ、そうだな。見ていても仕方が無いし」

飽きたのか、あるいはそういった闘争を眼にしたくないのか、サニの提案にジャンは従った。

そうして彼らに背を向ければ、やがて鋼鉄がぶつかり合う音、さらに咆哮が耳に届く。また背中を押すような凄まじい威圧を感じながら、かくして彼らは昇降口へと向かっていった。

——その刹那の事だった。

「唸れ、剣風ウツー！」

尋常ならざる衝撃が、振り下ろされた剣から離れて斬撃と変異する。刃状の巨大な旋風は空間を断裂する勢いで男へと迫り、大地を削り深い溝を作りながらやがて接触。構えた槍の穂先が甲高い悲鳴を上げるように、空気が切り裂かれる摩擦音、さらに金属を削る摩擦音を大気に伝播させながら、火花を散らしていた。

だが、勢いは殺し切れない。

間もなく体勢を崩して吹き飛ばされる男は、掻き別れた人波を通り過ぎて——迫る。

何も気付かぬジャンの背へと肉薄したその陰は、結局そのままごく自然的に彼を巻き込んで倒れこんだ。

大地に、重なって倒れる二人。が、巻き込んだ張本人は白く染まり上がる長髪を乱したまま、ジャンを弾くようにして横に飛ばうとして、舌を鳴らす。

「くそ、邪魔くせえ！」

片膝を付いて半身を起こす。そのまま槍の柄を地面に突き刺すと

——得物を握る腕から紋様が浮かび上がり、それが槍へと伝播する。袖を捲るが故にあらわになる腕、複雑な紋章。紅く輝き槍にさえもソレが刻み込まれ、大地に干渉した。

「空間の障壁ッ！」

果たして魔術は発現する。

腕、槍ともに刻まれた紋様が一樣に虚空、その槍の手前に弾かれて浮かび上がる。紅い輝きがそれと共に、槍を中心点にした半円形の盾のような障壁を創りだした。

追撃と思しき衝撃波からなる斬撃は、再び大地に深い傷痕を作りながら切迫し——衝突。眼前で空間の中にそこにあるという確かな姿を作って現れた斬撃は、第一打で障壁に決定的な亀裂を入れる。が、破壊されない。

さらにジリジリと押し殺すように剣風は障壁を砕き、無数のヒビを刻み込んだ。斬撃は途絶えず、されど威力は徐々に殺されて、やがて途絶える。吐息のような小さな旋風となって失せた斬撃は呆気無く、共に白髪の男は口角を吊り上げ、この瞬間を待っていた。

全身に流れる心地よい衝撃に四肢を震わせ、一撃のみならず追撃を許して守備に転じた男は、されどこの事態を喜んでいた。

障壁は役割を終えて、間もなくバラバラに、ガラスが砕けるように虚空の中に散っていく。だが、空気中に溶けることはしない。

それを構成していた魔術的要素を持つ破片はそのまま矢尻の形を作って、さらに篋^の、つまり棒の部分、さらに矢羽を構成する。槍はやがて弓と相成り、弦は同様に穂先と、大地に突き刺さる柄尻とを繋ぐ。

男は手馴れたように矢を手に取り、弦に引っ掛けて力一杯引き寄せる。張り詰めた弦は今にも断裂してしまいそうな雰囲気を感じながらも、力強く、その威圧をも孕む。

——攻撃を防いだ刹那の出来事。

対する男が、その攻撃手段を理解するよりも早く、やがてその矢は虚空を穿つ。

大気を切り裂く一点の矢は、鋭く、吸い込まれるように男に迫る。同時に男は、槍を引き抜いて大地を弾いた。

守備から攻撃への、乱雑とも流麗とも受けて取れる流れ。

男は咆哮^{さけ}ぶ。

「賢^{さか}あしなんだよ、てめえは！」

「貴様にや負ける！」

振り上げられた剣先^{きつさき}に、紅い輝きを纏った半透明の矢尻が触れる。その集中力、判断、対応。その全てが常軌を逸していた。まともな動体視力では反応できるはずのない矢に動き、さらに線から点へと転ずる突きの攻撃を活かして対する。また、障壁を矢へと展開する柔軟性。

異形とも見える實力は、やはり騎士志願ゆえのものなのだろうか。単なる才能や努力では決して覆せないであろう印象は、僅か数度のやりとりだけで心に刻まれる。

やがて矢が砕けて、突撃が勝利を収める。

再び距離を縮めた両者だが――。

「何をしとるか貴様らアアアッ!!」

戦闘教官の乱入にて、何らかのパフォーマンスにも似たケンカは、終わりを告げるのだった。

「なんかすごい人たちだったなあ……」

教室で、机をあわせて弁当を展開。

始まる昼食の最中にそう漏らしたのは、ジャン・スティールだった。

多くのクラスメイトは食堂へと向かい、残るのは昼食持参組のみ。今日はトロスト、クロコ、アオイ、サニーという面々で、それぞれ向かい合わせになって席につく。

残る三人ほどのグループは窓枠に腰をかけるようにして、あるいはその対面の机に腰をかけて、登校時に購入したのであるうパンを食んでいた。

「あ、それ私見てましたよ」

と口にするのはアオイだ。頭に側頭部にハイビスカスを咲かせて、スカート代わりに大きな花弁を腰に纏う、植物族の娘である。ただそこに居るだけでなんだか暑くなるような気がする、常夏気分になさせてくれる女の子は、妙に丁寧ていねいにジャンに反応する。

「あんな戦闘、初めて見たんですけど……圧巻でした」

「に比べてお前という男は……」

クロコはわざとらしく肩をすぼめて、鼻を鳴らした。果たして彼女にケンカを売っている自覚があるのかどうか、甚だ疑問である。

「し、仕方ないだろ！ 後ろから飛んでくるって予想できないし、対応できないし！」

「でも避けられるだろうに」

「よ……そのとおりだよ！」

「うわ、開き直った」

トロスはサニー特製の弁当に舌鼓を打ちながら、苦笑しつつそう漏らす。

「でもジャンも怪我が無くてよかったよね」

「確かに、アレで怪我したら笑えないし」

サニーはいいタイミングで助け舟を出してくれる。やはり付き合いが長いだけに、どこで困っているのか、どこで助けて欲しいのがよく分かっていて、だからこそ大助かりだ。ジャンは手を伸ばして、サニーの頭を撫でてやる。

彼女は嬉しそうに首をかしげて、横に並ぶジャンに寄り添った。

「なんか……どっちかって言うと微笑ましい感じだよね」

「確かに」

「ですね。ほんとの兄妹きょうだいみたいです」

ほんわかと、落ち着いた雰囲気。

そういった日常が構成されて、ジャン・スティールは一日の大半、全てと言っても過言ではないほどに、その殆どを異人種と共に過ごしていた。

だからこそ、と言うべきなのか。

「ジャン！ ジャーン！」

妙なことに巻き込まれるのも、割合に多くなっていた。

彼の名を叫びながら廊下を走り、そうして教室に飛び込んだ。きた姿は小さく、四本の足で床を弾くとそのままジャンの後頭部に突っ込んだ。

ネコはそうして頭に抱きつくと、ポンポンポン肉球で頭をたたき、どうやら錯乱しているらしい事を教える。

「ど、どうしたんだよタマ？ っていうか、なんで学校に——」

「助けて、しょ、しょ……」

「しょ？」

「触手が……地下から、なんか出てきたのよ！」

地下の呪い　～学校の七不思議1～

まさか、地下室というものが本当にあるとは思わなかった。

ジャンは、及び腰のタマを肩に乗せて、食事が終わり次第教室を飛び出していった。

向かう先は、校舎裏。地面に埋め込まれている床収納庫の扉のよ
うな蓋がある、焼却炉から程なく近い場所だ。

今ではその蓋は開け放たれていて、よく見れば『封』と書かれた
紙が半ばから黒い炭に変わっているのがよくわかる。

「またなんでこんな所に……」

「だ、だって怪しい匂いがプンプンしてたのよ？　行くっきゃない
じゃない」

「ていうか、なんで学校に？」

「いい加減暇だったのよ」

すまし顔でタマが言った。

面倒事を持ってきたというのにこの表情である。手馴れたものな
のだろう。

が、ジャン自身興味がないわけでもないし、まんざらでもない。
だからまず教員を呼ぶより、先に自分で確かめたかったからここに
来ていた。

護身用に持ち歩いている短刀を腰のベルトにくくりつけて、下り
の階段となるその中へと足を伸ばした。

明かりには、魔石を使用した技術の粋である携帯式の電灯がある。
筒状になり、先頭に装着した魔石が僅かな光を吸収して増幅、そし
て切り替え装置によって点灯を操作できる。

人造の石材で塗り固めてある階段や壁、天井は冷たく、中に入る
だけで空気の冷え込みを感じることが出来た。ジャンはそれから、
ポケットから電灯を取り出して付ける。と、十数段の階段を下りた
先にある通路の奥。硬く閉ざされていたであろう鉄の扉が半分だけ、

口を開けているのが見えた。

長い間人が踏み込んだような形跡は無く、通路の床にはタマの足あとだけが残っている。

鼻を突くような腐臭にジャンは袖口で鼻を抑え、階段を降りてから、少しばかりそこで立ち止まった。

——扉の向こう側に、強い気配を感じる。

それが、彼女が言っていた触手なのだろう。

だが、触手があるとなれば、それを操る、その元になっている存在があるはず。しかしなれど、長い間人が寄らないこの地下で、果たして生存していられる生物などが存在するだろうか？

さらにこの、騎士養成学校の敷地内にあるというのにも疑問が生まれる。

封印されていた、と考えられるが、なぜこの場所に。そしてまた、それはどのような姿なのだろうか……。

疑問は重なり、解消されない。

ジャンはその淀んだ空気を衣服越しに吸い込んでから、小さく頷いた。

「行くぞ、タマ。準備はいいか？」

「あたしはできてる」

「よし……！」

タマはジャンの首元に顔をうずめて待機する。

彼は重い一歩を踏み出して、さらに一歩、もう一歩……そうやって、やがて扉の前へと近づいた。

電灯を持つ手で、扉に手を掛けると――。

『だれ……？』

淀んだ空気に鈍く伝播する声音。

声帯を潰されたような、醜悪な声。

だがそれは確かな言葉となって、ジャンへと投げられた。

思わず腰が抜けそうになる。高鳴る心臓が今にも破裂せんとして、ジャンはそのまま扉を掴む腕に寄りかかるように停止した。

——言葉が通じるのか？

臭気がより強くなるのを感じながら、ジャンは考える。

異人種なのだろうか。

人と同じ程度の知能を持つ生物。さらに触手を持ち、長い間地下空間で生きながらう事ができる生き物……少し考えても、それがなんなのか、ジャンの頭の中に該当する存在はない。

しかし異人種だ。人間側からしてみれば、ある意味何でもありのような生物である。

これまで人間界に、表面上でも溶け込んできたのは、この世界にそもそも存在している生物と同化したような異人種だ。たとえば獣あるいは植物、軟体動物、爬虫類。種類数多で、恐らくまだ見ぬ種族もある。

その中に、こういった生き物がいても、なんら不思議ではない。

この世界の科学が通用しないのだ。ありうる話である。

ジャンは息を飲み、少しでも考えてから、口を開けた。

顎が震える。足がガクガクと揺れる。これが恐怖ゆえなのか、興奮ゆえなのか、自分でもよく分からない。

「か、勝手に入ってすみません。あの、気分を害したのであれば、すぐに帰りますので……」

『……だれ？』

果たして言葉に返答はやってきたが、それは会話として成り立たない。

あるいは。

彼は考えて、ようやく告げる。

「ジャン・ステイルです。この学校の、一年です」

——言ってから、少しだけ後悔した。

こう言わなければこの場を乗り切ることとは出来なかったかもしれない。だが、噂に寄ればこいつは『呪い』だ。名前さえあれば、人を殺すくらいなんでもないかもしれない。そんな存在、権化なのかもしれない。

そうだ。生物である確証などもとより無かった。

魔術によって生まれた意識のある何かなのかもしれないし、科学によって作られた何かなのかもしれない。何よりもこれを生物と断定するにはあまりにも情報が少ないし、早計すぎた。

早まってしまったか……そう考える最中に、扉の隙間から何かの陰が現れた。

ぬるりと粘膜をまとわりつかせる、一本の流線型の何か。くすんだ紅い色はむき出しになった真皮のようだが、鮮血が漏れる様子はない。触手と呼ばれるそれは、その身を起こすとやがてジャンの膝くらいの高さにまで持ち上がった。

『きて……』

鈍い声音は、触手の手招きと共に発される。

それは幾度か頭をさげるように手招いてから、ヌルヌルと蛇が這うように部屋の中へと退いていった。

「行くの？」

首に抱きついて目を瞑ったままのタマは、小さな声でそう訊く。

「行くしか、ないだろうな」

既に選択肢というものはないような気がする。もう巻き込まれてしまったのだ。こうすることは、仕方なの無いことなのだ。

ジャンは大きく息を吐いてから、扉の隙間にその身を滑り込ませるようにして、空間の中へと入っていった。

中に入ると、まず床の感触が途端に変わったことに気がついた。

分厚い苔の上に立つような感覚。不安定で、ぬめり、そして歩けばぬちゃぬちゃと粘液がすれ合う音がする。電灯を床に向けると――肉のような何かが、一面に敷き詰められていることがわかった。

それだけで腰が抜けそうなのにもかかわらず、教室ほどの広さを持つその空間の中央には、巨大な柱のようなものがあつた。

包み紙でアメを包んだように、中央部はやや膨らみを持つ。そしてそれは、まるで心臓のように鼓動していた。床は主に肉で埋まり、

また小さな触手が刺激に反応して現れる。いわば、腸絨毛のようなそれらだった。

さらに壁には鳶が這うように、触手や肉がこびりつく。その全ては蠢いていて、呼吸をするように臭気を放っていた。

耐えられない。

あまりにも世界が違いすぎる。

気色が悪いだとか、気持ちが悪いだとか、そういったもので括れる空間ではなかった。

最悪だ。

予想を上回る事態を目の当たりにして、尚、彼の足はその柱、声の主と思しきものへと近づいていった。

『きてくれた……ほんとにきたんだ……』

肉の柱。膨らみを持つ部分には、その空間には酷く似つかわしい姿があった。

透き通るような肌。鮮血のように、その肉と同化するような色のワンピースを身につける、銀髪の少女。四肢は肉に取り込まれるように、まるで礫にでもされているような姿がそこにはあった。

——おそらくこれが外界と接触するための装置と言うべき部分なのだろう。

そう考えれば、この空間内の肉やらそれらが全て、ひっくるめて一つの生物という事になる。

「ご、ごきげんよう……?」

挨拶を試みる。

『ごきげんよう……』

返された。

「お、お名前は?」

『ない……』

「そ、それでは、ちょっと……おいとましようかなあ、と思います」
言って、ごく自然的に背を見せる。

その瞬間だった。

粘液が音を立てる。肉から剥がれた一振りの触手が、その本体と言うべきソレから振り抜かれて――刹那。彼がその肉薄を理解するよりも早く、触手はジャンの腹に巻き付き、宙に持ち上げた。

電灯が手からこぼれ落ちる。照明は、吸い込まれるように本体へと近づいていく様を照らしていた。

「う、わああああ――っ?!」

『まっ……』

身体が肉塊に叩きつけられる。ぶよぶよとした奇妙な感覚に身体が埋もれた。

『おともだちに、なっ……』

タマは引つ張られる最中に落ちたのだろう。その通過点で、口から魂を吐き出すように倒れていた。精神が過負荷に堪え切れずに気絶してしまったらしい。

「お、お友達……ですか……」

『おともだち……』

繰り返す。

そうすると、不意に肉塊の手前から勢い良く触手が突き出るように出現した。

それはうねうねと、見えざる手によって粘土細工が加工されるように、触手はその形を変異させる。

人のように二本で一对の腕が生まれ、五本の指が作られ、また胸には未発達な膨らみ、まだくびれは無く寸胴、そしてぷつりと肉から引き離された触手は、やはり二本の足を生やしていた。

色が変わる。

先ほどの境界面と同様に、人間のような肌を持ち、腰までの長い銀髪を生やす。くすんだ、生気の無い瞳はそのままだが――何も知らなければ、その姿はそのまま人間に見える。人間以外の何者でもない姿だ。

やがて少女は、紅いワンピースを纏って、裸足のままで肉の上に立ち、触手に握られ肉塊に叩き込まれるジャンの姿を見上げていた。

『あげる……がっこうはかよう。おうちは、ここ……』
鈍い声音は続けた。

『おともだち、なつてほしい……』

——何が目的なのか。

そもそもコレは一体なんなのか。

その全てが、意識的に彼の頭の中から排除された。

生存だけを考える思考が彼を突き動かし、口を動かす。言葉を紡ぐ。

「お友達に、なりましょう……！」

精一杯に吐き出されたその言葉を最後に、ジャンの意識はぷつりと途切れた。

「ジャン！ ジャーン！」

名前を呼ぶ声と共に、身体が大きく揺すられる。共に、深く沈んでいた意識は呼び起こされて、浮上。

ジャン・スティールの意識はそこで覚醒した。

「……はっ！」

反射的に眼は開き、そして同時に心臓が激しく鼓動する。

彼の視界には心配気な視線を送り、今にも泣き出してしまいそうな人型のタマがあった。

タマはジャンが目覚めると安心したように大きく息を吐き、それから見る間に縮んで、猫に戻る。

「もう、死んじやったかと思った」

「こ、ここは……」

震える声で告げるタマの頭をやさしい手つきで撫でてやりながら、彼は身体を起こす。周囲を伺うように首を回せば、そこは校舎の裏、焼却炉の近くだった。

振り返れば、大地に埋まる蓋は閉まったまま。

彼はそこでようやく胸をなで下ろして、深く息を吐いた。

「良かった、おれを襲う触手はいないんだ……」

そう漏らすと、背後から凄まじい衝突音が鳴り響いた。まるで壁に勢い良く馬か何かが突っ込んだような音に、衝撃。彼は慌てて立ち上がって振り返ると――くると、蓋は宙を舞っていた。

やがてそれは角の部分を深く大地に突き刺すと、殆ど同時に、それは着地した。下には何も身につけていない少女は肩までワンピースを翻してから、ゆつくりとしたようすで落ちていくその衣服がやがて地面に触れてから、緩慢な動作で立ち上がる。

くすんだ黒い瞳がジャンを見上げた。少女は裸足で仁王立ちする。「呼んだ？」

そうして声は、いかにも少女らしく澄んだ声音となって言葉を紡ぐ。

「呼んでません」

「そう。残念。ちなみに、本体から離れられるのは、二時間までだから。過ぎると腐っちゃう。臭くなる」

「頑張ってください」

「ありがと」

慣れない言語を一生懸命使うように、拙くも、彼女は先程よりも遙かマシな声でそう教えてくれる。

もしかすると、この学校の七不思議となる一つを、そして最大級のその不可思議を解けるかもしれない。さらに恐怖さえ忘れてしまえば彼女だって、普通に接することができる。

食われることは……ないだろう。そうだ、あの地下で生きて行けるのだから、食事やら何やらは不要なはずだ。

ならば大丈夫。

おれは大丈夫。

彼は頷き、自分を納得させる。

「ま、そういう、事だから。よろ」

……どこでそんな言葉遣いを覚えるのだろうか。

台詞に関してはまだ本体のほうが可愛げがあったかもしれない。手を差し出す彼女に、ジャンは対応してその小さな手を握り返し

た。

「よろしく、ノロ」

「ノロ？」

首を傾げる彼女を指さすと、彼女は自分で自分を指さした。

「ノロ？」

「そう、君の名前だ」

名前の由来が呪いだと言われたら、本格的に殺されるかもしれない。

そう思いながらも、口をついて出てきてしまった以上引き返せない。時間程度を巻き戻せない自分を不甲斐なく思った。

ジャンが言くと、彼女は僅かに、口角を吊り上げた。

「わたしの、名前」

「そうだ。名前がないと不便だからな。それじゃ、ノロ、悪いがこれはこれから授業だ。帰るからな」

「うん、わたしも準備が必要。学校は来週から」

「そいつは良か……残念だな。それじゃあまた今度！」

「うん」

畳み掛けるようにして、ジャンはタマを強引に肩に乗せてから、ノロに手を振り背を向ける。

なんだか奇妙な罪悪感に苛まれながら——ジャンは教室に戻る。

閑散とする、誰もいないその様子から、既に時刻は放課後を過ぎていることを理解するのは、それから数分後の事である。

遠征　～学校行事～

程なくして『図書館には”出る”』という噂が広がり始めた。何が出るのかと言えば、この世の者ならざる存在、いわば幽霊の類だ。

ジャンは校舎裏でない事にいささか疑問を感じたが、出会ったびに語彙が増えるノロを見れば、その理由をなんとなく察した。彼女なりの努力なのだろうと思えば、可愛らしくさえ見える。

しかし結局、来週から学校に通うと断言していたノロは、一週間待てど二週間待てど、入学する様子はない。さりげなくごく自然的にクラスに紛れ込んでいる様子もないからわざわざ、あのどう我慢しても気持ちの悪い『肉の部屋』を訪問して、本体に訊ねてみれば、『めんどつくさく…… なっちゃった……』

まるで最近の若者じみた台詞が返ってきて、ジャン・スティールはなんだか安心したような、どこか残念なような心持ちになる。

そんなこんなで時間が経過して——新たな月を迎えた。

季節は初夏に移り変わり、気がつけば入学してから初めての学校行事が催される頃合いになっていた。

まずはじめに、武器適性という検査が行われた。

といっても、それぞれ個人が武器を扱い教官がそれを判断するわけではなく、戦闘訓練の授業過程で判断した適性ある武器を生徒に手渡すだけである。もっとも、既に武器を所有している者は持参することが許可されているために、ジャンとサニーは、それぞれ自前の剣と弓を装備していた。

ドワーフ族の特製装備。剣は肉体に紋様を刻まなくとも魔術を使用することが許され、弓は——未だ使用されていないために、効果は分らない。だが恐らくは同様のものなのだろう。

そういった中で、生徒の多くは剣や槍を装備する。

三十分にも満たぬ時間で準備の整えた白い制服姿の集団は、されど集団とも言えぬような三十人余りの団体だ。

「はぐれるなよー！」

先頭に立つてそう告げる戦闘教官は、街の門から下級生総員を引き連れて出発する。

——この学校行事は、『遠征』と呼ばれるものだ。

内容を簡単に説明すれば、ここから十数キロほどある森まで行進し、昼休憩を経てまた街へと戻るというもの。

簡潔に言えば遠足だ。^{ピクニック}

しかしそれでも一日の授業がなくなり、また珍しい外の世界を歩けるという新鮮さもあって、各々の興奮は最高潮となる。

だからこそと言うのだろうか、出発時に構成された列は瞬く間に乱れて好き好きに並び、会話を交わし談笑しながら、それでも辛うじて動きが緩慢にはならずに行進する彼らには、教官らも少しかり眼をつむっているのだろう。

そんな連中のしんがりは、女騎士のシイナ。鬼族の娘だ。そう考えれば、今回の行事に対する安全対策と言うものは出来る限り考えられているのだろうと思われる。

ジャンはその最後尾付近でいつものメンバーと共に行進し、背後^{うしろ}のシイナの機嫌を伺いながら、されども緊張など微塵も必要のないこの状況に、思わず表情を弛緩させた。

「ねえジャン、こんなの久しぶりだよな」

肩に矢筒を担いで、また同時に弓を収めた細長い専用のケースを担ぐ。傍らで、ジャンはパンパンに膨れた荷を背負い、腰に剣を提げていた。

「確かに。前はちょいちょい散歩に外歩いてたけど、最近は全くないよな」

「うん。だから嬉しいかな」

「そいつは良かった。今でこそたまにしか無いが、時間があつたらまた、近場でも散歩するか。今日は楽しむって程の事はないが、下

見感覚なら面白みもあるだろ」

「ジャンは冷めてるね。私これでも結構楽しいんだけど」

「そいつは良かった」

にしても、だ。

ジャンは穏やかな日差しの下、そういった大した速度でもない遊覧とも言える緩慢さで歩きながら、またサニーと会話しながら、あるいはクロコやアオイらの会話に耳を傾け微笑みながら、内心は少しばかり焦りが生まれている。

考え出せば、少しでも計算してしまえば分かってしまう破産までの日数。

特にこれといった出費がないし、テポンの所で住まわせてもらっているからなんとか生きながらえているが、それでも資金は心許ない一方だ。下手に本を数冊、あるいは一週間でも昼食全てを外食で済ませれば、財布は空になる。

ならばアルバイトでもしてみようとも思うが、どこで募集しているのか、その応募を周囲に知らしめているのかが分からない。既にこの街に来て三ヶ月にもなるが、手がかりをつかむことすら無い。

そういった事に行動しない、積極性のなさが一概に要因と言えるのだが――流石に、いよいよ行動せねばならないだろう。

帰ったら調べよう。

彼はひとまずそう考えるも、不安は胸の中に渦巻いたままで不快感募る一方だった。

「それにしても――」

「これより九。分の昼休憩をとる！ 分かっていると思うが、森には入るな！ あらゆる意味で危険が多いし、さらにあまり離れすぎるな！ 時間厳守で、守れなかったものは連帯責任として貴様ら全員に罰則を強いる！」

舗装された道は、やや木々が生い茂る周囲から、途端に薄暗く緑を鬱蒼とさせる自然のトンネルの中へと続いていた。

彼らはまだ林にすらなれない草原の中で立ち止まり、整列する間

もなく戦闘教官は声を張り上げて注意した。

言葉はそれで終わりであり、「解散！」の声から、各々は好き好きに散らばり始めた。

「もう着いたのか……」

ジャンは腰に手を当て、されど一切の疲労を覚えない肩や腰を確認しながら息を吐いた。

「もうつて、結構歩いたよ？ 歩きっぱなしだよ？ 疲れたよ……」

「そうだな。なら早速昼食にするか……ん」

どこか適当な場所は無いか、そう周囲を見渡してみれば、既に草原の小丘に立つクロコ、アオイ、トロス三名の姿があり、それぞれは彼らを見て、気づいたのを確認してから手招いた。

重箱は、三段重ねで量、種類ともに随分あったものだが、五人でつづけば見る間に量を減らして、やがて空になった。

満腹になった腹をさすってトロスは草原の上にそのまま横たわり、シートの上ではサニーら三名が水筒からお茶を出して飲み、団欒とする。

「それじゃちよつと、腹ごなしに出てくるよ」

ジャンはそう残すと、地面に寝かせた剣を拾い上げて腰に携え、大きく伸びをした。

辺りは、年甲斐もなく追いかけてこをしたり、またトロスのように寝転がりひなたぼっこに興じていたり、あるいは組手や、剣術のおさらい、紋様を持っている同士で程度のごく軽い魔術のお披露目会など、様々な暇つぶしが行われていた。

時間にして、まだ一時間近く残っているのだ。

何かをするには、この環境では十分な時間だ。

「さて、ちよつと森——」

「頂けない発想だな」

「の周りでも走ってこようかなー」

振り向かずとも分かる異様な威圧。凜とした声に、ジャンは逃げ

出すように走りだした。

が、素早く、足が動くよりも早く背後から腕を掴まれた。

「ちよいまち」

「な、なんですか！」

振り向けばまず視界に入り込むのが赤い姿だ。

胸の形に型を作ったような胸当てに、革製の腰巻には独特な刺繍が施されている。破廉恥な姿だが、さらに背中にはナマクラ以下の鉄の塊と形容できる巨大なソレを背負っていた。それらをひっくりめれば異様な姿と言える。

「あれを見る」

振り向くと同時に、シイナは彼が向いていた方向へと腕を伸ばして指をさす。その先には、道が飲み込まれていく森が広がる、その光景があった。

そして、まるで吸い込まれるように中へと入っていく二名の姿。

それは人間ではなく、毛皮を身につける獅子のような勇ましい姿の男に、鳥のようなトサカにクチバシをつける二人組だ。

「クラス代表に頼もうかと思ったけど、頭でっかちタイプの人間だし。君のクラスの代表は女の子だし、隣のクラスを巻き込むのもどうかなっと思っ」

「……おれは、その隣のクラスの、しかもただの一般生徒ですが……」

「君は実績があるから。えーと、カールくんだった？ もう仲直りしたの？」

「ぎこちないですが、こちらから話しかけたら返してくれる程度には。挑発したのはこつちですし、九分九厘おれが悪いんですけどね」
「まあそれなら別にいいけど。そういうわけだからお願いしたいんだけど」

と、彼女はジャンを掴む腕を離して告げる。軽く腰を曲げるようにしながら両手を顔の前で合わせ、お姉さんからのお願い、といった風体で頼み込んでいた。

さすがに彼女も周囲から自分がどう見られているか分かっているだろうから、この体勢を長く続かせるわけにもいかない。ヘタをすればジャンが、周囲からこの成り行きを妙な噂として流される立場にさえなってしまうのだ。

だから思わず、

「分かりましたから、頭上げてくださいよ」

そう返してしまえば、

「そ。ありがとう」

彼女は豪快にジャンの頭をポンポン、と叩くと、そのまま促すように背中を押した。

木々から生い茂る葉は幾重にも重なりあつて、自然のカーテンになる。その隙間を掻い潜る木漏れ日は薄暗い陰の中に鮮やかなコントラストとなつて、風によつて踊る葉と共にその明かりも揺れた。

思ったよりも明るい森の中は、教官らが脅していたほど危険は少ないように見えた。

ガサガサ、という草木を掻き分ける音と共に、木々の脇から道路へと飛び出してきた陰があつた。小さく、足元を横切るのは薄茶色い野うさぎだ。森だから居てもおかしくはない小動物を見て、さっそくあの二人を見つけたかと期待したジャンは少し肩を落とした。それからそう間もなく、同じような物音と共に、今度は狐がその後を追うように飛び出し、反対側の草木へと飛び込んでいく。

うつむ、自然の摂理。たぶんあのウサギは捕食されてしまうだろう。これが弱肉強食だ。

そうやってどこか憂いげのある眼差しを、舗装もされていない、無造作に自然生い茂る方向へと向けていると――これも運命か、それとも直感か。そのやや奥側、道よりもさらに暗がりとなる位置に例の二人組を発見した。

おそらく、趣味が狩猟か何かなのだろう。

狩りというものは命を弄ぶというイメージが根底についてしまっ

ているから、ジャン自身あまり良い印象がない。が、それは彼自身がやっていたこともあって、それを咎めることは決して出来なかった。

彼らがここで狩った動物を持ち帰れば、毛皮を剥いで衣類にするも良し、煮て焼いて食うもよしでなんでもござれだ。放置しても他の小動物が血肉に変えてくれるだろう。何も悪いことばかりではないし、殺される小動物に「可哀想だ」だのなんだのと口をだすほど善人でもない。

そもそも、今回は彼らを森から引きずり出すだけだ。シイナが、あの時点で連帯責任を発生させなかっただけ感謝するべきだろう。ジャンは大きいため息を付いてから、大きな一歩で、茂る藪の中へと入り込んでいった。

「おーい！ ふたりともー！ 帰ってこーい！」

手を口に添えるようにして叫ぶと、彼らは大きく肩を弾ませるで、それから一様に振り向いて走りだす。彼らはその場から離れて、さらに奥へと入り込んでしまった。

「何やってんだよあのバカ……」

泣きそうになる。

頭を抱えなくなる気持ちを抑えて、ジャンは足場も環境もなくそつたれな位悪い森の中を走りだす。藪をかき分け、名前も知らない葉に肌を切られないよう気をつけながら草木をより分け、踏み倒し、たどり着くのは彼らが先ほど居た場所だった。

大きな樹木。その幹の根元には――。

「……ッ?!」

まだ血なまぐさが残っている。

内蔵を引き摺り出され、いたずらに首を切断された狐の死骸は幹に磔^{はりつけ}られていた。

血糊がべったりとついた安物の果物ナイフが近くに落ちていて、雑貨屋で打っていきそうな数種類の釘の詰め合わせケースが置いてあるのを見る。

ジャンは思わず漏れてしまったため息をそのままにして、屈み、幹に叩きこまれた釘を引きぬく。まだ子狐だったのだろうその四肢、愛おしい肉球はズタズタに切り裂かれて見るも無残だ。

皮膚が裂け、手が血だらけになるのも構わず、彼はやがて素手で穴を掘り、そこに子狐の死骸を置いて、埋める。簡単な墓だが、この樹木が墓標となってくれるだろう。

ポケットから取り出したハンカチで手を拭ってから、彼は改めて嘆息した。

さて、バカは何処に行つたのやら。

「狩猟なら、まだ自分のためにもなるんだけどなあ……」

野生動物はなかなか手強い。

まず、確実に殺気を察知して、音や気配に敏感で、あの特有の身体能力がクセモノだ。

だからそれを狩るためには、単に殺すための技術を高めるだけでは獲物を捉えられない。気配を殺すこと、あるいは罠を作ること、ナイフの振るい方や、まず根本的な歩き方など。その様々な技術があつて、初めて獲物を捕らえることが出来る。

狩猟が趣味ならばまだ許そう。

しかしこの悪趣味過ぎる事が目的だったならば……。

ジャンは剣を引き抜く。金属が鞘の金具に擦れる、小気味良い音を鳴らして白刃を晒すと、彼はそのまま柄を両手で握りしめたまま、大地に突き刺した。

——刀身に紋様が浮かび上がる。それは明るく、太陽のように眩く光を放ち始める中で、ジャンは命じた。

「投獄しろ……大地の怒りっ！！」
アース・ビック

ブロードソードに鈍い衝撃が疾り、両腕に伝わる。彼の強い意思を読み取った魔術は大地に立つ、彼が対象とした二つの足音を聞き取り読み取り位置を把握した後——彼らが何かが起こったとしか認識し得ぬ刹那的な速さで大地が錐状に変異して突出し、彼らを囲い込んだ。

うつたえるような悲鳴、喚き声、悪態がやや近くから聞こえる。轟音と共に巻き上がった土煙が、同時にジャン・スティールに彼らの居場所を教えてくれた。

ジャンは剣を引き抜くと、数十メートル離れた森の中に、不意に出来上がった出来損ないの牢獄へと切っ先を差し向ける。

再び紋様が輝いた。

魔石から創られたこの武器は、あらゆる魔術を可能とする。

もっとも使用者の技量や知識に干渉して発動するため、ただ媒介となるだけの剣が全てを可能とするわけではない。が、大地や風、そういったある程度の”属性”は、触れるだけで発現出来た。

「疾^{はし}れ、剣風」

剣を引き、右腕で身を抱くように構える。左腕は顔の位置まで引き上げ――交差する諸手を勢い良く広げれば、その刹那に刀身からの鈍い衝撃が大気を伝播し、一つの真空波^{かまいたち}となつて大地の牢獄へと迫る。

やがて音もなく通過する真空波は、それから瞬く間に形を崩して疾風となる。

天をつく勢いでそびえた錐状のそれは、やがてズズズ、と半ばかりズレ始め、鈍い衝撃音を響かせながら、その半ばかり切り裂かれたように崩れていった。

――ジャンがそこを覗き込めば、縮み上がって頭を抱える二人の姿があつた。

剣を収め、中へと飛び込む。

男達の怯えるような悲鳴に、少しだけ胸が痛んだ気がした。

「一つだけ訊いていいかな」

極力穏やかな口調でジャンが言った。

彼らは、その威圧的な風貌が嘘のように、こつくりこつくりと、壊れかけのブリキ人形のように頷く。

「さっきのは解体がメインだったのかな？」

二人が揃って頷く。

「狩猟がメイン？」

全く同時に頷かれた。

「言葉通じてんの？」

こくりこくりと返事をする。

依然として言葉はない。

これで彼らは、どちらにせよ反省したのだろうが——これではただ単に、暴力で黙らせたただけだ。

根本的に、ああいった死を侮辱する行為はいけないと教育できていない。

あれでは、子供が好奇心のままにアリを潰したり、カエルを風船のようにふくらませて破裂させたり、そういったものと全く同意義ではないか。

良し悪しすら区別できていないのなら問題だが、果たして……。

絶えず零れるため息を最後に、ジャンは近くの、脇ほどまでの高さの錐を手で押した。すると、たったそれだけでも牢獄を作る要因となっていたソレはボロボロと、まるで水気のない砂でなんとか形を維持させたように崩れていった。

そう、脆いのだ。

土に固められた大地を、岩石のように硬く構成しなおしてアース・ピックを発動させることは、今のジャンの技量では到底ムリ、不可能だ。

だからこれが有用なのは、石畳の上など元々堅い場所。岩なども可能かもしれないが、下手をすれば変形することすらなさそうだと思うてしまう。

だからこそ、あの剣風だって当たれば痛い程度。濡れた布で叩かれた程のダメージしかない。

「殺すことを怒ったわけじゃないんだ。馬鹿にするわけじゃないけど、野生動物は捕まえるのも難しいし、素直にすごいと思う。だけど、死骸を遊びに使うのは良くないと思うんだよ。極端な話になるけど、お前らだって自分の死後に解体されてハリツケにされたら嫌

「だろ？」

なるべく論すように言ってみる。

その頃になると、彼らは錐状に変化したそれらを見てハツタリに気づき、それからやがて冷静になったのだらう。

変わらず口を利いてくれないが、その頷きには確かな理解の意が汲み取れた。

——面倒に口答えされなくて良かった。

以前の出来事、いざこざから少しだけ学んだジャンはそう安堵して、彼らに背を向けた。

「なら戻ろう。いい加減、教官に気付かれるかもしれないから」

また草木を踏み分けて歩き出せば、ソレに倣って動き出す気配を感じる事が出来た。

それから程なくして、こつそりと森を抜ければ――。

「……ようやく戻ったか」

威圧的な、どこか怒りさえ孕むような声が響く。

戦闘教官が、腰に手をやり待っている姿がそこにはあった。

「一足先に帰ることにしよう」

まず教官がそう提案した。

既に背負っていた鞘から抜いた両手剣を軽々と片手で持ち上げ、肩に担ぐ。その姿は、鬼族のシイナよりも鬼らしかった。

教官の言葉に三人は背筋を伸ばして居直る。それからまず教官の出方を伺っていると――大剣は、ジャンの額の薄皮をにわかに切り裂いて振り下ろされた。前髪がパラパラと舞い散る中で、鼓膜を突き破る怒号が響く。

「何を止まっている！ さっさと俺を先導しないかッ！」

『は、はいっ！』

声は重なり、行動も全てが同時に、彼らは振り返った。

「走れ！ 全速力だ！」

『はいっ！』

返事をするが早いか、背中目掛けて大剣が振り下ろされる。彼らは途端に死の恐怖を感じ取ると、死に物狂いで大地を弾き、緊張故にまともに可動しない関節や筋肉をそのままに、来た道を、来た時の穏やかさや楽しさなど嘘のように走りぬいていく。

——なぜおれまで。

ジャンは巻き込まれたからどうのこうのなどと言いつつ訳する事も思いつかず、されど被害者根性だけは胸の奥底で燦らせて走り続けた。

そう時間も置かずに、彼らの影は小さくなる。

シイナは申し訳なく思いながら、されどなんだか愉快なまでの理不尽に飲まれたジャンが可笑しくて、口元を抑えて笑いをこらえながら、その姿を見送った。

「帰るまでが遠征だからね！ 気を抜かないでよ！」

集団の先頭を務めるのは、来る時とは違ってシイナだった。

女性だからか、あるいは新鮮だからか、下級生一同の呼び掛けに対する返事はより元気で、列も乱れない。

歩き出せば少しばかりズレが生じるが、イイところを見せたいという本能に近い部分が働いて、談笑は続くながらも、軍隊の行進とあいなるそれらは、結局街に着くまで続くことになった。

図書館

放課後。

ジャン・ステイルは渡り廊下から図書館へと渡った。

あと一ヶ月も経てば定期試験が始まる。まず授業ごとの筆記試験があつて、戦闘訓練では実際に一人二組になって出来栄を披露する。彼は今のところ、後者に対する自信は持ち合わせていたが、どうにも勉強というものに自信が持てなかった。

理解ができないということではなく、単に不安だ。だからこそこれまでやってきたように、それを努力することで満たして補う。

——という事もあるし、いい加減ノ口の事も気にしてやらなければならぬだろう。

今日はサニーもクロコと近くの服屋へ寄ってから帰ると言っていたし、トロスは他の友人に誘われるがままに帰っていった。何はともあれ、いつものグループ以外にも行動できる者がいるというのは良いことだ。

「……おれ、なんか距離置かれてんなあ……」

異人種間で、『キレたらヤバイヤツ』の異名が伝わるのに、決して長い時間は要さなかった。

気がつけば腫れ物を触るような扱いを受けていた。それは人間も同じであり、辛うじて普通に声を掛けてくれていた連中さえも、最近では目も向けてくれない。異人種も同じだ。

どこで間違つたのやら……ジャンはため息を吐いて、図書館の重い扉を開けて中へと入った。

円形の建物は、その内部も円形に形作られている。

まず内装として最初から存在している本棚は、壁にそってぐるりと中を一周していた。本は余すことなくジャンル分けで詰め込まれていて、ちょうどその上に沿うようにして備え付けられている吹き

抜け状の廊下には、それと同様に本棚が壁に埋め込まれていた。さらにそこに収まり切らない本は、その本棚に重なる棚に並べられていて、取るためにはキャスターのついたハシゴを使用する。

入り口の正面には階段があり、また内周の本棚から直角に、棚は本屋のように鎮座し並んで、狭い通路をつくりだす。

試験が近く、また放課後ということもあって利用する生徒の数は割合に多いようだった。

入ったすぐ右側にはお手洗いの扉があり、その脇に壁に沿うような半円の受付カウンターがある。

自習用の長机は、階段の手前に多く並んでいた。

「あ、ステイルさん……？」

聞きなれた声に振り向くと、そこには幾冊かの本を胸に抱くアオイが居た。既に夕方近いからか、頭のハイビスカスは心なしかしぼんでいるようだった。

唯一まともに接してくれる内の一人に、ジャンは少しだけ胸を撫で下ろすようにして向き直る。

「アオイも勉強？」

「うん、はい。そろそろ試験も近いですし、万全を期したいので。レイミイも居ますよ？」

そう言って彼女はジャンの背後に視線を配る。彼は促されるままに自習机の方へと顔を向けると、既にこちらに気づいていたレイミイが大きく手を上げて主張して見せている姿が見えた。

「行きましようか」

「おれも良いのか……？」

「……みんなの事を気にしてるなら、私達の間には要りませんよ。お友達じゃないですか」

「そう、だな。ありがとう」

「それじゃ、行きましよう？」

手を伸ばしてくる彼女の手を握り返すと、そのまま連れられるままに、ジャンは長机へと向かっていった。

ハイビスカスは、なぜだか綺麗に咲き誇るのを見ながら——ジャンはやがて席についた。

「や。秀才二人に勉強を教わるなんて光荣だな」

「嫌味ね、ジャンくんなんて他人のことなんて興味ないクセに」

「失礼だな。いつもヒトの目気にしてビクビクしてるっていうのに」
「だったらもつと表面に出してくれれば、まだ可愛げもあるつてもよ？」

レイミイは会うなり机に頬杖を付いて、もう片方の手では指先でペンを弄繰り回してそう口にする。が、純粹に悪く言っているというわけではなく、単なるコミュニケーションとしてのソレだ。

だから隣に座るアオイも、それが分かっている微笑んでいる。

幸せな空間だ。

「奇遇。勉強？」

そう考えていると、不意に現れた声。教科書を取り出していた力バンから顔を上げて振り向けば、そこには赤いワンピース姿の少女が立っていた。

思わず驚き身体が弾むが、ジャンはそれをなかったコトにして大きく息を吐いた。

「ああ。試験があるからな」

言葉を返すと、少し遠慮がちにアオイが袖を引いた。

「……ステイルさん、この方は？」

と、そこで気がつく。

そういえば彼女を知るのはジャン以外では、タマくらいしか居ないことに。

「まあ、ノ口。座りなさい」

「御意」

靱やかに伸びる白い腕を上げて、勢い良く振り下ろすと——腕は紅く変色し、そしてにゅりんと伸びた。それからレイミイの隣の席の手前に手をつく、力を込めて跳躍する。ノ口は軽々と高く宙を舞ってから——もう片方の腕を触手にして椅子を引き、着地すると

同時に腰をかけた。

……心臓に悪いという以前に、嫌なものを見たという感じた。今が朝でない事を感謝するばかりである。

そしてまた、慣れたと思っていたジャンでさえこうなのだから二人もさぞかし大変なことになっているだろう。そう思ってアオイ、レイミイに目を向ければ——やはり異人種。反応が違った。

「まあジャンくんの友達に人間なんて居るわけないと思ったけどね」レイミイは得意げに鼻を鳴らし、アオイは何かを口にする事は無いが、困惑した様子もなく平然とノロに微笑んでいた。

「私はアオイと申します。ステイルさんのクラスメイトです。趣味は、お昼寝です」

「わたしはレイミイ。同じくクラスメイトよ。そうね、好きな事は魔術の勉強、かしらね」

と、ジャンが紹介するよりも早く自主的に名乗り、簡単に自己紹介する。さすがが出来ている人間は違う。そう思いながら、ジャンは手でノロを指し示した。

彼女はジャンに身体を向ける。

「彼女はノロだ」

「……です」

「というわけだ」

「……よくわからないけど、よろしくね。ノロちゃん」

「よろしく願いますね」

両者の微笑みは、どちらかと言えば迷子の幼子に向けるようなソレだった。

ジャンはその間にノートと教科書を展開し、カバンを椅子の下に流す。ノロと言えば、二人のちょっとした質問、たとえば趣味や好きな食べ物やらの無難なそれらを、意外にも適当に流していた。

彼女はそうしながら、服の下から数冊の革張りの本を机に置く。

「——それじゃあ、今度一緒に洋菓子屋さんに行かない？」

「それがいい」

「あ、この前見つけた美味しい所があるんですよ。そこで良いですか？」

「それでいい」

なんて、無愛想にも程があるだろう返しにも関わらずしっかりと会話をして、あまつさえあそびに誘ってくれる彼女らはなんて親切なのだろうか。親心に感動しながら、自然的に除け者にされたジャンは適当に教科書をめくった。

「ノロちゃんって、どんな本読むの？ それとも試験の勉強？」

やはり学校の敷地内に居るという事だから、ここの生徒という事を前提に話しているのだろう。服装や外見などは二の次というらしい。ジャンとしてはもう少し言及して欲しいところだったが、わざわざ口出しするのも無粋というものだ。

「いまは、魔術書を。言葉は、元から知っている……から」

「随分と古い本ですねえ……装丁ボロボロですよ、これ。ちょっと良いですか？」

「ご自由に」

アオイはノロがどこからか取ってきた本を手に取り、左腕に背表紙を乗せてパラパラと開く。どれもこれも黄ばんで、紙の端が欠けていたり虫が食っていたり、外見以上に中身は風化していた。インクも薄く、表紙のタイトルさえ読み取れない。否、それ以前に現在の言語ではないようにさえ思えるのは、あながち間違っては居なかった。

中の文章を読み解こうにも、同様に読めない。

仮に古文だとして、これが原本だとして——彼女は一体、どこからどうやってコレを持ちだしたのだろうか。そう思って最後のページを見れば、やはり貸出不可の紙が貼付けられているのが見えた。そこで頭が、無意識に切り替わる。

アオイは微笑んだ。

「む、難しくてよくわかんないです。すごいですね、ノロさんは」
彼女はそれを読まなかったことにして、ノロの前に本を置いた。

ジャンはそれを横目に見ながら、ノートに魔術の原理を簡単に書き写し——中々に賢明な判断だ。そう思った。彼女は長生きをするだろう。

依然として、ジャンへと身体を向け視線を投げながら会話するノ口が気になるが。

「言葉より、文字はムズい」

アオイにとつてあまり触れたくない事をノ口が吐く。

レイミイが「あー、やっぱり詠唱より陣はねえ」と勘違いして話を逸したことに、彼女は心底感謝して胸をなでおろした。

「詠唱か魔法陣、どっちかすれば魔術発動するけど……ぶっちゃけ魔法文字とかワケわかんないもんねえ」

「だから、刻む」

「そうそう。身体に刻んだり、魔石使ったほうが簡単だもんね。昔の人は、詠唱とか魔方阵を未だに使うけど、便利な方がやっぱりいいもんね」

「愚か。手間ゆえに、意味がある。見る……？」

「え……？ うん、まあ。でも危なくない奴をお願いね？」

「了承。詠唱開始。『地の底より出でし魔性の権化、邪悪なる神の御心なるままに吐き出されたる憎悪の残渣——』」

なにやらブツブツと、妙に流暢に話だす姿は初めて見る。ジャンは目も向けずに、ただ声だけを聞いて考えた。趣味が合ったようにいい事だ、と。

つらつらと綴ると、そう時間もかからずに魔術学の試験範囲を大體押さえてまとめることが出来た。ざっと教科書を見返してノートをながめれば、存外に範囲が狭かったことを知る。

よし、案外なんとかなるかもしれない。

ふんふんと満足気に鼻を鳴らすと、またアオイは袖を引いた。

「ん、どうし……どうしたんだ？」

顔を向ければ、彼女の顔面は蒼白になっている。思わず言葉に詰まってから改めて口にする——視界の端に、妙な紫の光が見えた。

視線を向ける。

そこには、両手を胸の前に合わせるようにするノ口の姿。触れていない手との間には、その輝きの原因。紫色の禍々しい光球が、凄まじい魔力を周囲に放出し、さらに圧縮しながら徐々に大きさを増していく。

ノ口の口は小さく動き、詠唱を止めることはない。

やがて空間が歪んでしまうような錯覚に陥った。この図書館全てに満ちる圧倒的な魔力は、一体どこから漏れ出したのか、発されたのか理解しようとする以前に、理解しようとする考えに至らない。

「す、ステイル、さん……。彼女は、いったい……？」

アオイの言葉も耳に入らず、ジャンは思わず机に身を乗り出して腕を振り上げていた。

「こら」

鋭いチョップがノ口の頭部に叩き落される。

直後に集中が、詠唱が途切れて——魔力は空气中に霧散し、輝きは溶けるように消えていった。

「痛い」

「なに発動させようとしたんだ？」

「ブレイク・スタンダード
標準的な消滅」

「効果は」

「触れた物質は対消滅を起こし、質量が^{エネルギー}衝撃となって周囲に放出される。相手は死ぬ」

「お、お前身体こっち向いてたじゃねーか！」

「……凡ミス」

飽くまで無表情のまま、されど声と風体は少女そのものだというのだから、その存在には凄まじい違和感を覚えてしまう。

もう慣れたとはいえ、改めてマジマジと見れば、やはり改めてそう思わされてしまうのが悲しいところだった。

「まあ今日は被害ないから良いけど……今度はアレだ。基本的には魔術禁止だからな」

「御意」

「それとな——」

「む」

小さく声を上げて、ノ口は右腕を引き上げたかと思うと、その手首をマジマジと見てから頷いた。

椅子を引いて立ち上がり、その背に回りこんで机に押し込んでいく。それだけで、やはりここには頻繁に来ているのだと分かる。あの程度のマナーは、周囲を見て学んだのだろう。

「時間がない」

「あ、何か用事？」

と訊くのは、あんな目にあつたのにも関わらず好奇心が失せないレイミイだ。

ジャンは周囲の、いかにも迷惑気な視線に深く頭を下げながら、ノ口に注視する。

「腐る」

頷きながら口にした。

「臭くなる。臭いのはイヤみたい、だから」

それで分かりやすくなったと思っているのだろうノ口は、何故だかここで誇らしいように少しか口角を吊り上げた。何か大きな仕事を成し遂げたような表情だ。思わず頭を撫でてやりたくなる。

「帰る」

別れの挨拶もなしに、ノ口は床を弾いて一直線に、虚空を穿つ矢が如き速度で、扉から外へと飛び出していった。

「一ヶ月出禁になってしまった……」

あの魔力の暴走は周囲になにか実質的な破壊をしたわけでも、あるいは障害を起こしたという事は無かったが、それでも迷惑になったことには変わりがない。あんなのは、大声を出して騒ぎ立てるようなものと同じなのだ。

司書から勝手にノ口の保護者扱いを受けたジャンは、そんな事で

そういった処分を下された。

夕暮れ、買い物帰りや帰宅の姿が多くなる通りで、ジャンは先程の面々と共に帰路についていた。

「それじゃ、もし良かったら今度はウチで勉強しない？」

レイミイは胸に手を当てて提案する。

「あ、いいですね、それ。サニーちゃんと、クロちゃんも誘って」

「ね。試験一週間前くらいで良い？」

「はい！　なんだか、今からでもちよつと楽しみになってきました」

「あは、本末転倒にならないようにしなきゃね。ジャンくんもよ？」

「……なぜに？」

自分で自分を指さして、首を傾げる。

まさかここで名前を呼ばれたり、誘われたりするとは思わなかった。

「勉強なんて一人で出来るぞ」

今日がそうだった。

なんだかんだで、彼女らが談笑している間に終ってしまったのだ。他の教科に手をつけようとしたところで追い出されてしまったのだが。

「あ、そっち？　いやだって、出禁になったって話題から、家で勉強って言うんだから分かるでしょ？」

「さすがに盲点だったなー。あー、でもなー」

「なんで？　みんなで勉強すると捗るわよ？」

「大勢の中で除け者にされるのはイヤだから」

「なーにスネてんのよ」

肘で脇をつつく。ジャンは身をよじって彼女から離れると、すぐ隣のアオイの肩にぶつかった。

「おっと、ごめん」

「大丈夫ですよ。でも、本当に来ないんですか？」

心配するような声色。

ジャンは思わずたじろいで、首を振った。

「行かないとは言つてない」

「……捻くれてるわ。根性ひん曲がつてるわ」
やれやれと、レイミイは肩をすくめて首を振る。

「ヒネてない」

「まったく……あ、私達ここまっすぐだから」
大通りから、やがて噴水広場へと到達する。

「また明日、です」

「ああ、じゃあな。ふたりとも」
「まったねー」

大きく手を振るレイミイに、慎み深く手を上げ別れを告げるアオイ。ジャンはそれに応対して——家路につく。

大きく息を吐きながら今日の事を思い出すと、随分と自分が恵まれていることを再認識できた。

仲良くしてくれる連中がいる。

幸せなことだ。

できれば、こういった時間が少しでも長く続けば良い。

真っ赤に燃える空を見上げながら、ジャンは切にそう願った。

はぐれの襲撃

「喰うこともせず、ただ殺し、イタズラに散らかして埋める。これには何の意味があるのだ？」

人工的な盛り上がりを見せる樹木の下、死骸が埋まるそこを見つめながら呟くのは女性だった。

透き通るような声音で、熱はなく、限りなく無感情で漏らすように呟いた。

鋭い爪を持ち、仙骨から伸びる球を連結させたような尾は、サソリのソレだった。

「死ねばいいのに」

その言葉だけは、声にならない声で呟かれたが、その中で唯一確かな熱を孕む言葉だった。

「ヒトの子よ。その愚かな行い、死を以って……」

身体の内側から、酷く硬質な細胞が浮かび上がる。身体が闇に飲まれるように黒く染まり上がって、ついなる腕が、気がつけば大きなハサミへと変化していた。

興奮を表すように尾はいきり立ち、その万年筆の先のように尖る先端からは、黄色い液が滴って——じゅう、と音を鳴らして、地面に積もる葉が溶けた。

「死を以って、償わせてもらおう」

彼女は振り返り、歩き出す。

既に死骸は腐り、その惨事が幾日も前であることを教えていたが——構わない。彼女がそう決意する理由は、これだけではないからだ。

今回がきつかけに過ぎない。

喰うなら許そう。野生動物が血肉に変えるならばまだ許せる。

だが——。

彼女は冷たい目で森の中を見渡してから、静かにそこを後にした。

その日は学校が休みだった。

だからこそ、街が少し慌ただしいことに気づくことができていた。
「ふふっ、なにを見ているんですか……？」

街の外から巨大な鳥——それはアエロだった。彼女が空を舞い、外壁の向こう側から城へと向かうのが見えた。ベランダから身を乗り出して往来を眺めれば、通常よりも数人は多いだろう警ら兵が待機しているのが見える。その中に、大きな戦斧を担ぐ、ねじれたツノを頭の両脇に備えるミノタウロスの女騎士が混じっているのを、彼は見逃さない。

「いや、街が……」

「なーにをしてんのよ、っと」

背中に飛びつくようにするのはテポンだった。

彼女はいつしか、いつかの深夜に見たスタイリッシュを取り戻して、ジャンに飛びかかる。元気なのは良いことだが、彼にとっていい迷惑なのには変わりがない。

首の後ろからゆつと顔が生えてきて、テポンはジャンと一緒に街を見る。それから「なーるほど」と頷くが、その軽快な発言から、事態をすっかり認識しているかは甚だ疑問だ。

「定期的な軍事訓練かしらね。ほら、今の御時世なにがあるかわからないし」

——広大な海の向こう側では紛争が繰り広げられる地域があり、この大陸、国の隣国では今にも内戦が始まりそうな雰囲気だ。

そしてその国と、海の向こう側の紛争地域の国とはにらみ合いが続いており、紛争さえ治まれば火の粉はこちらに降り掛かってくる、というような恐ろしい状況に囲まれている。

世界は平和だ、という言葉を、最近聞いたことがない。

そりゃそうだ。平和じゃないんだから。

だから、魔法を持つ騎士が求められる。魔術がより簡易に発動できるようになって、争いは被害を大きくする一方である。科学技術

より、はるかに有用性の高い魔法、魔術が割合的に多い戦は、それ故にそれまでとは大きく異なる被害をもたらすのだ。

そして科学は衰退していく。

世界は、異人種を迎えてから大きく変わろうとしていた。

「だと良いんだけど……」

「戦争とか、無いよね？」

いつのまにか、下から潜り込んでジャンの脇から外を見るサニーがそう呟いた。

ジャンの部屋に集まった各々、トロスやクロコ、レイミイ、アオイも同様にベランダに集まる。

無数の建造物を隔てた向こう側に辛うじて見える、路地とも言える往来。

そこは街の人間の目が、あまりつかない場所だ。そんな所に警ら兵が居ることも不思議だが、さらに騎士が居るといふ事が疑問を増やしていた。

「だとしても、僕たちは見習い以下で一年だ。戦争が起ころうとも参加することはできない……と思う」

「だと、良いんだけどな」

そう返すと、不意に背中を力一杯叩かれた。肺の中の空気が全て吐き出されて、その勢いで思わずベランダから落ちそうになる。彼は両腕でベランダの柵を掴んで身体を支えてから、怪訝な表情で振り返った。

「な、何すんだよ！」

「ジャンくんはみんなを不安にしたいわけ？ ふつつ、男の子ならたくましくて頼り甲斐のあること言うでしょ？」

叱責するのはレイミイで、どうやら背中を叩いたのはその尾っぱらしい。常ならば渦巻いている尾が今は足元まで伸びているのを見れば、そう理解するのに時間要らなかった。

「まあどうせ何も起こらないんだから、少しくらいそういう雰囲気を楽しんだっていいだろ？」

「ダーメーよ。怖いのは嫌いだもの」

テポンは背中中の、縮小する羽根をパタパタとはためかせながら注意する。

「浅はかな貴様にはわからないと思うが、他人を気遣うというものは重要なんだ」

クロコが続けるように言う。

ジャンはバツが悪そうに肩をすくめて、「わかったよ」とベランダから離れて部屋へと戻っていった。

『——皆様に、お知らせがあります！』

声は幾度かそう繰り返してから、続けた。

『この街に、“はぐれ”が近づいています！ 危険ですので、再び放送”があるまでは決して外に出ないでください！ この街に――』

広場から響く声は、拡声器を介して街中に響いていた。

柱の根元にある専用の装置に声を吹き込めば、音声を増幅して拡声してくれるその機械は、そうそう使われない。使う必要な時が無いのだ。

だから、その必要がある状況とは――。

「まさか、ね」

テポンが脂汗を額に滲ませる。

勉強会は、その声のせいで一時中断となって、されどそれぞれは何も出来ずに部屋の中で立ち上がっていた。

はぐれが近づいている。

だが、以前の獣人の際であればこういった放送は行われなかったならば、今回に限ってなぜそれがなされるのか。

その敵が、今回初めて街を襲いに来るから。あるいは、既に交戦してはるかに格上であることが判明したから。または、途方も無いほどの集団を率いているから。

以上のどれかであり、以上のそれらでもある。飽くまで、一つだ

けである可能性などはないし、そう希望的観測ばかりしていられるほどの状況などではないのかもしれない。

特に異人種は、そういった緊張や状況を過敏なまでに感じ取っていた。野生の勘、とでも言うのだろうか。

故に何よりも緊迫して動けずにいるのは、ジャンを除く全ての友人らだった。

「姉さん、これは……」

「大丈夫よ。騎士が動いてるんですもの」

「そうだよ。おれたちは養成学校の学生だけど、それだから戦えて訳じゃない。国を守る人がいる。おれたちはその人たちを信じるだけでいいんだ」

隣に座っていたサニーの頭を撫でながら、ジャンは無責任にそう告げる。

もしかしたらとんでもない軍団が襲ってくるのかもしれない。”はぐれ”というのは嘘で、隣国からの進軍かもしれない。あるいは、伝説とも謳われる凄まじい実力の持ち主が敵対しているのかもしれない。

考えればキリがないそれらを、まずは払拭しなければならない。ジャンはまずそう思っ、飽くまで落ち着いた様子で涼しそうに口にする。

「どちらにしろ、おれたちには何も出来ない」

一番不安そうに眉をしかめていたアオイに目を配りながら、できるだけ優しい口調にする。

クロコは、応じるようにそれに続いた。

「正確には、足をひっぱることしかできない、だがな」

「ははっ、耳が痛いな」

「……確かに、そうかもしれないけれど」

「不安なのはおれたちだけじゃない。この街に住むみんながそうだ。だから……でしょう?」

言い聞かせるような言葉に、テポンはまるで仕方なく納得したよ

うに肩をすくめて、椅子へと腰をかけた。

「まだひよっこ以前の、卵だものね。今はただ燻っていきましょうか」

首まで丸い首襟が伸びる綿の衣服一枚を纏う女性は、薄い紫がかった髪をそよかせになびかせながら、深い溜息をついていた。

側頭部で対になる、ねじれるツノが特徴的な女性はミノタウロスと呼ばれる牛族である。その持ち前の怪力とタフさが強みであり、どれほどの小柄でも彼女が背に担ぐような身の丈ほどの戦斧は容易に扱える。

「あなたは、いったい誰なのでしょう？」

見知らぬ来訪者は殺気立っていた。

不寐に、この一ヶ月の間に森に来た者を全て差し出せと告げてから、彼女の鋭い眼光はミノタウロスの女性に張り付いて離れない。エクレルはそう訊いてみると――背後に控える五人の警ら兵が一樣に剣を構えた。

両手にハサミを持ち、パールのような尾を持つ女性。衣服は質素に、胸を隠す布を巻き付け、無造作に腰に布を巻くだけの格好だが、それ故だろうか。

むき出しの野性味が、十分すぎるほどに肌に感じられた。

”はぐれ”はだからこそ強い。

この世界に来てから徐々に忘れつつある野生というものを持っている。そして本来の鍛え方で維持しているその戦闘能力は、下手に型通りに鍛錬した騎士や警ら兵を、容易に超越する場合がある。

だからはぐれは厄介だ。

この世界に馴染めないのに、この世界に居座っている。

エクレルは答えない彼女に、深い溜息を漏らした。

「アナタの要望には答えられません」

そう答えれば彼女はどう動くだろうか。

それは、想像するまでもなかった。

「自然を穢すヒトを出せ。さもなくば……」

ハサミを、まるで拳を構えるように持ち上げる。尾はいきり立ち、頭部を超えて前面にもたれかかってきた。

——サソリの怖いところは、その尾から注入される猛毒にある。それは変幻自在に変異する打撃技、あるいは鞭のようにしなやかに力強く、素早く捕食対象に迫り、そのハサミで捕らえて突き刺すのだ。

一度ハサミに捕まれば逃げるなどほぼ不可能。その上、ダメ押しとばかりに毒に侵されれば……。

「同種であろうとも、わたしは戦闘をも辞さない」

「なら……」

彼女に応じるように、エクレルは背負う戦斧を背中から引きぬいて肩に担ぐ。同時に、それは背後の警ら兵たちへの抑止にもなるような姿だった。

「私がアナタの目論見をはずしましょう。みなさんは、どうか手を出さないでください」

得も言われぬような威圧が、それまでの温和な様子からは想像もできない程に放たれていた。剣を構えた彼らはそれぞれ顔を見合わせてから、声も出さずに剣を収め、身を引く。それはこの状況ではどちらにせよ、足を引っ張ることしかできないだろうと考えたが故でもあった。

だが、果たして彼女を傷つけぬままで退かせることが出来るだろうか。

彼女はにわかに不安になる。

はぐれだから強いが、はぐれだから悪だという方程式は存在しない。そういった存在が村や街を襲う理由は、彼女が口にしたように人間による自然破壊を許せなかったりした場合が多いからだ。こればかりは生きていくことに必要なものだから防げないし、どうすることもできない。

だからどうにかして、一旦退避してもらいたいのだ。

どうにかして話し合いの場を設けられさえすれば……彼女の考えは、ごく平和的なものだった。

たとえソレが、途方も無い夢物語だとしても。

「どうしたのです？　わざわざここまで来たのに、待つつもりですか？」

斧、と言つても典型的なバトルアックスではない。柄の両脇に半月の刃を備える武器ではなく——それは片刃の剣のように、あるいはカマの刃を折り曲げて柄に沿わせたような外観を持っていた。

樹木の幹をそのまま使用したかのような柄には、まず先端に大きな箱状の金具が叩き込まれる。そうして装着される刃は柄の半分よりやや短い程度の長さを持つ。峰打ちたる部分は台形状に広がり、^{ハンマー}槌のように扱える。

それを構えるだけで威圧感が尋常ではないというのに、大きく振り上げれば、どれほど使用者の身が無防備に晒されようとも、踏み込めば己の上半身が吹き飛んで居るような錯覚を覚えてしまう。

だが——サソリの娘は大地を弾いた。

瞬く間に肉薄する彼女に対して、構わずエクレルは戦斧を振り下ろす。

虚空を切り裂いて、間もなく大地を砕く。

衝撃は腕に伝わり、やがて四肢に伝播して全身を震わせた。大地に亀裂が入り、すぐさまその巨体ゆえに前方の視界が遮られた。

斧の影から、土煙を切り裂いて不意気味にハサミが切迫する。

エクレルは予想通りの行動に思わず頬を緩めながら、

「はっ！」

まるで重さなど感じさせぬ動きで斧を、横薙ぎに振るう。共に槌の部分で横腹を穿たれたサソリ娘は、身体をくの字にへし折り、確かな手応えをエクレルに与えながら吹き飛ばされていく。

だが、彼女もただでは食らわない。

その最中に翻る尾は鋭く木製の柄に突き刺さったかと思うと——焼き尽くされるように煙を上げ、腐食するように黒く変色し、柔く、

脆くその部分が重さに耐え切れずに砕けて、斧の部分は振り抜いた柄に置き去りにされていた。

彼女と共に減速しながら大地を抉り、その影に巻き込んだ女性を潰しきる事もなくやがて止まる。

弾くと、されど持ち上がることも無く反転して、鈍く大地を叩いて倒れた。

サソリの女性は、その表情に怒りを携えたまま、されど侮ること無く、確かにエクレルの实力を読み取っていた。

「アナタはなぜ我々を襲うのです？」

武器は失せた——わけではない。

今度は柄を棍棒のように構えて、対峙する。

「ヒトはあまりにも穢し過ぎた。そう思うのは、なにもわたしだけではないだろう」

紅く染まる瞳でエクレルを睨み続けたまま、一拍、息を吸い込む間だけを置いて、彼女は続けた。

「このままならばいずれ、立ち上がる者も居る。国を利用する者さえもな。わたしも、そうすることはやぶさかではない」

「共存を諦めたならば、溝の門扉^{ゲート}から帰れば良いでしょう？ アナタはわざわざ気に食わない世界で生活をして、気に食わないからと自分の思うように変えようとするのが正しいと思っているのですか？」

彼女はたまらず反論した。

穢していると感じるのなら帰れば良い。

もとより、この世界はヒトの地だ。彼らの世界を、彼らがどうしよう^とと構わない。それが例え、滅亡や破滅に傾く事になったとしても、口添えすることが出来たとしても強制的に、その決定に干渉する事は異人種には許されない。

あくまで訪問者である限り、共存を目的としている限り、その存在が完全に許されない限り、そうする事はできない——というのが、彼女らの暗黙の了解でもあった。

「その考え方、身を滅ぼしますよ」

低く、底冷えするような声が大気を震わせる。

サソリの女性はそれを受けて、短く舌打ちをした。

「黙れ。懐柔された貴様らに何が分かる。ヒトの政治などに翻弄され、ヒトの争いに巻き込まれ、ヒトに侮蔑されながら後ろ指さされて生きながらえ、寿命や、異質な力のせいで畏怖され——なぜそれでも貴様らはこの世界に固執する。滅んだほうがいい。我々が、新たに作りなおせば良い。違うか？」

「慢心、環境の違いですね」

話にならない、とエクレルが肩をすくめて嘆息する。

それと同時に、敵は再び駆け出した。

エクレルも応じて大地を駆け、棍棒と化したそれを肩の高さまで引き上げて、弦を引いた矢のように後ろへと大きく引き、解放。投擲された棍棒は、その刹那に尾から吹き出した黄色い液体に触れ、飲み込まれて——醜悪な腐臭を発生させながら、変色し、溶けていく。

にわかに動きが緩慢になるエクレルへと、踏み込んだサソリの女性鋭くハサミを振り上げる。

その刹那。

彼女が、エクレルが動いたと認識するよりも早く、その手は力強くハサミの元となる腕を掴んでいた。構えるハサミも同様にして、怪力ゆえに反抗できず、動けない。

ピクリと、頭の後ろで弾む尾を見るや否や、エクレルはそのまま足の側面で彼女の足を纏めて払うと、瞬く間に姿勢は崩れて地面に沈む。

うつぶせにして、両手を後ろで組ませて馬乗りになる。慣れた様子で組み伏せたエクレルは、大きく息を吐いて、額から流れる汗を拭いた。

「アナタも、ヒトに迫害された口ですね？」

乱れた赤髪をそのままに、サソリの娘はそっぽを向いて黙り込ん

だままだった。

「アナタなら、迎えてくれるヒトが居れば、わかってくれるでしょう。今の私の……私たちの気持ちだ」

「ヒトと、共存しろと？ このわたしにッ！？」

「応じなければ首を折ります」

そつと首筋に手を添わせると、びっくりと肩が大きく弾んだ。

どれほど強気な態度をとっていても、やはり怖いものは怖い。彼女はそれがわかって、どこか安堵したように微笑んだ。

「ふ、ふざけるな！ わたしは——」

「口答えするなら腕を折ります」

「ひっ……わ、わたしは……ッ！」

「腰折りまーす」

「わ、わ——わかった……言うとおりに、すれば良いんだろう……？」

怯えた声で、すっかり全身を萎縮してしまった彼女はぐったりと倒れこんで、そう告げる。

彼女の尾も今やいきり立つこと無く、身体に乗っかるままに乗っているだけだった。

「はい。十分ですよ。あ、もちろん強制するつもりはないので、ひとまず一ヶ月ほど一緒に生活するだけでいいです。それでも本当にダメなら、しょうがないって事で」

「……一応訊いてみたいんだが、しょうがなかったらどうなるわけだ？」

「一応反乱未遂ってことで、軽く二、三。年くらいは牢屋暮らしですわね」

「さ、さんじゅう……。わたしは何よりも、貴様が相手だったことがこの人生の中で、一等の不幸だと思う」

今にも泣き出しそうな顔になって、泣き言のように彼女は言う。先ほどの啖呵や何かを叫んでいた彼女の姿は一切無く、今の格好は何かの冗談のようだった。

エクレルは穏やかな笑みを保ったまま、思いついたように口にする。

「そついえば、お名前ってなんですか？」

「名前……わたしは——」

日が暮れ始める時刻。西の空は既に赤らみ、空からは太陽が姿を消していた。

全身から吹き出る汗に不快感を覚えながら——エクレルは、思いも寄らない拾い物をした。

そう思いながら、まず最初に報告をしようと、ポケットから小さな白い魔石を取り出して——大事になりそうだった任務は、あっけなく終了を告げた。

はぐれの入学

「——わ、わたしの名前は」

緊張した面持ちで、長く長い髪の先を指先でくると弄る女性は教壇に立っていた。傍らでは、作業服のようなそれを着るこのクラス担当の教員が腕を組んで教室全体を眺めている。

伏し目がちの赤い瞳は教卓をじっと見つめながら、控えめに自己紹介を続けた。

「リ……イヤ、ちがう。クリイムだ。よろしく、頼む」

淑女らしく、慎み深く告げた後、彼女はそのまま口ごもる。

教室内が奇妙な緊張感に包まれるのをジャン・スティールは感じながら、休みに入る前までは隣に居た獣人の男が窓際の方に行ってしまったことに疑問を抱いていた。そして、彼の隣には不自然に空席になった机が置いてある。

教室の真ん中の列、その最後尾に至るそこは目立つことはなかったが、それでもそこに誰が座るかが容易に想像がついてしまったために、多くの視線が集まりつつあった。

「えー、クリイムは騎士さんのエクレルの親戚らしくてな。試験も見事にスルーして転入することになった」

担任が渋い声で補足する。

思わぬ騎士の名前にあたりは騒然として、静寂は果たして破られる。ざわざわと騒ぎ始めるその中で、手を上げて彼女に質問をする者が現れるまでそう時間は必要なかった。

「質問でーす！ 趣味はなんですかー？」

そう訊いたのは、人間の男だった。特に目立つ特徴は、腰辺りから生えるサソリの尾だけであるためにあまり気にはしないのだろう。それにこういった控えめな女性というのはあまり居ないから、彼らにとっては新鮮で嬉しいのかもしれない。

異人種がどうか関係なくそう接してくれると、なぜだかジャン

も嬉しくなってきた。

彼は微笑みながらクリイムを眺める。

しどろもどろになりながら、「特にない」と答える彼女と眼があつて——心臓が不意に高なつた。

「好きな男性のタイプは？」

「え、あ……の、つ、強い人かな」

——彼女の言葉に、クラスが静まり返る。ぱつと、まるで示し合わせていたように多くの視線が、途端にジャンへと集中した。振り返り、一斉に彼を注視する姿は異様で、ジャンは思わずすみあがつた。

「な、なんだよ……」

「お前、戦闘訓練の成績良いよな……」

空席とは反対側の男が、ぼそりと漏らすような、それはジャンに言つたと言つよりは、思わず零れたような台詞だつた。

「アイツ倒さなきゃか……」「険しい道だな」「いばらだ」「俺やめとくわ」

どこからともなく、そんなネガティブシンキングな言葉がぼそぼそと聞こえてくる。

不平不満のように聞こえて、ジャンはいたたまれなくなるが——戦闘訓練の授業で、それほど良い成績を収めた記憶などは無かつた。ただそつなくこなしている自覚はあつたが、組手の際は相手を圧倒すること無く合わせていたし、徒競走も真ん中辺りの順位を守り抜いていた。

だから目立つわけなど無かつたのだが、彼らはどうやら以前の森の戦闘以来、“強いから手を抜いている”という妙な勘違いをしているようだった。これが良い意味で、羨望というものを得られるのならよかったが、身を引かれるという悪い意味で影響を与えられているのならば、願ひ下げたい評価である。

「あー、他に質問が無いならいいな。クリイム、お前の席は今注目受けたヤツの隣だ。あの空席な」

「わ、わかりました」

（――あのエクレルとか言う女さえ居なければ、今頃また森に戻って自由気ままな快適生活を続けられていたのに）

クリイムは幾度ともないため息を心の中で漏らしながら、着慣れない制服に窮屈感を覚え、また見慣れない大勢の視線を一心に受けながら受け答えをしていた。

緊張のせいで、頭の中が空っぽになる。

もしかするとこれがある種の尋問や拷問で、へたな受け答えをすればすぐさま黜り殺されるのではないか……そう思うとどうしようもなく身体が震えてしまう。エクレルから刻み込まれた恐怖が、未だに忘れられずに居るのだ。

（やつは……恐ろしい）

アイツだけには逆らってはいけない。

まさか、騎士というものがこれほどに強い相手だとは思わなかったが、仮に油断していなくとも勝てたような気はしない。

教壇を降りて、席へと向かう。

既に在籍している生徒からの好奇の視線を一心に受けて胸くそを悪くしながら、いつか心労で倒れてしまうのではないかと自分を心配する。

やがて席に到着すると、人間の子が隣の席で、こちらを見ていることに気がついた。

「よ、よろしく」

先制攻撃。

先に挨拶をしたことによって有利な状況を作り出せる。

クリイムはそう思って、引きつった笑顔を見せてやる。これに更に、こちらは余裕だぞという威圧さえも与えられた。

相手は畏怖して跪くだろう。

彼女は浅はかに、訳のわからぬ自分ルールを展開していた。

「ああ、よろしく。おれはジャン・スティール。わからない事があ

つたらなんでも訊いてくれ」

——その効果は望めなかった。

クリイムは肩を落として嘆息してから、思わず緩んだ心で返答した。

「黙れヒトの子が」

「……はい？」

「っ……忘れてくれ」

ちよつとした問題発言にジャンは少しだけ意表を突かれながらも、まあ緊張してたんだししょうがないか、と受け流す。

ちよつとだけぶつきらばうで、釣り上がった目尻に、大きな瞳は威圧的な雰囲気を孕むが、緊張指定せいなのだろう。そんな、典型的な軍人のような淡泊さを伺わせる無駄のない動きに、制服を着ていても分かる、絞られたスタイルの良さも、彼女の努力の結晶なのだろう。

夏休み前の試験直前という、そんな不自然な転入は、おそらく家庭の問題かもしれないから、あまり深く訊かないようにしよう。

ジャンはそう考えて、間もなく始まる授業へと挑むことにした。

まさかこの歳にして学園なんぞに通うはめになるとは思わなかった。

エクレルからこう名乗れと強制された『クリイム』という偽名も甘ったるく貧弱で気色悪いし、授業も、本当に同じ言語を用いて説明しているかすら判然としない程に、不明瞭。わけがわからない。これを、机上で一体なにをどう学習するつもりなのだろうか。

学ぶだけなら野生で十分だ。今までそれで生きてきたし、これまでもそうだったつもりだった。

この五年近くは少なくともそうだったし、またわざわざ人里に降りるつもりなども、毛頭なかったのだが……。

担任とは違う教員がやってきて、黒板にチョークで奇っ怪な図形を描いて、数式を加える。最初は魔術か何かかと思つて眺めていた

が、どうやらそうではないらしいことを、彼女は理解した。

『えつくす』がどうか、『このさんかくかんすうの』がどうか、うわ言のように口にする、神経質っぽい男は度の強い眼鏡をくいつと上げて、生徒の中から一人を指名した。

「はい君イ！ 視線を逸めしたね、この問いを答えてみなさい！」

この街にはあまりない近代的な洋服、白衣を羽織る男は大げさな動作で腕を振り、指で相手を指し示す。

クリイムはその指先がこちらに向いた気がして驚き、思わず身体が椅子から引き剥がされる勢いで弾んだが——気だるげな様子で後頭部を掻きながら、椅子を引きずる音を立てて立ち上がるのは、傍らの男だった。

「えー、と。十三メートル、ですか？」

「そうそう、よくできているね。この問いはつまるところ……」

ごきげんに男は笑みを作って、また黒板にチヨークを走らせる。

ジャンはほつと息を吐いて脱力するように席に座り込んだ。

「良くわかったなあ、俺さっぱりだったよ」

そう言うのは、彼の隣の、人間の男だ。

「お前は教えてもわからないからな。まあ得手不得手つてのはあるもんさ」

「そんなもんかね。なんにしろ、試験が心配だよ」

「おれもだよ。授業だと分かるんだけど、テストとかだとさっぱりでな」

こそこそとするごく日常的な会話。

自分とは圧倒的なまでに異なる平和的なそれらに、クリイムは思わず嘆息した。

そんな吐息に気がついたのだろう、ジャンはふと視線を向けて、小さく声をかけた。

「クリイムさんは大丈夫？」

「……わけがわからない」

高等教育レベルの授業内容だと、エクレルが説明していたのを思

い出す。

義務教育過程はなんとかスルーしたクリームだが、それ以降の記憶はない。あまりの待遇の酷さに血反吐を吐いて胃を穴だらけにして、死ぬ気で人里から逃げ出してから、まともな生活などはしていなかったような気がする。

捕獲されてから、まさかの翌日に転入だ。

あまりにも突然すぎる展開に目を回すだけだったが——ここに来て、いよいよ他人ごとではないのだと理解する。

ここで一ヶ月を過ごして、ヒトに慣れなければならない。そうするにはあまり目立ちすぎず、気の良い風体を装わなければならない。苦痛だ。

クリームはにわかに頭痛を覚えて、頭をかかえた。

「試験も近いから大変だけど……遠慮無く訊いてくれて構わないよ？」

「そう、だな……」

エクレルは、今学期の成績は反映されないとかなんとか言っていた。

おそらくこの夏休み前の期間は飽くまで”体験”に過ぎないのだろう。これから夏休みに入り、次の学期の一ヶ月が本番だ。

なんにしても、どう考えようとこの憂鬱な気分が晴れることは無かった。

ただ、この漠然とした絶望の中で陽の光のように接してくる、妙に馴れ馴れしい人間の姿はあったが。

途方のない時間が過ぎたと思われた。

十分間の休憩時間を挿し込んで、幾度かの授業を繰り返す。内容はそれぞれ異なったもので、最も困惑した数学を筆頭に、戦術・戦略だの、物理がどのといった授業が終了した。

そうしてまた休憩時間が始まると思うと、

「終わったー」「今日もしんどいねえ」「やっぱ休み明けってキツ

いな」

だのと、緊張が弛緩するように各々は大きく伸びをしたり、友人らと会話を交わし始める。それはいつもと変わらないが、異変とも言うべき状況は——クラス内の、そう多くない生徒たちがおもむろに教室から出ていったことだった。

半数以下しか残らない教室では、それぞれ集まって惣菜パンを食んだり、あるいは机をいくつかくっつけて、その上に四角い箱をそれぞれ用意する姿があった。

ぐう、と腹の虫が鳴るのを聞いて、彼女の脳内で間もなく合点がいく。

昼食休憩なのだと、彼女はエクレルの説明を思い出して頷いた。

「……まいったな」

つい先日は、街を襲撃したお祝いにウサギの皮を剥いで、いつもならば干し肉にして保存食とするところを、丸焼きにしようと血抜きをして放置してきた。

そう、放置してきたのだ。

森の中で。自分の住处とする、樹木が作る自然の穴蔵の、ちょうど入り口付近の枝にひっかけて。

調味料は調達して、面倒な事は先に済ませておくたちだから、火打石と燃えやすい枯れ枝と、焚き火の材料は全て纏めておいた。

捕まった後はそんな事を忘れてしまったし、夕食はエクレルの自宅で、牛の肉を頬張った。さすがにミノタウロスの身で、この上なく美味しそうに牛肉を口いっぱい頬張って、厚い唇に脂を塗りたくって艶やかさを増すあの彼女はどうかと思ったが——エクレル自身も、この昼食のことをすっかり忘れていたに違いない。

なんだかんだで用意周到だったのにも関わらず、この事にだけは触れられなかった。

（やろう、帰ったら怒ってやる）

そう決意すると間もなく、後頭部を鈍器か何かで殴られるイメージが過ぎたが——払拭するように頭を大きく振ってから、彼女は

立ち上がった。

（なんにしろ、ここから離れよう）

こんな所にじっと居ては、まるでお誘いを待っている引つ込み思案の女の子のようだ。あるいは乞食か、なんにせよ、良いイメージには転換できない。

どこに何があるか、見学して回るのも良いだろう。少なくとも一時間は時間があるのだ。学校内を回っても、まだ時間が残る。

そうなれば……その時に考えよう。面倒になって、彼女はやや出遅れた形で教室を辞す。

否、それは退室しようとした、というのが正しいのかもしれない。
「ねえ、クリムさん」

男の声が彼女を引き留めた。

恥ずかしながらも淡く期待していたこともあって、彼女は戸惑うこと無く足を止める。体を捻り、そのまま振り返ると、好青年の微笑が彼女へと迫ってきていた。もはや見慣れたとも言える、ジャンのそれだった。

「もしかして、お昼は学食？」

「ん、いや……それ、なんだがな」

学食という言葉聞いて、そんなシステムの存在を知る。

が、無念。金がない。

ヒトの世界は金が全てだから、彼女はそういう手もあるんだなあと考えてから、思わず短く嘆息してしまう。

「お昼は無い、とか？」

「その通りだ。だが気にするな。おまえに施しを得るつもりなど毛頭ない」

「相変わらず堅苦しい言い方だけど……残念だな。ちょうど弁当が一つ、余ってたんだけど……このままだと無駄になっちゃうしな」

——実際には余っていない。ただいつものようにジャンの弁当は大食漢並の量があるから、半分程度で済むのだ。サニーの許可ももらって今はすっかり、蓋と弁当箱とで中身が分けられている。弁当

箱の方がいささか惣菜が豪華であるのは愛嬌だ。

サニーを始めとする、半身を鱗や鉤爪で構成する蜥蜴人^{リザードマン}や、花弁でスカートを作り、頭に赤い華を咲かせる植物族、下半身を蛇にする少女や、背中からコウモリのような羽根を生やす……ともかく異人種が、机をくつつけてジャンらの行く末を見守っていた。

異人種ばかり。

人間は、この男のみ。

極めつけは、女性が四に対して男性が二人だ。圧倒的な女性率。

ハーレムである。

「悪いな、ヒトの食い物は喉に通らないんだ」

ぎゅるるゝ、と腹の虫が空気を読まずに断末魔を響かせた。

「事情はなんとなく把握した。安心しろ、ウチの料理番は生粋の妖精^{エルフ}族だ」

「米を食べたのは七年ぶりになる」

もしかすると、旨みを味わいながら彼女は冷静に告げる。

「これは旨い。まず味があるという所に注目したい」

これを見れば、あの食生活がどれだけ悲惨なことだったかよくわかる。便秘気味の時に野草を食べたあの思い出を蘇らせれば、涙さえ溢れてくる。

油で上げた白身魚に、表面がきつね色になる鶏肉。にんにくの香りはぬるくなってもまだ口の中に香ばしく広がって、咀嚼しながら唾液が溢れてきた。

「ご飯を掻きこみ、彩り良く並ぶ数多の野菜をフォークで突き刺す。喰う。飲み込む。」

「栄養がよく考えられている弁当だ。おまえは、この弁当を喰えるありがたみをもう一度考えたほうがいい。まともに食事ができる喜びを噛み締めるべきだ」

「あはは、ここまでほめられると、照れちゃうなあ」

サニーが頬を桜色に染めて笑う。

クロコはいつものように、愛らしい少女の頭を撫でながら、器用に食を進めていた。

そんなクリイムに、まずレイミイが疑問を投げる。

「クリイムさんって」

「敬称は要らない」

「……クリイムって、エクレルさんの親戚ってきいたけど、エクレルさんの所に住んでるの？」

「その通りだ」

首肯し、返事をしながらもくもくと、がつつく様子は無いが、手を止めること無く食事は続く。

「あの、今まではどこに居たとか……訊いても大丈夫ですか？」

控えめに、だが突っ込んだ問いをアオイは投げると言うよりは手渡した。

クリイムは同じく頷き、もしかしたらと咀嚼しながら答えてみせる。

素直に答えてもよ良さそうだったが、エクレルに殺されるのも嫌だし、彼女がわざわざ嘘を付いているのにも理由があるはずだ。彼女はそう考えて、仕方なく”乗る”ことにした。

「とある国で、とある人と共に外交を主として働いていたのだが、その人が亡くなって身寄りがないために引き取られてきた。」

そのとある人が居て、亡くなった、という以外は全て嘘だ。

この街に来るといふそれ以前の、ヒトに確かな殺意を覚えたのはそれがきっかけだった。亡くなったというのは正確ではなく、逃がすためにその場に残ったのだが——とても生き残っているようにには思えない。

今となっても未だ悲しいが、どちらかと言えば惜しい人を亡くしたという感情のほうが強い。

精神年齢は高いほうだと自負しているから、早熟なのだろう。年齢は、目の前の彼らとそう大きく離れているわけでもない。

彼女は申し訳なさそうに目を伏せるアオイを一瞥して、

「気にするな。下手に同情されるのは好きではない」

「ご、ごめんなさい……」

「あ、それじゃあ勉強とか出来るの？」

そう訊いたのはトロスだった。

「最低限の教育は受けている。義務教育、だがな」

「あー、それじゃキツいだろうな。後期の授業は専門的なのが多くなるけど、前期は高等教育のおさらいみたいなもんだし」

「……後期は、あの奇っ怪な授業がなくなるのか？」

「ああ。少なくとも数学だとかは無くなる」

「命拾いだ」

「ははっ、特にダメそうだったもんな、クリームは」

「おまえは、つくづく遠慮というものを知らないな……」

馴れ馴れしいジャンに、クリームはわざとらしく肩をすくめてみせる。

それからフォークを弁当箱の中に落とし、空になったそれをサニ―に手渡した。

「ありがとう。美味しかった」

旨い上に、腹が膨れるというのは最高だ。伊達に三大欲求の一つとして食欲がランクインしているわけではないようだ。

「えへへ、どういたしまして。良かったら、明日も作ってこようか？」

「あ、いや。ありがたい申し出だし、断りたくは無いが……わたし
が君にしてやれる事がない」

「もう、友達なのにそんな事、気にしないでよー」

「む、友達？」

「あ、嫌だった？ ご、ごめんね。勝手に舞い上がってたみたいで
――」

そんな響きが、心のなかに染み渡る。

友達、友人。自分の中では、いつしか忘れられて失われていた言葉であり、存在だった。

最後の友人は、いつしかクリムを裏切って守る側から攻める側へと転じていたのを思い出す。あれが彼女の処世術なのだから、自分には攻める理由などないのだが……あれは堪えた。人生の中で、五本指に入るショッキングな出来事だ。

そんなちよつとしたトラウマがあるから、もし友達ができたらどうしようとかを昔考えていたが——ここまで育ててくれた人がいた。そいつのお陰で、ようやくその心配が出来る立場になった今では、冷静に対応できていた。

「いや、嬉しい。こちらからお願いしたいくらいだ」

——この学校ではいくらか上手くやっていけるかもしれない。そうだ。ヒトに慣れるのも、この気のいい友人らの中で、なんだか妙に中心的な位置にいる、この男からにするのもいいかもしれない。

この瞬間に出来た多くの女性、加えて何の種族か不明瞭な男性一人から祝福の言葉を与えられながら、クリムはジャンを一瞥する。彼はどこか超然とした、一歩引くような態度でその様子を微笑んで眺めているのが、良くわかった。

もしかすると、彼はこうなることを望んで声をかけたのかもしれない。そのきっかけをわざわざくれたのだとしたら……。

「手強いな……」

ヒトは思いもよらず思慮深い。

彼女はそう思いながら、ぎこちなく笑みを作って、その昼食休憩を満喫した。

「今日はそんな一日だった」

薄紫の、ウェーブがかった髪をタオルで拭きながら、綿で出来たガウン一枚になるエクレルに一から説明した。

今日の出来事。何時に何をして、何が起こったか。初日だけ友達ができ、お弁当を分けてもらったただとか。放課後は、友達に誘

われるままに街を見て回って、どこから逃げ出せるかなど考えた、なんてうっかりと零してしまうのは愛嬌だ。

ふかふかの寝台の上で足を組み、程良く肉がついた太ももにはまだ水滴が滴っている。艶っぽい、女性という部分が特出した女性らしい女性だった。

「そう、良かったです。『リサ』が学校に馴染めるように」

「昨日から疑問だったけど……なぜわざわざ偽名を使用する？ わたしの名前など、誰も知らないのに」

「一応、ですよ。少なくともアナタの育ての親は、ごく有名でしたから」

「……調べたのか？」

膝を折って床に直接敷いてある布団の上に座り、膝に両手を突っ立てて肩を張る。自然的に上目遣いになると、まるで睨んでいるようになるが、エクレルは気にせず頷いた。

「少し後ろめたかったけど、ね。だけど、アナタも”その人”の最期を見ていないなら、まだ分からない。アナタさえ良ければ、今後捜査を続けられるけれど……どうします？」

悪戯っぽく、どこか意地悪そうな笑みを浮かべるエクレルに、彼女は短く舌打ちをした。

「すまないが、頼む」

もしアイツが生きているならば——恐らく決してありえないことだが、仮に命がまだあるのなら、言いたいことが残っている。この人生の在り方というものを教えてくれた人だから、アイツだけはどうしても諦め切れないのだ。

辛気臭くうつむくと、エクレルがわざとらしく「それでえ？」と口を開いた。

空気をぶち壊す発言に、彼女は短く舌打ちをしながら、「何がだ？」と訊き返す。

「ジャンくんは、中々気のいい人間ひとでしょ？」

「あいつは、貴様の差金か……ッ!？」

くそ、騙された！ 思わずそう叫びそうになるが、彼女の自制心がそれを力一杯抑えこむ。

またヒトに、この短時間でにわかになにを許しそうになった自分を恥じながらも、彼女は精一杯、エクレルを睨んだ。

「ち、違いますよ、人聞きの悪い。あの子は、私達のお気に入り、みたいなのでね。平凡なんだけど、出会い頭がちょっと頼もしかったから、それがきつかけになって……」

「要領を得ないな。奴は特別なのか？」

「そうじゃないですよ。でも、優しいし、なによりも妙に異人種わたしたちに気に入られるタチらしいです」

「……特殊なフェロモンかなにかでも出ているのか？」

「さあ。ただ異人種に、普通に接してくれるからってだけな訳じゃないだろうに、おかしいですよ。普通の、本当に普通の人間なのに」

彼女は心の底から不思議そうに、顎に指を指すようにして考え込んだ。

説明しようにも、言葉を挙げれば挙げるほど理由が出てこない。生まれるのは疑問ばかりだ。

騎士志願の中では、あの学生の中では案外実力があるし、勇気も十分。幾度か修羅場をくぐったような目付きには、彼の過去を照らしあわせれば理由がわかるが——もしかするとその経験からなる少し大人っぽい様子が、全ての理由なのかもしれない。

それに加えて恐らく、ジャンを助けたというケンタウロスの女騎士と、エクレルの友人でもあるケンタウロスの女騎士である『ユーリア』は同一人物なのだろうが……彼女が接触したがないのにも理由があるのかもしれない。

いかんせん、頭が沸騰しそうだ。

エクレルは大きく息を吐いて、立ち上がった。

壁に備えてある照明のスイッチを押して、辺りを昼間のように明るく照らす照明をオフにする。魔石は空気中から魔力供給を停止さ

せて、間もなく部屋の中を黒い闇に塗り固めた。

「彼はいい子ですよ。ヘンに勘ぐらないで、普通に接してみるのもいいかもしれませんね」

飛び込むように寝台に寝転がると、弾力のあるマットレスが幾度か彼女を弾ませて、ガウンをはだけさせた。

「リサ、おやすみなさい」

「……ああ、おやすみ」

おいしいご飯に、ぽかぽかお風呂。暖かい布団でぐっすり眠る。こんな素晴らしいことが他にはあるだろうか。

——生活レベルはぐんと上がって、リサ、あるいはクリムと呼ばれる彼女にとっては最上級層並の生活をしているような感覚だ。まるで、この間までの野生の生活が嘘のようだと、彼女はつくづく思う。

どうあっても、どれだけヒトが憎くとも、この生活ばかりは手放せなくなりそうだ。

彼女は布団に潜りそう考えるも、数秒と待たずに、今日一日の疲れもあつてかすぐさま夢の中へと滑りこんでいった。

期末試験

クリイムの転入がちょつとした騒動になってから一週間が経過する。

その頃になると、クラスは再び落ち着きを取り戻し——正確には、取り戻さざるを得なかった。

期末試験。

今日がその、初日だからだ。

一ヶ月前から準備をしてきた用意周到のジャン・スティールの傍らでは、試験が開始してから十分ほどで頭を抱えて机に突っ伏したクリイムが居る。

やや前方、先頭から一つ手前に座るサニーは意外にも詰まること無くペンを走らせ、アオイやクロコ、レイミイも同様に余裕を持った表情で解答用紙に答えを綴っているようだった。

——今は初日の三時限目で、今日の日程最後のテストだ。

さらに明日と明後日で筆記試験は終わりになり、次の日に戦闘技術の実施試験になる。

それが終わると、翌日に終業式を執り行つて——夏休み突入だ。

「残り十分。氏名と、解答欄がズレてないか、確認しとけよ」

作業服姿の担任は、気怠そうに椅子に身体を預けて足を組み、腕を組みそう告げる。

ジャンは既に幾度も繰り返した確認の作業を、担任の言葉に倣つてもう一度だけ繰り返す。問題用紙の余白には残ったままの計算式と、くだらない落書きが今更になって恥ずかしく思い、その上にペンをぐちゃぐちゃに走らせて塗りつぶす。

大きく欠伸をする。

時間が、その流れがいつもより緩慢な気がした。

退屈だ。

何よりも、思ったよりテストの内容が簡単だったことに驚いた。これなら案外、これ以降のテストもなんとかなるかもしれない。そんな思いを馳せながら――担任の、終了の合図を聞いた。

すぐに弛緩する空気の中、それぞれはぼやきながら、ジャンは席を立てて解答用紙を回収する。そうしてから席へと戻ると、その後ろに着いて来ていたクリムは深いため息を漏らして、席に着いた。「どうした、大丈夫か？」

「……こ、肯定しよう」

搾り出すように彼女は口にする。ぐりん、と机に当てていた頭を回して、怠惰なままに突っ伏したままジャンを見た。

「いいなあお前は、優秀で」

「冗談言つなよ。おれだって頑張ってたんだ」

「そんなの、頑張っても出来ない奴に向ける言葉じゃないぞ」

「基礎が出来てないのに応用からやろうとするからだ。卵焼きも満足に作れない奴が、いきなりシチューとかビーフシチュー作れるかよ」

「なんでシチュー限定なんだ……」

「例えだよ、気にしないでくれ」

むう、こいつは恐らくシチューが好きなのだろう。

クリムは話の流れなど関係なしにそう思って、担任の適当な報告やらを聞き流す。

大した連絡もなく、ただ明日も頑張れたの、赤点はオレ的に勘弁な、だのと無責任極まりない言葉をいつも通り吐きちらしていく。平常運転だ。

そうすると間もなくそれも終わって、担任は教室を後にして、教室内は途端にざわめきだした。

つまり――放課後になった。

「もし良かったら勉強するか？ 今日、みんな個人で勉強するみたいだし、おれも暇だし」

「なぜ二人つきりなんだ。みんなが居る時でいいだろう？」

「まあ、イヤなら良いんだ」

と彼は言いながら、ごそごそとシヨルダーバッグの中に手を突っ込んで何かを漁る。目的の物を掴むと表情がぱっと明るくなり、彼は口元に笑みを携えて、三冊のノートを引き出した。

ジャンはそれを彼女へと差し出して、好青年の様相で告げる。

「明日の教科だ。割と読みやすいと自負してる。良かったら使ってくれると嬉しい」

「……そうになると、お前はどうなる？」

クリイムが怪訝な表情で訊くと、彼は得意げに側頭部を指で叩いてみせた。

嫌味な表現に、思わず本能的な嫌悪が背筋を走り、サソリの尾がぴんといきり立った。

「頭の中に入ってるから大丈夫だ」

「くっ、気持が悪いな！」

シャー、と今にも唸りだしそんな尾を必死で抑えながらクリイムが叫ぶ。

なぜこれほどまで得意げなんだ。恥ずかしく無いのか。ヒトには羞恥心というものが無いのか。なぜ平然と、こんな赤面モノの発言が出来るのだ。

気持が悪い。

クリイムは彼の手からノートをひったくってから、数歩だけ後ろに下がった。

「好意には応えよう。だが期待はするな」

「せめて卵焼きくらいは作れるようになれよ」

「お前の好物など知るか。ともかく感謝するぞ、ステイール」

彼女は素直に礼を言っ、丁寧すぎるまでに丁寧にノートをカバンに詰め込んで、それを両手で提げる。長い赤髪を翻しながら、彼女は徐々に尾の立つ角度を鈍角にしながら、またジャンへと振り返った。

「わたしは帰宅する」

「ああ、じゃあな」

「お前はどうするんだ」

「おれ？ みんなはもう先に帰ったし……まあ、先に帰ってて良いって言ったからな」

クリイムのための時間を取るだろうから、なんて恩着せがましいことを冗談っぽく言ってみようかと思ったが、彼女はこう見えても生真面目だ。本気にして、妙なまでに飯を返そうとする。

ジャンには少しばかり手厳しいコミュニケーションを図る彼女だが、そんなこともあって、ジャンは本気でクリイムと関わりたくなくど無い、と考えることは無かった。むしろこれから親密になって、他の友人らと同様に齒に衣着せぬような関係になりたいとさえ思っていた。

もちろん下心など無く、また腹黒い計算のもとではなく、その気持は混じりつ毛のない純粹なものだった。

「ま、おれも帰るよ。ふつうに」

「そうか。わたしの家は、北区なんだが」

北区、というのは噴水広場から北、つまり城がある方向だ。ちょうど帰宅途中に通過する地点でもある。

南区は商店が主に集中する街の出入り口部分であり、借家や宿屋なども点在する、いわゆる商業区だ。そして東区が居住区であり、西区も、一応居住区だ。

「家が近そうでよかったな」

彼女が何を言わんとしているかわかっている。

素直にお礼は言えるのに、そういったお誘いだとか、自分から行動を起こすことに関してはとことんダメ、不得手である。だからジャンはちよつとした悪戯心と、クリイムに慣れさせようとするおせっかいな親切心も相まって、そんなわざとらしい対応をしていた。クラスメイトが、いつもの組み合わせだとチラチラと見てきてから視線を外す。

彼女も今ではすっかり、とまではいかないが、クラスに馴染んで

きている。その中でもこの組み合わせは——飼い主と犬といった関係だと認識されていた。

「そうだろうな。お前は、どこをどう帰るんだ？」

手提げかばんを提げる彼女をよそに、ジャンはショルダーバッグを肩にかける。授業がない上に弁当も無いからひどく軽いソレは、それ故にバッグの存在を忘れてしまいそうになる。

「こっから通りに出て、城の前を曲って広場に出て、東区に行く感じだな」

「奇遇だな。わたしも、広場に出るまでの道が一緒なんだ」

「そうなんだ。家は近いのか？」

「ああ」

彼女は首肯した。

「なによりだ」

なにがだ。

彼は自分の言葉に疑問をもちながら、いつものように笑顔に向けてクリムに背を向けた。

「少し待て、待とうじゃないか」

頬から鼻先までを真っ赤に染めて、震える手を握りこぶしに変えて震えを抑える彼女は、回りこむようにしてジャンの前に立ちはだかった。

ぶっきらぼうな口調だが、しっかりと感情がある。むしろ、抑えているだけで喜怒哀楽などは、他人よりも豊なのかもしれない。というのは、彼女自身も無自覚なのだろうが。

「おう、どうした」

「奇遇だな。わたしも、広場に出るまでの道が一緒なんだ」

「ループしてんぞ」

「つまり、だ」

「おう」

「わたしが言いたいことは、だな……」

意気込むように、胸いっぱい息を吸い込む。

何をこんなに緊張する必要があるのだろうか。教室で、いつも一人で本を呼んでいるような子でもここまで緊張しないぞ、とジャンは思いながら、微笑ましく見守る。

そんな中で、悪魔がささやいた。

そしてささやいたままに、口に出してしまった。

「帰り道が同じなら、一緒に帰らないか？」

——その刹那。

ジャンは、驚いたように目を見開いて見つめてくるクリイムの顔を見て、時間が止まったのを実感した。

が、それも束の間。

彼女は顔をうつむかせて、わなわなと怒りを表現するように肩を震わせる。

しまった、とジャンは思った。

「しまった」

つい悪戯心が先走ってしまった。

「おまえ、わたしが何を言いたいのか、ずっとわかってて……ずっと、からかっていたのか……？」

右腕が黒く変色する。そう認識した時点では既に、その指先は結合して、鋭いハサミの形になっていた。

「ちよ、ちよっとまで落ちて着こうぜ。右腕がファンタスティックなことになってんぞ？」

「おまえと言うヒトは……せつかく、わたしが頑張ってヒトに慣れようと、頑張ってるのに……嘲笑って……！」

「ち、ちがうって！ 嘲笑ってないって！ つまり、あれだ——」

クリイムの視界から、不意にジャンの姿が消える。だが野生で鍛えた動体視力が容易く彼を見逃すはずも無かったが……膝を折り曲げ、額を頭にこすりつける姿には違和感を覚えずにはいられなかった。

「ごめんなさい！ つい、クリイムがちょっとあの、アレでして。出来心で！」

いわゆる降参の合図だと、動物でいう腹を見せる体勢であるのだと、エクレルが言っていたのを思い出す。

だが、腑に落ちない。

降参されたからって、自動的に怒りが収まるわけではないのだ。

「アレってなんだ」

「クリイムって良く見ると可愛いなって思いました」

——ぼん、と爆ぜる音が聞こえた、気がした。

怒鳴られる事を覚悟して吐き出した言葉に何の反応も返ってこない事が逆に恐ろしく思えて、彼は意を決して顔を上げる。と、顔を真赤に染め上げたクリイムは顔の前にまで垂らす程に尾をいきり立たせていたが、手は、いつものようなしなやかな指を作っているままだった。

「まだやってんの？ お前」

膝についたホコリを払って立ち上がる。そうする中で声を掛けるのは、金髪をタテガミのように逆立たせた人間の男だった。名前をカールという、今では割と声をかけてくれる人間の一人である。

「まあな」

「物好きだな。とことん」

「んな事言つとハサミで真つ二つにされんぞ」

「ははっ、おつかねえな。んじゃな、また明日」

カールは言うだけ言って冷やかすと、そのまま背を向けて教室を後にする。

と、そこには既にクリイムとジャンしか居ないことに気がついた。クリイムは何かの冗談のように、全く動く気配がない。サソリ族とは、立ったまま気絶する習性でもあるのだろうか。

ジャンはだんだん面倒臭くなって、結局は腕を引っ張って帰るところにした。

——そんな日々があと二日続いて、いよいよ筆記試験が終了した。

ごく平和な日々だった。

何事もないし、クリームともだんだん距離が縮まっている実感がある。ノ口も最近ではよくちよく顔を出すようになったし、最近ではタマと街を歩いている姿も見る。

全てが良い方向に動き出していた。

問題は、あと資金の工面がつくことだけだろう。

しかし、どうにも自分に出来るような仕事が見つからなかった。

商店でのアルバイトを考えてみるが、学校があるから中々時間の都合がつかないし、ならば警備などのソレはどうかと考えるが、まず募集していない。

その時点でもう手詰まりだった。

「そこまで！」

戦闘教官の、砲撃のような大音声が轟いて、対峙していた二人の生徒は同時に動きを止めた。

グラウンドの中心で行われていた戦闘技術の実施試験の最中である。その二人組は、ちょうど最後から数えて二組目だった。

「二人共、入学時よりは随分と成長しているな。その調子で頑張るがいい」

『ありがとうございます！』

声を揃えて頭を下げて、二人は木剣を持ったまま、ジャンの方へと近づいてくる。

うち一人は、数歩分の距離を開けたままそれをほうり投げてみせた。木剣はくるくると空中で回転しながらジャンへと迫り、彼が手を伸ばせば、ちょうど柄が手に触れる。掴んで、振り下ろせば勢いもいい具合に流して殺せた。

「最後だ。がんばれよ」

木剣を投げたカールが激励する。

ジャンは軽く手を上げて、隣で木剣を渡されたトロスを一瞥した。「おれって、こういう順番はいつもついてない気がするよ」

「今回は僕だってそうなんだから、あまり嘆かないでくれよ」

「最後オツ！ さつさと出てこい！」

教官の声に二人は肩をすくめるようにして、生徒らが円を作るその中心へと躍り出る。

男女混合の中で、注目される試験に少ばかり緊張するのは当たり前だったが——それが最初や最後だったならば、尚更だった。

「はじめ！」

適当なタイミングでの合図に、されど既に準備を整えていた両者は射程からやや離れた距離を保って、剣を構えた。

——考えてみれば、トロスと打ち合うのは初めてだ。

出会ってから随分仲良くやらせてもらった。彼が居るのが、当たり前のような感覚に、今ではなっている。

穏やかで、だが力強い。初対面ではせつかちと言われていたが、今では落ち着きある、年齢よりも遥かに穏やかな物腰で全てに対応している。

甘いマスクだ。

生え際が黒くなりつつある金髪も、短くして染め直せば中々に渋い男にすらなる。

羨ましい限りだし、成績だっていい方ではないが、無難。戦闘技術も中の上程度だ。学校が始まってから開始したらしい自主トレーニングのおかげも相まって、この授業での成績は実績に加えて努力も評価されているから、随分といい具合になっているだろう。

「ねえ、ステイル」

そういえば、いつの間にか呼び捨てになっていた。

それが氣にくわないわけではない。

むしろ心地良かった。

「今日は、本気で頼むよ」

真剣な面持ちで告げるのは、試験だから適当にやりすごそうという提案ではなく。

「なに言ってるんだ」

自分の実力を試したいという純粋な願望と、

「おれはいつだって、本気だよ」

親友と認める友人と、本気でぶつかり合いたいという欲望だった。

はじめに動いたのはジャン・スティールだった。

大地を弾くように走りだし、真正面からトロスへと向かう。

同時に動き出したトロスは、されど走りだすことはなく、飽くまでジャンの攻撃を待っていた。

俊足故に距離は瞬く間に縮まり、残り数歩分という距離でトロスが動く。腰を落とし、腰に構えた剣を力強く閃かせる。当然、それはジャンがそのまま突っ込んでくるといふ確信を持つがゆえの行動だし、そうすることしかできないと、常識では考えられた。

が、居合いと呼ばれるその剣戟は、ジャンには当たらない。

剣先は何かに触れることもないままに、虚空を切り裂き――。

「……ッ!？」

ジャンの姿が、周囲から消えている。

トロスがそう理解する間に、彼の姿は足元から浮かび上がるようにせり上がってきて、

「これで終わり、だな」

木剣の切先が、優しく喉元に触れた。

――敗因は行動を読まれていたことと、構えからすぐにどう出るか理解されてしまう攻撃手段しか持ち得なかったことにある。

攻撃速度は十分だし、居合いという技も素人のソレではなかった。そして、彼自身ジャンとまともに打ち合って勝てるわけがないと決めつけていたことも敗因の一つだろう。

「そこまで!」

教官の声が轟く。

そうしてあつという間に、期末試験の最後のテストが終了した。

冒険者ギルド　　初めての仕事

「サニー……すごく、言いづらいことなんだがな」

夏休みに入ったその翌日。

空になった布袋の口を逆さにして軽く振りながら、ジャンは不景気な口調で重大な事実を告げた。

「資金が底を尽きた」

つまり、だ。

「今月のお小遣いはナシだ」

それは、夏休み初日の出来事だった。

「私まだ銀貨十枚残ってるから大丈夫だけど……これからどうするの？」

寝台に座ってうな垂れるジャンの背中に手を添わせながら、サニーが心配そうに声を掛ける。

ジャンはそれから壁に立てかけられている、革の鞘に収まったブロードソードに目やって、

「なんでも、ギルドってヤツがあるらしい」

「ギルド……？　なにそれ」

「まあ、ギルドって言葉自体は、組合って意味なんだけどさ」

諸国には、職業別にそういった組合が存在していて、海を挟んだ国同士でも組合として繋がりを持つことが出来る。主に占めているのが商人のギルド、つまり商業組合であり、他にも工業などの生産系統の組合が次に多い。

そうして次点が、冒険者によって建設されたギルドだ。街に最低一つは存在し、種類はいくらかあって統合はされていない。そこでは相互援助という形で、その街を中心にする無数の仕事が集まっていた。

探しものや、おつかい、あるいは知能を持たぬ——異人種ではなく、異種族と呼ばれる怪物退治などの種類を選ばぬ仕事だ。そのギ

ルドに登録して仕事を委託してもらえれば、依頼主を介してギルドで仕事を請け負う事ができる。

拘束期間は仕事を請け負って完了するまでであり、長い間ギルドに行かないからといって強制的に登録内容を抹消されることはない。だが仕事が簡単であればあるほど報酬である給金は低く、一度の仕事で大量に資金を得たいのならば、命の危険すらある高難易度の仕事を請け負う必要がある。もっとも、ある程度以上の難易度の仕事は信頼性が必要であるために、新人が行うことは決して出来無い仕様になっていた。

「……それで、これから登録しに行くってこと？」

あらかたの説明を終えると、サニーは頷き、訊いてくる。

ジャンは静かに首を振った。

「登録はしてあるんだ。この街に来たときに、一番最初にしておいた……けどさ」

多分、自分がやるとしたら、仕事の大半は外に出て怪物退治に勤しむことになるだろう。それが自分を高めることに繋がるし、これまでしていた仕事を考えれば、身体も動かせて一石二鳥なのだ。

だから、危険を伴う。

黙って行っても良かったが、サニーに心配はかけられなかった。

「怪我するかもしれない。あんまり、サニーに心配ばっかかけてられないからな」

「もう、ジャンも、私の心配するまえに自分の心配もしてよね。ジャンがちゃんとしてれば大丈夫だし——怪我をしても私が居る。大丈夫でしょ？」

「ああ、そうか。そういえば、確かに」

盲点を突かれたようにジャンは微笑んだ。

サニーは魔法を持っているし、その力を自覚して自分でしっかりと扱うことができている。

彼女の魔法は、端的に言えば治癒だ。怪我を治し、あるいは壊れてしまった物も、その破損具合がある程度ならば直すことが可能で

ある。

忘れていた、とジャンは手を打ってから、いつものように彼女の頭を撫でてやった。

サニーはくすぐったそうに首をかしげて微笑んで、ジャンはそれを見ながら立ち上がる。

「さて、それじゃ行ってくるよ」

人が渦巻く噴水広場を南に抜けて、少し進んだ所に広めの路地がある。組合の軒がひしめくように並ぶ、専用とも言ってもいい道がそこにはあつて、店の間に馬車を待たせる姿や、ちようど品物を運んできたのであろう荷揚げ場には屈強な男達が半袖から図太い腕を見せて荷物を運んでいる姿がある。

それぞれギルドは、創設者によつて建物の外観が異なる。地方の人間が建てたものならば、その地方色が色濃く出るのが、ギルドの良いところでもあつた。どの国に行つても故郷の空気を感じる事ができるというのは、それはとても嬉しいことなのだ。

ジャンが見つけたのは、その中では割合に一般的で、大して近代的も無い、この街にはどこでもありそうな建造物だつた。

石段を上がり、獅子が噛み付いているノッカーを掴んで幾度か叩く。が、どうにも中のざわめきのせいで音は通らず、訪問者に対しての返事はない。

いくら夏休みだからとはいえ、今日は休日だ。こういつた何でも屋の役割をする冒険者ギルドは片手間で仕事をこなす人間が多いから、このギルドという建物に留まる機会はないはずなのだが……。

ジャンは首をかしげながら、勝手に扉を開けた。

薄暗い室内に、外からの陽の明かりが挿し込むように入る。途端に外へと逃げ出す空気の流れが巻き起こつて——濃厚なアルコール臭が鼻腔に突き刺さつた。

「うつ、くつせ……！」

思わずそう漏らして手で鼻と口を覆う。

腰に剣を下げたまま、せめて外套でも羽織ってくればよかったとジャンは思いながら、訪問にすら気付かぬ連中など気にせず中に侵入した。

——内装は、板張りの床に、幾つかの円卓や、長机が並ぶだけのものだ。一番奥には酒場のように長いカウンターがあつて、入つて右側の壁には掲示板がある。そこにはいくつもの張り紙がなされていて——その張り紙自体が仕事の依頼書となつている。

登録者はそこから自分で仕事を選び、カウンターに居る主へと提出し、吟味の末に承諾されれば、そこでようやく仕事に向かうことができるのだ。

仕事が終われば、その証明を出来るものを持ち帰り、マスターに提出。報酬はそれから後日、依頼者からギルドを介して渡される。

いつもは閑散としている筈の館内は、まるで早朝から酒を振る舞っているかのように酒臭い。

そして円卓はどれも満員で、そこかしこの椅子に腰掛ける半分ほどは、旅人風情の連中ばかりだった。

ジャンはそのまま掲示板へと向かおうとすると、マスターがジャンに気づき、軽く手を上げるのを見た。

「おう、久しぶりだな。登録してから一向に姿を見せないから、冷やかしかと思つた」

ジャンが歩み寄り、カウンターの前に立つと、彼はまずそう言った。

恰幅の良い男だ。頭髪にはまだいくらかの余裕はあるようだが、額はますますその面積を広げている。愛嬌のある笑みを浮かべて、その人当たりの良さが心地良かった。

「一応学生だね」

「ああ、養成学校の、だっけか。エリートコースまっしぐらだな。はは、俺のギルドから騎士が出るなんて、何年ぶりか。アイツらはお高い所に止まって、自分で金を稼ぐって事を知らないからな。お

前さんのような苦労者は大歓迎だよ」

すこし筋肉質の腹を豪快に叩いて笑う男は人間だ。だが、ギルドには構わず異人種も多い。他国ではあまり見られない光景なのだろうが、やはりありがちな差別が水面下にすらない所が、この国のいいところだった。

「むしろ働かずに金が入ってきたら怖いですよ。ただより高いものはないですからね」

「がはは！ 全くだ！」

「それで」

とジャンが話を切り出した。

おもむろにポケットから取り出したのは、財布に使っていた布袋だ。今では悲しいくらいに薄っぺらく、中身がないために軽い。重さを忘れてしまった財布をカウンターの上に出すと、マスターは途端に神妙な面持ちになってジャンを見つめた。

「金貨五枚ほどの仕事は、ないですかね」

金貨五枚。

その価値は、簡単にいえば――銀貨にして約五〇〇枚の価値。銅貨にして、約五〇〇〇枚の価値だ。

それだけあれば共同住宅で半年は金の心配をせずに居座れるし、毎日外食しても足りる金額である。

もっと簡単に言えば、魔術仕様の武具が一つだけ購入できる。何もない一般的な武器ならば、警ら兵御用達の装備一式が揃えられるはずだ。

つまり、それがあれば今年は心配せずに過ごせるはずであり、思わぬ出費に対応できるのだ。

もっとも――ジャン・ステイルが六年間貯めた資金がわずか三ヶ月で底を尽きたところを考えれば、そうそう楽観的に考えられるものではないのだが。

救いなのが、入学金と学費が一度に二年分払込んだことだった。「そうだなあ。コロンの鉱山で働いていたんだろ？ この街もあそ

この装備は覇^{ひこ}肩^{かた}にしてるから、お前の実力がお墨付きつてのもわかるんだが……正直言つて厳しいな。戦闘経験が足りなさすぎる」

「んー、ですと、どの程度の仕事なら出来ますか？」

「その前に、お前が使用可能な魔術によってかなりランクが変わってくる。そのブロードソードは魔術仕様だと聞いたが……」

「まあ一応、一通りの属性に対応できますが、威力に不安が残ります」

少なくとも、直撃したとしても怪物^{モンスター}を一撃で倒すことはできないだろう。その程度の威力だ。

「他に紋様とか、詠唱や魔方陣は覚えているのか？」

「あー、まあ。一応」

彼は言いながら、肩から背中に手を回して、軽く叩いてみせた。

「詠唱は本番では使えないレベルですが、背中に魔方陣が刻^きんであります」

魔術の発動を簡易化した紋様ではなく、それはその形や魔法文字^{マジック}さえ正確ならばどこでも魔術を発動できる魔方陣だ。

そして簡易化、省略可されていないために紋様よりも発動にはいささかタイムラグがあり——だが術者の成長に比例しない、刻^きんだ者の魔術が威力をそのままに刻まれるから、どれほどの弱者でも、幼子でも、魔術師が最高練度のそれを刻んでやれば、誰でもそれを再現することができるのだ。

彼はそれを背に持っていた。

鉾山に居た、というか定期的に訪問してくる魔術を嗜む旅商人によつて与えられたのだ。

身を守るために、と魔術の専門家である魔術師を目指していた彼がくれたのは——今のジャン・ステイルでさえ手に余るほどの魔術だった。

「へえ、珍しく古臭いやり方だな。陣を少しでも間違えば台無しだろうに」

そう、魔方陣を正確に複製できなければ魔術は発動しない。

魔方阵はそれぞれの魔術によって異なるが、例えば『大地の怒り』
ならばそれ専用の陣が存在する。が、その魔方阵を形成した術者に
よってその威力は異なるのだ。

それを肉体に刻むというのは、それ故にリスクが高い行為である。
持ち歩きの為に紙に記すという、巻物スクロールと呼ばれる魔術道具もある
が、魔術の発動に耐え切れずに破損してしまつたために、実質使い捨
ての道具であつた。

だからと言って、肉体に直接魔方阵を刻む例は決してそう多いわ
けではない。

そこで採用されているのが、肉体の成長や熟練度と共に変異する
”紋様”だ。これには特定の形というものは無く、魔力を込めて特
殊な方法で刺青を入れるだけなのだ。故に失敗というものはなく、
成長を実感できるために多くの者がそれを手にしていた。

「まあ、鉾山は危険が付き物ですからね。何より自分を守るのは自
分ですし」

「そうだな。それで、その魔術はどういったものなんだ？」

「えーと、最後に使つたのが一昨年なんでちよつと不安なんです

——純粹に肉体強化ですね」

肉体に魔力を流して筋力や反射神経などに強制的に干渉し、強化
する。

仮に鉾山が崩れてきても、一時的にそれを発動させることで生き
埋めになる前に脱出することも可能だし、上手くいけば瓦礫をかき
分けて自力で脱出することも可能だ。もちろん、活性化する肉体は
それ故に傷も回復させるから、負傷の心配がない。

その代わりに、無茶な機動や力の発揮で反動が来てしまう。

筋肉痛程度で済めば良いのだが、鉾山では無茶が祟つて骨が砕け
てしまつたドワーフも居たのを思い出す。

マスターは彼の言葉に何かを思案するように顎に手をやりつつむ
くと、うーんと唸つて、指を鳴らした。

そうすると、掲示板に貼付けられている一枚の紙が引き剥がされ

て、ふわりと宙に浮かび、無風の空間内で風に乗るように、ゆらりと揺れながら、やがてカウンターへとやってきた。

「お前以上の実力者がもう一人居れば、この報酬が金貨三枚の仕事があるんだがな……」

「二人で分けて、金貨一枚に銀貨五〇枚ですね。学生には十分な金額ですが……」

これを資本にして、地道に仕事をこなすのであれば、十分すぎると言えるだろう。

だが、ジャンが口ごもるにはそれ以外の理由があった。

「身勝手な危険ごとに、あまり友人を巻き込みたくないですよねえ」

どうにかありませんか、と無駄だとわかりながら食い下がるように訊いてみる。

が、やはりマスターは毅然と首を振った。

「仕事内容は一般的な怪物退治。最近は何んでも、農産物や畜産が被害にあっているらしい。そいつの巢は街から西、海への道の通過点にある洞窟だ。それでも仕事を受けるつもりか？」

「ええ。そのつもりでここに来ました」

剣の柄に手をやって微笑むと、彼はそうか、と力強く頷いた。

「仲間に心当たりが居ないのならば、こちらで手配しても良いかな？」

「よさそうな人がいいです」

「んー、ま、一応プロだからな。ウマが合うかわからないが……おい、ラアビ！ 暇ならこっちこい！」

大きく叫ぶと、不意に空間が静まり返る。

しん、と静寂に包まれ始めた館内は妙な緊張をはらみ始める。ジャンは確かに、その異様な空気を肌で感じて、思わず振り返ると――それと同時に、椅子の足が床を引きずった、その摩擦音が響き渡った。

長机で一人、ビンから直接酒を飲んでいた姿が立ち上がっている

のが見えた。

頭から長く伸びた対なる耳は、その半ば辺りから脱力するように垂れている。外套を肩から羽織るような格好だが、その袖の部分は肘辺りから図太くなつて、その先端の部分には巨大な鉤爪を直接に装着していた。

「なあによ、ヒトのくせに。都合の良い時ばつかあたしを呼んでえ！」

にわかに身体が沈む。

その直後に、「ふっ」と息を吐いたかと思うと——彼女は見る間に天井高く跳躍して、そうして床へと近づいてくる。軽々とした様子で着地し、ウサギのように踵が長く、ややつま先立ちのようになる姿は、さらに太ももまでを黒い毛皮に包んでいた。

しなやかな姿。鍛えられた、野生の動物を彷彿とさせるたくましい雰囲気には、強い酒気がまわりついていた。

「うはは！ ま、話は聞いてただけだね。ヒマだから。どうせヒマなのよ」

平たい酒瓶を口に咥えたまま、外套の下では胸を抱くように腕を組んでいる。そんな彼女は、うさぎ族の女性らしかった。

「金貨三枚だつてね。いいよ、受けるよ。相棒はこの子でいいんだね？」

「一応注意しておくが、報酬は働きぶりに関わらず半々だ。いいな？」

「なによ細かいわね。知ってるわよそのくらい」

「ま、それもそうか。それより、貯蓄はあるんだからいい加減タダ酒はよして、代金を払ってくれないか？」

「……さあ君、一緒に冒険しようか」

「あ、おい！」

マスターの制止も聞かずに、ラアビと呼ばれた女性は力一杯ジャンを抱き上げたかと思うと、また大腿筋に力を込めて——跳躍。

重力の縛りを吹っ切つて宙に舞い上がり、そして床に吸い込まれ

るように引つ張られる。視界は瞬く間に移り変わって、静かな着地と共に、鈍い衝撃をジャンは覚えた。

「さ、自己紹介はあとにして。主様の愚痴を聞かされる前にちやっちやと行くわよ！」

酔いのせい、高い体温が彼女の頬をにわかに赤くさせて、ひどく酒臭い息を吐きかけながら彼女は手を引いて、さっさと館内を後にした。

ジャンはそんな、何かの冗談のような展開に思わずため息をつきながらそのラアビについて——初めてのアルバイトが、不意に爆発的に溢れ出した不安の中で、かくして開始した。

冒険者ギルド　　初めての仕事　　？

閑散とする、というよりはやや小汚い格好の住人が目立つ西区を抜けると、出入り口同様に巨大な門扉が街を塞いでいた。門番に、ラアビがギルドを辞す際にちやつかりと奪い取っていた依頼書を見せて、その門を開けてもらう許可を得た。

南の門から出てこちらに向かうことも出来たが――なにぶん、街が大きいために厄介なまでに時間がかかるし、無駄な労力になる。だから、これが適切な判断といえた。

そこから舗装された道を歩くと、やがて道の両脇に芝生が生い茂る草原にまでやってきた。

「――それじゃあ君は、この仕事が初めてって事？」

草原には、野放しにされた牛が雑草を食んでいる。その向こう側には牛舎があつて、近くには納屋らしき小屋もあつた。

「ええ、お金がなくなつたつてというのが、なんとも情けないきつかけですけどね」

ジャンは肩をすくめるようにして息を吐く。彼女は外套の下から薄く湾曲した銀色の水筒を取り出して、喉を鳴らして蒸留酒を飲み下す。

より酒気が濃くなつた吐息を漏らして、彼女は背中を丸めるように嘆息した。

「でもない傾向じゃないの？」

「そう、ですかね……」

「そうそう、だからマスターもあたしを呼んだわけだし」

力一杯大きく何度も頷いた後、ラアビは不意に吐き気を催したように顔をしかめて口元を抑える。

頬がにわかに膨らんだかと思うと、ごくりと喉を鳴らした音がする。彼女は酷く気分が悪そうな顔でまた蒸留酒を口に含むと、無理にそれを飲んでみせた。

ラアビは僅か一分にも満たぬ時間で顔色を悪く、青白く変色させてから、少しばかり機嫌が悪そうにうな垂れる。

「どういう事なんです？」

「あたしが一番酔いが浅かったのよ」

酸っぱい吐息が鼻腔に突き刺さる。

彼女は眉をしかめて、舌に残る最悪な後味を覚えながら、簡単に答えてみせた。

「実力面は信頼して良いんですか？」

どうにも心配になって訊いてみる。吐き気を催して吐瀉物を飲み込んだり、それを酒でごまかしたりなどどう見ても酔っぱらい同然の行為に、ジャンは不安を禁じ得ない。

もしかすると一人のほうが良かったのでは、とさえ思えるのだ。

この人は、いったいなんなのだろうか。

「う、うはは！」

胸をそらしてぎこちなく笑ってから、彼女はジャンの頭を叩いて、「舐めんじゃないわよ？ あたしは強いんだから」

別にいいけど。彼女はそこで一区切りにするように、肩を回して身体を解すように軽い体操をした。

——暫く歩くと、潮の香りが風に乗って届いてくる。

それに反応した彼女が足を止めると、間もなくジャンの視界から消えて、

「海、ちよつと見てみる？」

後ろから抱きついて、また沈むように屈む。

「ちよ、つとまつ——」

制止も聞かずに、ジャンは全身に過負荷を覚えながら大地から足が引き剥がされる感覚を覚えて視界が瞬く間に高くなっていくのを見ていた。臓腑が浮かび上がるような不快感は、以前に一度だけ経験がある慣れない感覚だ。

空が近くなって、日差しが強くなったような気がした。

芝生が、地面に塗料でも塗りたくったような風に変化して、その

向こう側に集落を見た。陽光によって反射する浜は白く輝いて――その向こうには、鮮やかな蒼い海が広がっていた。

空を飛ぶよりは遥かに低い位置から見る海だ。

だが、以前見た時よりも遥かに近いソレだった。

世界の広さを、改めて理解する。実感する。そうすると、身体の中から暖かく火照るような熱が生まれるのを、彼は感じていた。

ふっ、と意識が遠くなる。気絶するのではなく、自分の存在が、今よりも小さくなってしまったかのような認識。白昼夢でも見ているような錯覚に、ジャンは思わず呆然とした。

だから着地したことにも気付かなかったように、虚空を見つめて、ラアビによりかかったままだった。

が、彼女はそこまで優しくはなく、ジャンをそのまま押しのけて前に突き飛ばした。

「おわ……っち！」

そのまま顔面から地面に飛び込みそうになる体勢を、ステップを踏むようにして何とか整え、そうして跳び上がるように大地を弾いて、空中で回転。振り返って着地するまでの過程は、ダンスでも踊っているかのようにだった。

「な、なにすんですか！」

「あたし、馴れ馴れしいのは嫌いなよね」

「……そうですね」

ジャンは他にも何か言いたげに眉をしかめたが、結局口にしたのはそれだけだった。

むすつと、拗ねた子供みたいにそっぽを向いてジャンは踵を返す。前へと向き直ると、彼はラアビを置き去りにするように進み始めた。ラアビが困ったように肩をすくめて、急ぎ足で彼の横につく。

冗談も通じないのか、と首を振ってから、仕方なしにご機嫌伺いとばかりに声をかけてみた。

「そつえば、君は戦えんの？」

「……ええ……まあ、一応」

「なにそれ、煮え切んないわねえ」

「いや、実戦経験つてもんがあんまり無いんで。身体は鍛えてきたんですけどね」

腕を叩いて筋肉を主張してみせるが、これがイコール戦闘能力に変わるわけではない。

戦闘で最も重要になるのは、センスと経験だ。確かに身体能力が圧倒的に劣っていれば先制を受けてしまつて攻撃に転ずるまでもなくなってしまう可能性があるが、それでも経験があれば、行動を先読みすることができる。センスがあれば、どう動けば良いか、その直感が良い方向に、自分の流れを作り出すことが出来る。

だが、ジャン・スティールの実力とは未だ未知数。命をかけた戦闘は、まだ未体験だつた。

「ま、そこら辺は追々教えてあげるわ。君は、今日は見学なさい」

「いえ、足手まといにならない程度には頑張ります」

「そう出来ればいいけど、ね」

「腐つても騎士志願ですから」

さて、と。彼女は立ち止まる。道はそのまま海岸へと続く道と、草原を突つ切つて林の中へと伸びるものとの分かれ道が目の前に現れた。

「さ、こつちよ」

林の中へと入る。

その手前に、怪物^{モンスター}は居た。

——モンスターは異人種と共に、溝の門扉^{ゲート}から現れた、いわゆる”向こう側”の生物だ。この世界の動物と似て非なる、圧倒的な戦闘力を誇る存在だ。だから、ある程度の実力を持たなければ、その姿を見かけた際には相手に気付かれぬように逃げなければならない。モンスターの多くは好戦的だ。

そして常に飢えている。

故に、戦闘はより必然的に起こるのだ。

「ふふん、君は下がってなさい」

外套の袖に両手を通して、彼女は巨大な鉤爪を諸手に装備する。対峙するのは、一頭の狼だ。牙は鋭く上顎から突き出て、爪は長く伸びて地面に食い込む。威嚇するように鳴る喉は恐怖を煽るように唸り続け、獐猛な瞳は既に彼女らを捉えていた。

一触即発の、張り詰めた空気の中。

ジャンは思わず口走った。

「そいつを、殺すんですか……？」

「……はあ？」

イラついたようにラアビが返す。

「それはどういう意味？」

モンスターから決して視線を外さず、言葉を交わす中でも隙を伺い続ける彼女は、敢えて会話を続けるために膠着を選んだ。

ジャンは頷く。

「そいつは、おれ達がここに来たから、多分……その、住処を荒らされると思って抵抗しようとしてるんですよ。なのに、それを殺すのって……」

「なら君は殺さずに殺されればいいわ。まったく、何を言い出すかと思えば——失望モノだわ。じゃあ何、君はあたしに死ねって言う訳？」

「そ、そういうわけじゃないですけど……」

——ジャンは困惑していた。

モンスターを見た瞬間に思い出したのは、森の中でイタズラに解体されたウサギの姿だった。

それはやってはいけないことだと彼は怒った。イタズラに動物を殺してはいけないと。

ならば、自分が今しようとしている事は何だ？ 人のエゴやなにやらで、生きるために必死になっている動物を殺そうとしている、この現状はなんだ？

そう考えるが、彼が本心からソレをそう思っているわけでもない。

自分がそうに、今まで取り繕っていた姿と——今の、金のために命を散らす行動。そこに矛盾を見出して、混乱した。

おれはどれを通せば良いのか、どうすればいいのか。気がつけば声が震えているのに気づく。

自分の取り繕いの思考を自分で論破できてしまうのにも関わらず、思わずでてしまった言葉に、にわかな後悔を覚えていた。

自分というものを見失い始めている。

たかが、モンスターと対峙しただけで。

仕事を与えられた時点で、こういう状況が来るということが分かっていただのにも関わらず。

——考える間に、ラアビが動いた。

狼がそれに大して反射的に跳び上がる。鋭い爪と爪とが振り薙がれて一閃が走り、二つの影が交差する。

ほぼ同時に両名は着地して、直後に切り裂かれた腹部から鮮血を吹き出して、脱力するように狼が倒れた。

一瞬の出来事だ。

先程まで生きていた狼が死に、そして血に濡れることすら無い速度で振られた鉤爪を腕からはずして、ラアビは再び袖ごと垂らし、腕を組む。

死骸を目の当たりにするジャンへと彼女は振り返って、明らかにまでに嫌悪感を表す表情で、彼を睨みつけていた。

「わかったわ、君は八方美人タイプね。誰からも嫌われたくないから、誰にでも良い顔見せて。差別なく接するからある程度は仲良くなるけど、誰も持ちあげないからそこで終わり。つまらないヒトね、君は」

「……」

沈黙し、俯くジャンに舌打ちが響く。

さらに追撃が来た。

「そんな甘ったるい事考えてんなら、今すぐ剣を置いて国に戻りなさい。学校なんてやめて、平和主義唱えとけばいいわ。あの国だか

ら二、三人は賛同してくれるでしょ」

ずかずかと大股で歩み寄り、狼が作った血溜まりを踏みつけて水の弾ける音を鳴らして、ジャンの目の前に立ちはだかる。無言の彼の胸ぐらを掴み上げて、息が掛かる近さまで顔を引き上げさせた。

「君の剣は、まさか」誰かを守るため」なんて馬鹿つたらしい事を理由にして腰に提がつてるわけじゃあないわよねえ？」

全てを押しつぶすような威圧に、心がまっ平らになってしまふのを彼は感じていた。

「お、おれは——」

食い下がるように、彼女は言葉を遮って額をぶつけた。

「剣は飽くまで何かを傷つける、打倒するための道具に過ぎないわ。誰かを、何かを守るなんてのは結果でしか無いし、それは剣じゃなくて使い手にすぎない。どう？　ちがう？」

あと一押しだと思う。

彼の中で、あと一度だけ背中を押してもらおうようなきっかけが必要だった。

今の経験は凄まじく自分を変えてくれる。

彼女の言葉が全て図星なだけに、されどそれまでの自分を捨てるにはあととは行動するためのきっかけが要るのだ。

ジャンは軋む首を何とか動かして頷く。

ラアビは乱暴に彼を突き飛ばすと、腰に手をやり、見下すようにジャンを見た。

「どこまで甘ったれてんのよ」

冷たく突き刺さる言葉に、ドクン、と心臓が高なった。

まるで心を見透かされているような気がして、頬が熱くなるのが良くわかった。

羞恥だ。そして同時に、自分がどうしようもなく軟弱で情けないのが理解できる。

「きっかけは自分で作るものよ。さあ、今」すべきこと」とどうしたら良いか」、君はわかるでしょう？」

——濃厚な血の匂いが広がり始める。

それは空気に乗って、林の中へと入っていったのか、ラアビは背後に強い気配が現れたのを覚えていた。

一つという単体ではなく、三つ以上の複数の気配。殺気。

歩きたびに、どすんと地面を揺るがす質量に巨体。

それは恐らく、今回の目的たる敵だろうと、振り向かずに彼女は認識した。

「お、おれは——」

腰の剣に手をかけ、こなれた手つきで白刃を閃かせる。

声は震える。

自分のしていることが正しいのかわからないし、心が本当に、今の行動に賛同しているかも不鮮明だった。

だが、今すべき事はこれである。

それだけは、決して間違えては居なかった。

「おれは、戦います」

「住処を荒らされて、怒って抵抗している罪のない動物よ？」

悪戯っぽくラアビが訊いた。

ジャンは首を振って否定する。

「無理が通れば道理が引つ込む。おれはそれを両立させる事はできないし……何も傷つけないで生きていくことなんて、おれには出来ない」

綺麗事で生きていけるほど、この世界は綺麗じゃない。

裸足で歩いて無事で済むほど、この世界は安全じゃない。

自分で理解していたことだ。経験したことだ。

ただ、そんな理不尽に悲しい出来事を忘れて——否、忘れようとして、彼は自分の中に決定的なまでに綺麗なものだけを残そうとしていた。

今それを完全に変えることはできないし、今の決意も、いずれ揺らいでしまいかもしれない。

だが、今は戦うと決めたのだ。

ならばせめて、その今だけはそれに従おう。

ジャン・スタイルはそう考えた。

ラアビは少しだけ表情を緩めて、踵を返す。

振り向いた先に居たのは、彼女より遥かに大きい——クマの姿だった。

クマの咆哮。

ビリビリと肌を震わせる衝撃の中で、ラアビは大地を弾くようにクマへと肉薄した。

鉤爪による一閃。大地に這う程に深く沈んで、地面を蹴り飛ばして懐へと飛び込んだ。

「グオオオオオツ！」

刹那。

無防備に攻撃の予備動作に移行した彼女へと、およそ通常のクマよりも遥かに俊敏に動く右腕が影に目掛けて振り下ろされた。

が、彼女も反射神経で攻撃へと転じていた左腕を引き上げて鉤爪を腕に叩き上げる。間もなく腕は弾かれて、打ち合った故に生じた衝撃が腕を震わし、動きを鈍くさせる。

その最中に、左腕が振り上げられた。

懐に飛び上がったラアビを切り裂かんとして——彼女は空中で力一杯足を伸ばした。そう思うと、足は伸び切らずにつま先が何かに触れて、蹴り飛ばし、さらに飛び上がってクマの頭上へと飛び上がった。

機敏な機動。

頭の上で逆立ちする彼女は、そのままクマの首筋に鉤爪を当てて、軽く掬うように腕を引く。

引き締まった筋肉と、頑強な骨の抵抗を覚えながら、ミチミチと肉が引き裂かれる音がして、鮮血が迸る。切り裂かれた喉元からはあふれた血が泡となって吹きこぼれて、首は中途半端に半ばまで引き剥がされたかたちで、ぶらりと垂れた。

彼女は倒れかけるクマを蹴り飛ばして体勢を整えて、すぐ背後に回り込んでいた敵へと切迫。

意表をつくように鉤爪を振るい、一閃。冷たい刃は優しく鼻先に触れて、食い込み、決る。すると鼻の皮膚は肉ごと豪快に引き剥がされて、

「ゴオオオオオオオ——ッ!!」

断末魔。

それは衝撃を伴って、眼前のラアビの腹に突き刺さった。

「……るさいっての!」

全てを喰らい尽くすように大きく口を開ける顔へと、頭上から腕を振り下ろして強引に口を閉ざさせる。鼻を切り裂いた手を振るって喉を穿ち、彼女はまたクマを蹴り飛ばして、それからようやく着地した。

大きく息を吐く。

やれやれと、額に浮かぶ汗を拭うような所作の中。

ジャンの遙か前方。そんな彼女の、すぐ後ろで、その巨体は未だに本領を発揮できていないその図太い腕を振り上げていた。

「ラア——ッ」

声をあげようとして、それが無駄だと悟る。

もう間に合わない。声が届いて、彼女が背後に気づいて、それから反応して……それではとても間に合わない。あの位置、既にクマの射程圏内で、背を向けている為に致命傷は避けられない。

”どうすれば良いか”——考えるまでもなく、彼は殆ど無意識に、ソレを発動させていた。

「発現^{めん}、め、ろおおっ!!」

衣服の、背中部分がはじけ飛ぶ。

そうしてあらわになる背中いっぱいに刻まれた魔方陣は眩く閃光を放ち、そうしてそのすぐ後ろに、波紋するように同様の魔方陣を重ねてに出現させた。

——その直後に、全ての動きが緩慢化した。

感覚が鋭敏になる。

クマの、腕を振り下ろす行動が止まって見えて——ジャンは大地を蹴り飛ばし、加速した。

風を切り裂き、見る間にクマとの距離が縮まるのを感じる。今までの全てを挽回するように、やがてジャンは、気がつけば敵の目の前へと回り込んでいた。

「うおお——」

切り上げる一閃。

だがソレは、殆どクマの目に映る事無く攻撃が終了した。

腕は半ばから切り裂かれて、未だ血も吹き出ずに切断面はまだ肉をあらわにし、綺麗な筋と骨の断面を見せていた。

「——おおおおおっ！！」

さらに一閃。

跳び上がり、その頭部から縦に振り下ろす剣戟。

斬り伏せると言うべき行動だったが——。

ジャン・スティールのしたこの上なく信じる正しい行動が終えた瞬間に、彼が体感する時間は通常通りに流れ始めた。

鞘を収め、クマを前にした彼が、

「……っ!？」

そのモンスターの頭が、腕が不意に爆発したのを見たのは、その直後のことだった。

魔方阵の輝きは失せて、効果は消え失せる。反動として肉体には既に立っていられるはずもないくらいの疲労が襲いかかっていたが、ソレよりも、目の前で爆ぜた対象に彼は目を奪われていた。

クマにとっては一瞬の出来事だ。つまりはそれほどの速度で腕を切り裂き、頭を打ち碎いた。全ては斬撃だったが、その威力は碎き散らす爆撃に等しかった。入刀する一閃がの衝撃がその体内で伝播し、肉体は耐え切れずに破裂したのだ。

ジャンは全身にクマの返り血を浴びてから、ややあって跪く。

まさか今日に限ってこの魔術を発動させるとは思っても居なかつ

たが——そのおかげかも知れない。

色々と吹っ切れた。

彼は確かに、それを感じていた。

「頑張ったじゃない」

水筒を傾けて蒸留酒を口に含んだラアビは、まるでこうなることを知っていたかのように告げた。

「これでも本当に殺すのがイヤだとか言うのなら、世界を変えなさい。できないなら自分を変えるの。わかった？」

「はい、もう、十分なほどに」

「君はもつと世界を知ったほうが良いと思うのよ。騎士になるんだったら」

「あの……」

「ん？」

袖で顔を拭い、なんとか四つん這いから中腰へと体勢を引き上げた。

見上げる形でラアビを見れば、先ほどの怒りはどうやら消え失せてくれているように見えて、ほっとジャンは安堵する。

「また、一緒に仕事を受けてくれますか？」

「……うははは！ 君はヘンタイ？ あんだけ怒鳴られて、それでもあたしと仕事したいの？」

「おれ、もつと頑張りますから」

「はははっ！ いいわね、いい目になってるわよ。どうせヒマだもの、ヒマだから、君が誘ってくれるならいつでもいいわよ」

ポンポン、といつもジャンがそうするように、ラアビは知らずに彼の頭を叩いてみせた。

それから彼に背を見せるように歩き出して——歩けぬほどに疲弊してしまっているのを知ってか知らぬか、数歩ほど離れた所で立ち止まった。

「早く帰らないと、陽がくれちゃうわよー」

「ちょ、待ってくださいよ……」

ガクガクと膝が震え、歩こうとすれば足が動かず、前のめりになって倒れてしまう。また起き上がるうにも、腰が痛くて半身が起こせない。

今すぐにでも眠りにつきたい。そう思いながらも、彼は歯を食いしばり、唸りながら立ち上がると――不意に腹に違和感を覚えて、そうして身体は大地から引きはがされた。

視線の位置が高くなる。

ジャンは、ラアビに担がれていた。

「たく、これで報酬が半々なんだからやってられないわよねえ」
すっかり酔いが覚めてしまったように、彼女は深々と嘆息した。

「ごめんなさい……」

「いいわ。それじゃ、ギルドのツケを払ってくれる？」

「い、いくらですか？」

「金貨一枚と、銀貨五〇枚くらい」

「……いくらなんでもふざけんな！」

「うはは！　これで愛想笑いで済ませたらどうしようかと思ったわよ」

なんだか妙なまでにご機嫌に彼女は笑って――街に到着するのは、ちょうど西の空が赤く染まり始めた時刻だった。

ねこの夏、嫉妬の空

「最近、ジャンくんが妙な女と歩いているのをよく見るわけよ」

「ほうほう、くわしく」

「いいわ、よく聞いてなさいね」

猫は尻尾をぱたぱたと揺らして床を叩きながら、目の前で膝を立てるように座る赤いワンピース姿の少女に告げる。

そこはジャン・ステイルの私室であつたが、彼が夏休みに入つて以降ヒマになったタマとノロの溜まり場と化していた。週三程度で彼は日中は外出して夜まで帰つてこないのので、その事実を部屋の主は知る由もなかった。

ふかふかの寝台の上で、タマは布団を叩いて抗議でもするように興奮気味の口調で説明した。

「あの女！ あれのせいでジャンくんが最近構つてくれないのよ！ カリカリくれないし！ べちゃべちゃの魚は美味しくないのよ！」
「ほうほう」

ノロは言いながら、蓋の開いたツナの缶詰をタマの前に取り出して、そのままフォークで掬い、持ち上げる。タマは誘われるように器用に二本足で立ち上がつて、不安定な動作で空中を掻き巻く。だが、頭上のフォークには前足は届いていなかった。

彼女は反射的に餌を追ひ求めてしまうタマを弄びながら、この上なく興味がなさそうに訊いてやつた。

「その女とは」

「あ、そうそう！ なんかねエ、こう、頭にウサギみたいな耳くつつけて、下半身が立ち上がったウサギみたいな毛皮の、あたしみたいに完璧な獣人化も出来ないくそつたれなウサギよ！」

「それで？」

「ジャンくん、家にいる時より楽しそうな顔してたのよ……っと！」
布団を弾いて跳び上がる。が、反射的に腕を引くと狙っていたフ

オークはタマの眼前から消え失せて、そのままノ口を飛び越えて背面に着地する。短い舌打ちを鳴らすタマの頭を撫でながら、ノ口は飽くまで表情を変えぬまま、頭を撫でてやりながら目の前に缶詰を差し出した。

「ばあ、つと先ほどの憤怒が嘘のように表情が明るくなる。

さすが猫。」

彼女はそう思い、ガツガツと缶詰に顔をつ突っ込んだタマを見下しながら、顔に軽くかかった長い銀髪を後ろに流した。

「わたしも、近頃構ってもらっていない。友達なのに、無責任」

「これは由々しき事態よ。あの思わせぶりの馬鹿に鉄槌を下す時が来たわ」

「作戦、開始」

「サニーも起こしていくわよ！」

ヒマなのと、無駄なまでに積極性の強い事も相まって、壮大な勘違いのもとで行動は果たして開始した。

「いい加減、酒飲み過ぎなんじゃないスか？」

ギルドを出てからすぐに平たいの水筒を口につけるラアビに、ジヤンは呆れるように言った。

かれこれ一週間、彼女に鍛えてもらいながら仕事をこなしてきた街の中で、体の不自由な老人のために買い物をしたり、あるいは届け物をしてきたり。あれ以降の戦闘は無かったが、それでも今までには無かった体験は、彼にとつて貴重なものになっていた。

自分の知らない、住民の生活が垣間見える。それが妙にうれしくて、自分が世間と関わっているという証になるようで楽しかった。「いいのよそんな量ないし。というか、今日はもう仕事もないし、帰れば？」

彼女は、ほつと胸から大きく息を吐き出して肩を落とす。

最近ろくに仕事をこなす人間が居ないという話だったのだが、ジヤンらが熊を三頭退治してみせてから、そういった怪物退治の仕事

が増えたのだが——それを待っていたとばかりに、館で待機していた旅人がこぞってそれを奪い去っていったのだ。

それでもそうそう間を置かずに来てみたのだが、やはりろくな仕事はない。

資金も溜まってきているから、無理に仕事をする必要もないのだが……今日で一週間目だ。いい加減、あの時の情けない姿を払拭したいと、ジャンは思っていた。

「そんな寂しいこと言わないでくださいよ。むしろ、仕事も無い日に、初めて会ってるんですよ？」

「別に好きで会ってるわけじゃないけど」

いつものように外套の下で腕を組むラアビは退屈そうに言ってから、静かにその言葉の後を追った。

「じゃあ、君を育てたお礼に何か奢ってくれる？」

今まさに思いついたような台詞だった。

そこで同時に、そうか、とジャンも手を打った。

今日は仕事もないからどうしようもないが——ならば日ごろの礼という手があった。

ここで、決定的なまでにどうしようもない糞ガキだと思われているイメージを、なんとか変えられるかもしれない。

「そうですね、ちょうど昼頃ですし……でもおれ、ここら辺の店ってあまり良くわからないですよね」

「そうねえ、街並みはすごいけど都市って感じじゃないからあたし自身もこの街をあまり見回らなかったから知らないんだけど——あったわ、一つだけ、とっておきの」

「ラアビさんが良ければ、そこに行きませんか？」

「うはは！ そうねえ、いいかもねえ！」

誘ってみると、ラアビは嬉しそうにジャンの頭を撫でるように叩いて、歩調を早めた。

ジャンはそんな喜んでいる彼女にほっと胸をなでおろしながら、強い日差しの中、額に浮かぶ汗を拭いながらラアビの後を追うよう

についていった。

「ほら、アイツよ」

タマは物陰から、仲睦まじく往来を歩く二人の姿を指してみせた。妙に艶艶しい肌で傍らに屈むノ口は、つい先ほど、制限時間的な問題で選手交代してきたがためだ。先ほどとは違うノ口だが、記憶と意識は共有されているためになんら問題はない。

「ラアビか」

「あんた、知ってるの?!」

「聞こえた」

「…… すぐえ役に立つじゃないのよ」

飛び上がって、タマはノ口の肩に乗る。

サニーは既にクロコやアオイと出かけてしまった後だから誘えなかったし、テポンは新しく買ってきた魔術書にかじりついていて、お手伝い三人衆も相手にしてくれない。トロスが唯一の希望だったが、彼も彼で家には居なかった。

だから、この追跡は二人と形容すべきか、二匹と形容すべきかわからぬ兩名のみで行われることとなっていた。

もちろん、その対象二名には気付かれては居ないが、その微笑ましい組み合わせは通りすぎる人々には良く目立っていた。

彼女らはそうとはつゆ知らず、まさに自分たちは透明になったつもりで、影に隠れながらその後についていった。

「あんで会話してんの?」

舌っ足らずっぽくタマが訊く。ノ口は頷き、聞いたままに口にした。

「『おれ、ラアビさんと出会ってから世界がかわったような気がします』『へえ、じゃあもうあたしナシじゃ生きていけないくらい、骨抜きにされてるわけね』…… など」

「にやんですとおっ!?!」

「『…… まだ昼間ですよ。いくらなんでも早いんじゃないですか』

『いつもそうじゃないのよ。ソレに、今日は君がもてなしてくれるんでしょ？』……だとか」

「やつろあ……もう、そんな不快、もとい深い関係に……」

もふもふの毛皮を逆立たせて、倍近くに膨らんだ尾は針金でも入れているかのようにいきり立っていた。彼女の興奮は隠せるものではなく、鋭い爪はノロの肩に食い込んでいたが——肌は切り裂かれること無く、逆に腕をそのまま飲み込むように、柔軟化していた。

そして対照的に、ノロは楽しんでいた。

表面上にはひどく冷めた様子だが、敢えて切り切りに台詞を紡ぐことに寄って、タマは面白いように情報を鵜呑みにしてくれる。滑稽だ。ジャンはからかえなかったが、彼女は違う。

もっともその行為は悪意に満ちたソレではなく、結局のところ、タマも本気で憎んでそうしているというわけではないことを知っているから、ならば自分も少くくは楽しもうという思考のもとで行われていた。

「あたしの事は遊びだったんだ！ あの泥棒うさぎめ！」

「はっは、ゆかい」

「面白くにやいわよ！」

「ははは」

それから南区の大通りから、ちょっとした路地に入る。

二人はそれを見送ってから、タマはあんぐりと大きな口を開けて、二人が入り込んだ店の看板を見上げていた。

木で出来た、店先に飾られるソレ。看板たる板にはグラスから内容物の液体が溢れている絵が刻まれていて——それは酒場であることを教えていた。

「酒場じゃん！」

「そうです」

「なんか、休憩用の宿屋かと思っただのに！」

「脳みそ不純物で、出来てる」

「っさいわね、ヘンな会話聴かせるからよ」

「理不尽」

バンバンと両手で素早くノ口の頭を叩いてから、前に居直って扉を指し示す。

「中に入りなさい」

馬鹿だ。

思わずそう零れそうになった。

「馬鹿だ」

思わずそう口にしてしまった。

「なっ、あたしに何の恨みがあるのよ……」

「目立つ格好。気付かれるのは、確定的に、明らか」

ここは酒場だ。

明らかなまでに子供の容姿であるノ口がその中に入る事自体が異様なのに、さらに目立つ赤いワンピースにサンダル。透き通るようにきらめく銀髪。その上で、何かの冗談のように肩には三毛猫が乗っっていて……そんな少女が店に入れば、酔っぱらいはいよいよ幻覚が見えるほどに酒が回ったかと思うだろう。

いくら感情的になっているからとは言え、そこまで頭が回ってもらわねば命取りだ。

彼女が魔法を持たず、あるいは持っていたとしても、騎士の学校に入学していなくてよかったと思う。こいつが騎士になったら国が滅びてしまうだろう。

かなり頭が馬鹿だ。頭腦的な意味で。

ノ口は酷烈に、タマをそう評していた。だが嫌いじゃない。同時にそう思った。こいつは楽しめる馬鹿だ。ネコだけど。

「そっ、それじゃ、どうするの？ あんたが考えてみにゃ、さいよ！」

「ここで、ジーニアスなわたしは考えた」

ノ口は得意げに人差し指を立てる。と、その指は瞬く間に赤黒く

変色して、うねり、粘土細工のようにうようよ見えざる手で加工されているように伸びて、触手状に変異した。

手を扉に向けると、地面と扉とのほんの僅かな隙間に、ねじ込まれるように触手が中へと忍びこむ。彼女はそうして扉の脇の壁を背にして膝を立てて座ると、タマはそのまま膝の上に乗ってきた。

「ノロってなんでもありだよねエ……」

「照れる」

タマの喉を掻くように指先で撫でながら、暫く待機。

そうすると、ややあってから、ノロは自主的に口を開いた。

「声を認識した」

「聞かせて！ レッツ！」

「ストーカー気質」

「いいから、レッツ！」

ノロは珍しく小さなため息を漏らす。

そうしてから、仕方なしに聞こえてきた言葉を伝えてやった。

「やっぱり、蒸留酒だけじゃ飽きるわね」

ラアビはご機嫌な表情で樽のようなジョッキを傾ける。中身はぶどう酒であり、蒸留酒よりアルコール分が低くて飲みやすいソレだった。

小さな円卓に向かい合わせになって座る二人は、それぞれ軽食じみたパンや干し肉、それにちよつとしたサラダを並べて、それぞれぶどう酒を煽る。

周囲は、ギルドをひと回り小さくしたような空間であり、満席ではないものの、客が多く賑わっている。

その中でラアビはポケットから出したメモ帳を広げて、筆記した。――さっきからついてきている子はだれ？

「確かに、会ってから他の酒を飲んでる姿を見たことないですし、干し肉を喰えながらペンを受け取り、下に綴る。

――ノロっていう、友達です。ちなみに肩に乗ってたネコは獣人

です。

「でも、ここのぶどう酒は特に美味しいのよ。ほら、君もたんとお飲み？」

——君に用なんじゃないの？

「ええ、頂いてます」

ゴクリ、とわざとらしく喉を鳴らしてぶどう酒を一口飲み下し、大きく息を吐いてからペンを手に取った。

——たぶん、ラアビさんとの関係を何か勘違いして、ストーキングしているみたいです。遊びみたいなのですよ。

芳醇な甘い香りが鼻から抜ける。

確かに、城で飲んだものよりいくらかレベルが高そうなソレだった。

彼はそのままサラダにフォークを突き刺して頬張ると、ゴクゴクと天井を仰ぐようにぶどう酒を飲みながら、手元を見ずに文字は綴られた。

——勘違い、ねえ。

それから言葉を交わしながら、食事を進める。筆談はそれ以降行われず、彼女が一体何を聞きたかったのか、何を考えたのか、結局のところジャンにはわからなかった。

やがて皿が空になる。

何杯目かになるぶどう酒も、そのジョッキの中身が空になって、ラアビは腹をさすって満足そうに息を吐く。微笑を浮かべ、また天井を仰ぐように口を開けた。

「美味しかったわあ」

「ええ、軽食だと思ってましたけど、食事も結構美味しいですね、ここ」

「それで、お腹もいっぱいになった所で——」

「『——デザートとして、君も食べちゃおうかな』と言っている」「ファック！ 我慢ならないわ！」

タマは牙を剥いてノ口を足蹴に、力一杯空中に飛び上がったかと思つと――不意にその四本足が伸びて胴の部分にメリハリのある起伏が生まれ、四肢が肉球をそのままに巨大化する。

彼女は瞬く間に人型へと変身すると、ノ口が静止するよりも早く、酒場の扉に足を向けて、膝を胸に引きつける。そうしてからすべての力を解放すると、足先は力一杯扉を蹴破つて――凄まじい破裂音のような破壊音が周囲に響き渡つた。

扉を固定していた金具がひしゃげて、その巨大な板は空中をくるくると舞つて床に叩きつけられる。

酒場のざわめきが、一瞬にして消え失せた。

彼女が大腿で中に入ると、まず目に入ったのが、

「ジャーンッ！」

しなやかな指先で顎を掴まれ、その息のかかる程の距離に顔を近づかせているラアビとジャンの姿だった。

「あんだ、あたしにちよつと期待させておいて、こんなトコでにやつてんのよ！」

ズカズカと大腿で円卓に歩み寄り、そうしてテーブルに両手を突く。バン、と盛大な音がして、木で出来た食器がにわかに弾んで机を叩いた。

「なんだ、タマか」

「にゃあ！」

迸る一閃。

肉球は、ジャンがその切迫を認識するよりも早く、意識の外から顔面に叩きつけられた。

少し硬度のある角質。そしてその中には、程良く柔らかい脂がクッションになっている、独特の感触。お日様の匂い。

麻薬的な効果によって、ジャンはこの状況でも尚自分を見失うことができていた。

「うわあ、肉球……」

「駄目だ、話にならないわこのバカ」

腕を引き剥がし、茫然とするジャンをよそ目に、今度はラアビへと目を向ける。キツと睨みつけると、席に座りなおしていた彼女は偉そうにふんぞり返って、足を組んで、頭の後ろで手を組んでいた。

「あんだ。あんだでしょ、ジャンをたぶらかしたの」

「たぶらかしたって……随分と人聞きが悪いわねえ」

「泥棒どろぼううさぎ！」

「それじゃあ、アナタと彼は、男女の関係として付き合っていた訳？」

「そ、そうじゃないけど……」

思わぬ反撃に、彼女は言葉を失った。

突かれたのは一番の弱点だ。ここを見抜かれてしまえばここに来た事に対する正当性が失われてしまう。

残るのは、ただ思いついた一匹のネコだけだ。くすぶり、あらわになった嫉妬にひたすら羞恥するしかなくなるのだ。

そんな事、許して良いのか。

そんなことさせない——させてたまるか。

百グラム程度の脳みそが、その時点で最大限に思考を回転させていた。

言葉が溢れるように生まれでて、選択し、文章を構成する。整合性を以てして判断し、適切でなければ切り捨て。再選択。

刹那の刻。

心臓が一つ鳴るその最中に、タマは反撃した。

「うるさいビッチ！」

それは全てを終了させるのに十分すぎる言葉だった。

悲しきかな、人の肉体でネコの脳みそを持つ彼女には、深く思考するに値する質量を持ち合わせていなかった。もっとも個人差はあるけど、彼女は特に感受性に特化した造りを持っていたが故である。

「……くっ」

小さな、うめき声にも似た何かが聞こえた。

その直後だった。

「うはははッ！ おつもしろい娘じゃないの！ いいわねえ君は、こんな娘に囲まれて生活できて！」

いかにも愉快気に腹を抱えて笑うと、目尻に浮かんだ涙を払い、立ち上がっておもむろにタマの頭を撫でる。警戒するように尾がピンと逆立ったが、妙に手癖のいい慣れた手つきに、理性とは別に、本能が彼女をリラックスさせてしまった。

尾が垂れる。

そうして徐々に、頬が赤くなるのを隠すようにタマはその身体をどんどん縮小させていつて——やがてネコに戻っていった。

ラアビは構わずタマを抱き上げて胸に抱え、喉を撫でる。ゴロゴロと喉を鳴らしたタマを眺めて、ジャンは嘆息しながらも、微笑むことしか出来なかった。

なんだかなあ——そう思いながらも、心が満たされていくのを感じていた。

確かな充実感。体を動かし、自分が強くなっていくのを実感するのは大きく異なる、そんな幸福感が胸の中に広がっていた。

ラアビは良く面倒を見てくれるし、戦闘面でも良く鍛えてくれる。そしてこれまで出会った多くの人も、随分親切だ。

「そろそろ、腐るから」

いつの間にか酒場に入ってきていたノ口は、脇から不意にそう声をかけた。

「ああ。なんだか、タマが迷惑をかけたみたいで悪かったな」

取り繕う程度の謝罪をすると、ノ口は首を横に振る。銀髪は薄暗い照明の中でも鮮やかにきらめいて、その顔立ちは品の良ささえも伺わせていた。

「構わない。楽しかった」

「そうか。そりゃよかった」

「今度は、遊んで？」

ジャンを指さして首を傾げる。彼はソレに、小さく頷いて笑みを作った。

「ああ。今度遊びに行くよ」

「ぜったい？」

「もちろんだ」

「じゃあ」

彼女は軽く手を上げて別れを示す。ジャンもそれに応じて手を振ると、そそくさと、静まり返る酒場を後にした。

そうしてジャンもざっと酒場の中を見渡してから――タマに夢中になるラアビをよそに、カウンターへと向かって、無言で金貨一枚を差し出した。

「扉の修理代、これで足りませんか」

「ああ、気にしなくてもいいのに」

気の良さそうな中年男性は困ったようにそう告げながらも、カウンターに置かれた金貨に手を伸ばし、それをポケットの中に収めた。マスターたる人間はどこかクセがなければやっていけないのだろうか。彼はそう思いながら、それ以上面倒なことに巻き込まれない内に、とノロの後を追うようにその場を辞した。

タマが全身の毛を滅茶苦茶なクセを作って帰って来たのは、その日の深夜の事だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1050x/>

続・knight of monster ナイト・オブ・モンスター

2011年10月21日03時10分発行